基督教の起源

文學士 波多野精一 著

東京 警醒社書店

明治
41 10 16
寄内

はしがき

本書は余が前學年『原始基督教』といふ名にて東京文科大學に於て(一部分は早稲田大學に於ても)なしたる講義に多少の修正を加へたるものなり。基督教神學や宗教學の正式の教育を受けたことすら無き余が大膽にもこの稿を公にするに至れるは未だ邦語にて專門學者の良書を見ざるが故のみ。不完全ながらも基督教に關して學術的知識を要求せる教育ある人士の研究の指針ともなり得ば余が望叶はむ。

本書は學術書なり。換言すれば、基督教の發展の基礎をなせる其の原始時代を歴史的批評の立場より叙述せるものなり。さればとて原始基督教に關するあらゆる重要なる事實と問題

と學説とを網羅して一々詳細に論究せるものにあらず。余はむしろ講義と研究とは明かに區別せざる可らずとのかねての持論に基いてよき意味に於いての通俗を旨とし、要點に特に力を用ゐて專問的材料の臚列に了るを避けたるは勿論、問題をなるべく簡單にして非專問家にも理解を容易ならしめむを力めたり。

今日基督教の歴史を學ばむとする者は獨逸の學界に弟子入りせざる可らず。余が其の諸大家、就中ブッセット(Bousset)、ドブシュッツ(Dobschütz)、ハルナック(Harnack)、ハインリヒ・ホルツマン(H. J. Holtzmann)、ユーリヒェル(Jülicher)、クノップフ(Knopf)、フライデレル(Pfleiderer)、ヨハンネス・ヴァイス(J. Weiss)、ヴァイツゼッケル(Weizsäcker)、ヴェルハウゼン(Wellhausen)、ヴェルンレ(Wernle)、ヴレーデ(Wrede)、ツァーン(Zahn)の諸氏に負ふ所甚だ多きは言ふまでもなし。まかも本書が全體に於ても部分に於ても多少の特色を發揮し得たるは余のひそかに信ずる所なり。

明治四十一年八月七日　著者

基督教の起源目次

第一章　猶太教……一
律法……三
一神教……一七
終末觀……三六
第二章　イエス……四三
史料……四三
事蹟……五八
福音……七四
第三章　イエルサレムの教會　ペテロ……一三三
第四章　パウロ……一六五
事蹟……一六五
神學……一九七

第五章　第四福音書……二四七
著　者……二四七
目的及特質……二六九

基督教の起源

波多野精一著

第一章　猶太教

猶太教は、バビロン廻囚（紀元前五八六――五三八）後に發展したるイスラエルの宗教である。イスラエルの南北兩王國のうち、北の王國は既に七二一アッシリアに滅され、住民の大部分は捕虜として拉し去られかしこにて土着の民と混じ、その宗教その風俗を失つて全く歴史より消え失せた。之に反して、百有余年後バビロンの及に斃れた南の王國ユーダは廻囚中その宗教を固持し、ペルシアの世となり歸國を許されてよりは、イエルサレムを中心としてその特殊なる宗教的發展を遂げた。かくして

猶太教は基督教の準備

現はれたのは即ち猶太教である。

猶太教は基督教の母である。後者は前者の脈管に通へる優秀なる生命を受け、同時にそを害する幾多の病毒を除き去つて、その生命を自由にし又完成した。かく純粹となつた生命は偉大なる人格に現はれて、新しき力を得、新しき發展を遂げた。骨髓までも病毒に犯された母は、己より發ししかもかく特殊の性格を發揮し來つた、健全なる活氣にみち〳〵た新生命を解し得なかつた。己に優つた子の個性を承認が出來ず、却て妬み憎み敵視した。かくて兩宗教は全く分離し、基督教は獨立なる新宗教として立上つた。然し猶太教は矢張その母たるを失はぬ。その健全なる點に於ても不健全なる點に於ても、積極的にも消極的にも、基督教の準備をなした。其故に、基督教の起源及特質を理解せむとするものは先づ猶太教を知らねばならぬ。吾人は、イエスの現はれた時代を中心として、こゝに數項に分つて、その特質を考察しやうと思ふ。

律法

律法は猶太教の基礎

猶太教の基礎は「律法」である。猶太人は「律法」に於て神の聖なる意志を見た。眞の宗教と僞の宗教と、又た神の撰民と他の凡ての民族(異邦人)とを區別するは律法と考へられた。律法の內容は甚だ複雜であつた。道德もあれば法律もあつた。しかしその中心は猶太人の國民的特色、その風俗習慣であつた。

律法の中心は風俗習慣

神殿の祭事

バビロンの虜囚より歸り來つた猶太人はもはや政治上獨立なる國民ではなかつた。彼等の建てたのは國家ではなく神殿であつた。宗教は國家的生活と分離して全く神殿の祭事となつた。祭事は國民的生活の粹であつた。此時代の詩(例へば詩篇二七、四二、四三、八四)がいかに切に、いかに眞心から、神殿と祭事とをたゝへ、よろこび、慕へるかを見ても、敬虔の向うた所は明である。かくて祭司は次第に勢力を得、貴族の位置にのぼり、僧俗の區別はまず〳〵甚しくなつた。

祭司の世間的位置の高まるにつれて彼等は俗化した。紀元前第二世紀に至つてその傾向は頂點に達した。彼等は四圍より襲ひ來る希臘文明の侵入に抵抗し得なかつた。腐敗したる彼等の黨爭はシリア王アンティオコスの干渉を呼んだ。さらぬだに己が支配のもとにある諸民族の希臘化を力めつゝあつた王はイエルサレムに來り、神殿を占領し、その一部分を破壞し、祭事を禁じ、ヤーヴェの祭壇をツオイス神に捧げむとした。この暴舉は忽ち國民の反抗を呼んだ。敬虔ふかき愛國の士は立つて干戈に訴へシリア人を放逐した。バスモン王家のもとにユダヤは羅馬人に併呑せらるゝまで、しばし國家的獨立を保つた。

このめざましき奮鬪に於て猶太人は單に政治的獨立の爲めに戰つたのではない。彼等の主なる目的は宗教の獨立であつた。その結果として希臘の勢力に秋波を送つた貴族黨祭司黨は全く國民の信任を失つた。宗教の主權は彼等の手を離れて、特に敬虔深き俗人の手に歸した。猶太教は平民的宗教となつた。それと同時に神殿の祭事より次第に遠ざかつた。パレスティナ以外の地方に於ける猶太人の繁殖、ディアスポラ（パレスティナ以外の地方に於ける猶太人をいふ）の隆盛、從て絶えず直接神殿の祭事にたづさはるを得ざる人々の增加も亦間接にこの傾向を強めた。この變化は奴隷が自由の市民となり小兒が丁年に達したるにも比ぶべく、猶太教の歷史に於て甚だ重要な事件であつた。惜いかな、偉大なる人格の缺乏は、猶太教をして、一の繩目を遁れてまた新しき縛めにうめくに至らしめた。政治的生活とは斷ち、神殿の祭事とは遠ざかつた宗教は、未だ全く精神的自由を得ず、未だ全く人心の深奧に徹底する能はずかくてつひに國民の風俗習慣と堅く相結ぶに至つた。

尤もこの傾向はすでに久しき以前虜囚時代に胚胎したのであつた。獨立なる國家的存在を失ひながら、上よりあたりより壓し來る他民族に併呑せられざらむ爲めには、國民の特色を神の意志とし、それを神聖視するは必要であつた。その必要は時と共に加はつた。猶太人は殆ど凡て他の尊かりしものを失つた。次第に國語をさへ失つた。さればとてイエ

ルサレムの神殿やその祭事はもはや國民の敬虔を繫ぎ彼等に滿足と慰籍とを與へ得ぬ。かくて殘れるは國民的生活の外的特徴のみとなつた。道德は異邦人とてもつて居る。之に反して風俗習慣に於て國民の特色は最も目立つて現はれて居る。かくて律法は猶太教の基礎となつた。

この律法は時のたつがまゝに、かの所謂モーゼの「五書」（舊約全書のはじめの五卷をしかづく勿論モーゼの手に成りしものに非ず）の規定のみにて止まるを得なかつた。一たびおのが領地の犯されぬやうにと建てた柵のまゝ（隣國以後の時代に屬する部分も少からず）堅牢ならむを望むはたゞ自然といふべきである。紀元前第一世紀に至つては律法は長足の發展を遂げ、その規定はまゝ〳〵煩瑣を加へ日常生活の些細の點にまで立入つて一々人の行動を支配するものとなつた。さて風俗習慣の方面に於て律法の基礎だるは割禮である。こは猶太人を他と區別する最も著しき特徴として最も重きを措かれた。それに聯關して異邦人との交際、結婚等は甚しく制限せられ或は全く禁ぜられた。其他、安息日の聖別、淨と不淨、飲食、食物の調理法、身體や器具の洗滌など百

般の事柄に關して一々綿密に規定せられた。

かくの如くもと無意識的に行はれた風俗習慣が神の命令として意識的に守るべきものとなり、その上まゝ〳〵煩瑣なる規定を加ふるに至つては、律法の宗教的意義は問題とならざるを得ない。モーゼの五書をはじめてその問題を解決せんといふ企は全くなかつたではない。然し數極りなき其等の規定に一々合理的説明を與へむは到底不可能であつた。とゞのつまり猶太人の與へ得る答は單に神の意志だから、神の命令だからといふに過ぎなかつた。かくて神はたゞ否應なしに盲從を要求する專制君主となつた。宗教は服從となつた。「死人が不淨なるに非ず、水が淨むるにも非ず、神が律法を定めたるなり。書き記されたる神の命令は何人も破る能はず。是律法の命ずる所なり」といふ、第一世紀後半の有名なる學者ヨナタンの言によつても、また、おのが敵なる祭司等を肥すのみと知りつゝも神殿に對する納稅を極めて嚴密に實行したるパリサイ人等（后に述ぶる如く模範的宗教家の名稱）の振舞を見ても、猶太教の精神は明かである。敬虔

宗教形式的となる

律法と道德律

ふかき猶太人がかこたず、つぶやかず、解す可らざる神意に從順なりしその眞面目なる態度は少くも吾人の同情を値ひする。然れども惜いかな、宗教的生命の萎縮はその必然的結果であつた。內容そのものに價値あるのではなく命令といふ形式のみが大切である以上は、宗教は勢ひ、機械的形式的となり、たゞ外形にのみ拘泥して精神を沒却し、つひに內部の生命の枯れ果てた遺骸となり易い。躰裁見え、僞善などのはびこつたのは自然である。

律法はもとより風俗習慣以外道德律をも含んで居た。然れどもその凡ての規定は雜然とうづたかく重り合つて居るのみで、系統なく秩序なく、從て中心と周圍、根幹と枝葉との區別は忘らるゝに至つた。是れ、命令及服從てふ形式にのみ重きを措き內容の價値に對しては無頓着なる宗教の必然的に陷つた弊害である。尤もかの、馬加傳十二の二十八に見ゆる、イエスに神の最高の命令は何ぞと問うた學者の如き、または、汝の欲せざる所は人に施すなかれ」の一言に律法の眞髓は盡くと說いたヒルレル

宗教利己的打算的となる

(Hillel)(イエスの少し以前に出たる人)の如き、人々はなかつたではない。然しそれ等は例外であつた。偶然にひらめいた光明はあたりの深き暗に徹する能はず、忽ち現はれ忽ち去る流星の如くに消え失せた。道德は頑頑なる數限なき命令のうちに埋れてしまつた。而して凡て形式的機械的のものは、守り易く內的精神的のものは達し難きが世の常ゆゑ、自然の勢として、風俗習慣は道德よりも一層重せられ、律法の眞髓なるかの如く考へられた。薄荷や茴香や馬芹などの十分の一の納稅は行ひながら、義と仁と信とは却て顧みぬが如き傾向は現はれた(馬太傳二三の二三)。

宗教が解す可らざる命令の盲從となつてからは、よろこび進んで神意を行ふといふ素直な心根は次第に消え失せる。盲從は報酬なしには滿足出來ぬ。律法の實行は人間の功となる。殊に律法は價値の差別なき無數の條項にわかれ居る故、敬虔は數字もて表はし得るものとなる。數の多きほど報酬を要求する權利は增す。敬虔は利潤を產出す資本となる。宗教は勢ひ利己的商買的打算的となつた。

神に對する眞の喜悅信賴なし

かくの如き弊害を別としても、猶太人はつひに神に對してほがらかなる、純なる、あふるゝよろこびを感じ得なかつた。げに神を父と呼ぶはイエスの時代には決してめづらしくは無かつた。第一世紀の猶太人はすでに日ごとに「われらが父よ罪を赦し給へ」と祈つた。然し父なる神てふ意識はつひに徹底しなかつた。その同じ祈(所謂十八ヶ條の祈)が父よと呼びつゝも直ちに「王よ」と呼びかへ居るにても猶太人の信仰の向ふ所は明である。

神は王

イエスが神を王と呼ばなかつたに反して、この名稱は猶太教に於ては最も普通なる觀念であつた。神は主、人は僕――これ猶太人に最も普通なる觀念であつた。神の意志は量り知る可らず、神の萬能は何事をも勝手氣儘になすを得。猶太人はこの近づき難き親しみ難き專制君主に服從するを神を愛すると名づけた。彼等は神の前には塵芥にも等しきを感じ、その萬能を畏れかしこみ、その尊嚴にひれ伏した。この「神の畏れ」てふ意識はたしかに猶太教の長處で、基督教の受けた遺産の最も貴きもの丶一である。しかしながら猶太人はつひに神の愛にこをどりし、

長神

律法と法律

猶太教は國民的黨派的

かちどきを擧ぐる無邪氣なる、しかもをゝしき信賴の高調にはのぼり得なかつた。彼等は沈鬱なる服從と「あきらめ」とにをはつた。

さて「律法」は主として國民の風俗習慣に存するが、既にいうた通り、又同時に國民の公私の生活を律する法律であつた。律法は結婚、親子の關係、主人奴隸の關係、所有權、貸借、租稅、刑罰等に關する規定を含んで居た。法庭が(少くもパレスティナに於て)是非曲直有罪無罪を斷ずる最後の標準はこの「律法」であつた。從て神學者は同時に法學者であつた。彼等はイエルサレムの高等法院に坐しその判決を左右した。

かく「律法」は風俗習慣といふ方面より見るも、法律といふ方面より見るも、國民的である。律法のこの特質は猶太人の宗教及道德をいたく偏狹ならしめた。律法に於てのみ神の意志が存する以上は、猶太人であつてはじめて神に仕へ得るのである。尤も廣囚以來宗教は先づ政治的生活と離れ次第に國民的の性質を脫した。異邦人間の傳道さへ盛に行はれた。世界的ならむとする傾向は明に現はれた。此點に於ても猶太教は

律法は禁止的消極的

基督教の準備をなした。しかしながらそはつひに世界的たるを得なかつた。遠心力はつひに求心力に打勝ち得なかつた。猶太教には人間そのものに同情し、人間そのものによろこびを覺え、人間そのものを重ずる氣風が殆ど全く缺けて居た。その德義は國民の範圍を超えては効力なき一種の黨派的德義、隣人を愛せよとのうるはしき訓も黨同伐異の偏狹なる精神を脱し得なかつた。猶太人を眞に猶太人たらしむる特色を神の最高の命令とあがむる宗教にそれ以上を望むは到底無理である。傳道の熱心もつまりは異邦人を猶太人に變じ、おのが黨の勢力と光榮とを增さうといふ黨派根性に過ぎなかつた。神は黨派の首領であつた。

「律法」が同時に公私の法律であつた事は他方面に於ても猶太教に少からぬ影響を及ぼした。凡ての法律と同樣に「律法」は主として禁止的であつた。從てその一部分なる道德律もこの特質を脱し得なかつた。猶太教の倫理はなすべき事よりもなすべからざる事に重を措いた。かのヒルレルの「汝自身人にせられざらむと思ふ事は汝も亦人になすな」といふ

言と、イエスの「汝自身人にせられむと思ふ事は汝も亦人になせ」といふ言(馬太七の一二)とを比較せばその意味に於て何の差別も無いやうに見える。しかもその精神の相隔れるいかばかりぞ。此消極的精神はたえず他國人の首木のもとに喘ぎあらゆる迫害を堪へ忍ぶになれたる猶太人には甚だ自然で又ふさはしいものであつたであらう。又その克己忍耐の精神はたしかに賞讃を値ひする。しかも、よろこび進んで善をなす活氣の缺けて居たのは亦必然の結果であつた。猶太人は戰々兢々神意に背かざらむをのみ思ひ煩ひ、進取の氣象を失つた。その宗教及び道德はあまりにせゝこましく、のびゝとした所に乏しかつた。

この事に聯關して、神の觀念も甚しく法律的色彩を帶ぶるに至つた。敬虔ふかき猶太人は神の前に「義」を得るを何よりも先に求めた。義とは罪なしの意である。神より罪なしといふ判決を得る、換言すれば、義とせらるゝ(Rechtfertigung, Justification)——これ彼等の切に望んだ所である。神は凡ての罪惡を容赦せざる裁判官、從て「義」は彼の最も主なる特性と考へ

られた。

神の義(Gerechtigkeit, Righteousness)てふ觀念は古のイスラエルの偉大なる豫言者等の賜物である。エリア(前九世紀)によつて準備せられ、アモス(前八世紀)はじめて明に唱へ出でゝより、その觀念はもはや再びイスラエルの宗教より失はれなかつた。イスラエルのヤーヴエ(Jahve エホバ)、ヤーヴエのイスラエル――他國民が各特殊の神を有する如く、古のイスラエルに於ては、ヤーヴエはイスラエルの專有物であつた。彼は國民と、斷ち難く殆ど血緣的に繫がれて居た。イスラエルがカナーンの土着の宗教の影響を受けて祭事や供物に重きを措くに至つては、ヤーヴエは祭壇とも不離の緣を結んだ。この全體の傾向に豫言者等は反對したのである。彼等はヤーヴエが依怙贔負の神ならぬを主張した。ヤーヴエは供物を要せぬ、又よろこばぬ。彼は祭事に垂涎し、深き緣故ある故を以て是非を問はずイスラエルをかばふやうな神でない。彼の要求する所は普遍的、道德的である、即義である。イスラエルにして若し不義ならば、ヤー

ヴエのしもとは直ちにその頭上に來るであらう。否、彼はアッシリアの暴威を借りてまさにイスラエルを懲さむとして居る。かくて豫言者等は渾身の熱血をそゝいでイスラエルの覺醒をうながし悔改めて神の正しき道にかへれと絕叫した。彼等の熱烈なる深邃なる信仰に於てヤーヴエは道德的の神となり、神と人との關係も亦道德的となつた。

神の道德的尊嚴、罪惡を假借せざるその義、罪惡と氷炭相容れざるその神聖、――これ豫言者等の宗教の眞髓である。是點に於て彼等は后の猶太教のみならず、又基督教の準備をもなした。

神の義の觀念は、虜囚後に至つて、やゝやさしき調べをかなで出るに至つた。神が罪惡と相容れず、そを懲す事には勿論少しのかはりもない。しかし「義」てふ觀念はその方面よりは、むしろ神に背かざる敬虔ふかき人々と神との關係に主として用ゐらるゝに至つた。かの所謂第二イザヤ(Deuterojesaia「イザヤ」書四十章以下をしかいふ)や「詩篇」に見ゆる義の觀念は即ち是である。是等の豫言者、詩人等は或は國民が囚人として他國にさすらへる時、或は

義はあはれみ

勢力家が俗化して敬虔ふかき人々を虐げ嘲り罵つた時、に出た。彼等は懲戒よりも慰藉の必要を感じた。彼等は勿論なやめるイスラエル又は敬虔ふかきその眞臨が全く罪無しとは信じなかつた。彼等は嚴密には何者も神の前に義しくあり能はざるを知つて居た。しかも彼等は神が、全く己に背ける者と、及ばずながら眞心を己にさゝげ爲めになやめる者とを區別し、敬虔ふかき者をあはれみ、その罪を赦し幸を與へむと信じた。是彼等が神の義と呼んだ所のものである。それ故にその義はめぐみ又は救ひと全く同一であつた。「あゝ主よ、あはれみも亦汝にあり。汝は人各の作にしたがひて報をなし給へばなり」(詩篇六二の一三)てふ詩人の句はこの信仰を模範的に吐露して居る。

神の義はそのあはれみと同一である。吾人は基督教の福音を聞くが如き心地を禁じ得ぬ。かのパウロも己が最もふかき宗教的經驗を其以上には言あらはし得なかつた。是點に於ても猶太教が基督教の準備であつたことは明である。然しながら今少し仔細に檢すれば、この初期の

後の猶太教に於ける神の義の觀念

猶太教に於ては神の義もあはれみも共に相對的に了つた。義とは全くの破廉恥漢に比して罪人たる程度やゝ少き者にそれ丈の報いを與ふるの謂である。人の業を顧みて己が旨に比較的かなふ者をかばふが即ち神のめぐみである。神の側より見れば、その義とあはれみとは依怙の沙汰を脱し得ぬ。人間の側より見れば、その業は神より報を要求する權利たるを失はぬ。これをかのいかなる者もその前には一樣に罪人たる神の絶對的神聖と、しかも義しき人にあらず罪人をあはれみ救ふ神の絶對的の愛とを合せて有するパウロの福音と比較せば、誰か兩者の精神に於て宵壤も啻ならぬ徑庭を否むことが出來やう。

時と共に神の義はそのやはらかな色合を失つて峻嚴となり嘗憐となつた。この點に於ては後の猶太教は豫言者等のはじめの嚴格なる道德的精神に還つたともいひ得る。しかし神の意志、彼と人との關係をむしろ法律的に解した點が此后の發展の特色であつた。神は峻嚴なる冷刻なる裁判官である。人間はいつかはその前に立たねばならぬ。それ故

に神より義してふ判決を得むとは敬虔ふかき者の何よりも切に望んだ所であつた。さてその爲めには法律の條項に抵觸してはならぬ。「律法」は即ちかゝる、その各條項の規定のうしろに恐る可き刑罰の宣告を藏せる法律であつた。宗教家がたゞこの法律に觸れざらむことにのみ齷齪してつひに無邪氣なのび〳〵した氣風や、理想に向つてよろこび勇んで進むをゝしき精神を失つたは既に述べた通りである。「われ供物を欲せず、わが欲するはあはれみぞ」てふ神のことばを聞いた古の豫言者と、薄荷や茴香や馬芹の納め物又は器具や身體の洗滌などにうき身をやつしたイエス時代の模範的宗教家とを比較せば后の猶太教が豫言者の宗教の戲畫にも等しきを認めざるを得ない。律法の宗教は義の神の宗教の發展であり又同時に墮落であつた。

かく宗教が法律的となり刑罰を遁るゝがその大目的となつた以上は、敬虔は方便となり、一歩を進めて神より報酬を要求する權利と考へらるるに至るは自然の勢である。賞罰の觀念は宗教的意識を中毒せしめ、既

永遠の責任の念

罪惡の意識

に述べた利己的打算的の態度をうながした。

然れども吾人は、かく病毒に犯されながらも豫言者の熱血がなほ猶太教の脈管に通へるを忘れてはならぬ。皮相的となり形式的となつても、神の「義」はその根柢に於ては犯すべからざる神の道德的尊嚴を意味した。かくて神の刑罰の觀念は、この時すでに次第に個人的となり來つた宗教的意識の發展と相俟つて個人の永遠的責任の念を養ひ又深めた。人は有限なる不完全なる他の人の審判を受くるのでない、罪惡と相容れざる永遠の實在の前に赤裸々の姿にて現はれねばならぬ。その永遠の運命は神の一言に繫かり、その一擧一動は永遠の意義を有するのである。たゞ惜むらくは模範的宗教家の多くは煩瑣なる無意義なる律法の實行によつてこの永遠の責任を盡し得ると考へた。

永遠の責任の觀念は罪惡の意識を強め、懺悔の念は深く人心に刻まれた。勿論不純なもの不健全のものもあつた。世のまゝならぬをかこつより或は刑罰を恐るゝより起つたものも少くなかつた。然しまた、模範

自負傲慢の態度

的宗教家のわづらはしき律法三昧には遠ざかり豫言者や詩篇の新鮮な信仰の大氣中に呼吸するを忘れなかつた質朴なる人民のうちや、律法の重荷に全く窒息するに至らずなほ多少活きたる宗教的生命を殘した少數の學者やパリサイ人等の間には心の底から罪惡を痛み道德的完全を願ふ至情の動いて居た事は疑ひもない。悔改よとのバプテスマのヨハネの嚴なる叫び聲は四方に反響し、イエスの福音の種子は「義にうゑかわける者」どもの肥えたる地盤に落ちた。猶太教はこの點に於ても基督教の準備であつた。

然れども吾人はまた他の反面を忘れてはならぬ。罪惡及懺悔の念と相並んで猶太教の特質をなせるは自負傲慢の態度であつた。律法の實行を、神より報いを得る權利あるものが功と考へた宗教家等は自ら義人を以て標榜し、他の律法三昧に耽ける時間も資力も能力もなき輩を「罪人」と呼んで輕蔑した。後に述ぶる如く、己等をのみ神の民と信じた猶太人の偏狹なる國民的慢心はかく同じ國民のうちにて模範的宗教家の黨派的慢心として現はれたのである。彼等がいかに律法の嚴守從て個々の業に重きを措き、いかに宗教を數字もて量り得るやうのものに思ひなしたかを考ふれば、彼等が懺悔の念に打たれつゝも絶對的の立場に留る能はず、神の前には何人も同じく罪人なるを忘れて、左顧右眄、相對的尺度を以て己と他の人との差異を量り、比較的他より優れるを己が功と見做し、己が「義」にほこるやうな態度に陷つたのは自然の結果といはねばならぬ。

彼等とても靜かに考へて心ひそかに己が薄弱、不完全、罪惡を覺らなかつではない。しかし彼等は罪惡の意識より來る不安の念を他人との比較によつて鎭めむと力めた。彼等がたゞ一のたのみは己の比較的他に優つて居ることである。是に於てか彼等は此相對的の差異にかじり附きます〳〵律法の實行に狂奔し、又異邦人は勿論凡て宗教てふ專門の技藝に專ら身を委ね得ざる人々を一概に罪人となし近よるも不淨とまでに輕蔑し、他を見下だすことによつて己自身の位置の鞏固を信ぜむとした。彼等はつひに懺悔、悔改をまで己が功、己がよき業と考ふるに至つた。

尤も神の「義」のほか、そのあはれみをたゝへ又はしたふ聲は全く絶えなかつた。しかしつひに猶太人の宗教的意識の中心より出でなかつた。猶太教はつひに罪惡及び罪惡より來る不安の念に打勝ち、神意を行ひうるうれしさにこをどりする境に達し得なかつた。その模範的宗教家が律法にさゝげた狂熱も内部の空虛を蔽ふ襤褸隱し、心中の苦痛を抑へる魔醉劑に過ぎなかつた。襤褸隱しだけに彼等は特にそを見せびらかした。魔醉劑だけに、彼等はますゝ中毒した。

イエスはこれ等の專問的宗教家に反對して起つた。彼の敵は「學者」及び「パリサイ人」であつた。

猶太人の考によれば、神の意志は「律法」にあらはれて居る。而してその典據は所謂モーゼの「五書」である。この書を讀み得るものでなければ眞に神の意に通じそを行ふを得ぬ。しかるに猶太人は父祖傳來の國語を失つて當時東洋の通用語であつたアラマイ語(シリア語)を國語とするに至つた。ヘブライ語は死語となり、その語もて書かれた聖書は讀むすら

特別の學問を要した。それのみでない、律法は后に發展した幾多の新要素を含んで居る。その無數の煩瑣なる規定を悉く知るには專問の教育を要する。しかも聖書が神の直接に啓示した言葉として一字一句無上の權威を有する以上は、后に發展した規定は全くそれと一致せるものでなければならぬ。それ故律法の未だ成文律とならぬ傳承的の部分を一々聖書の文字より演繹するは甚だ必要である。處で、その傳承はもと何の考慮もなく無邪氣に發展し來つたもの故、この事業は決して容易でない、特別の學識と才能とを要する。その外律法の實際的適用の研究も勿論必要である。簡單にいへば、聖書及傳承に含まれたる千差萬別の規定より成る「律法」の解釋は、專らそれに身を委ぬる「學者」(Schriftgelehrten, Scribes)即ち神學者と法律學者とを兼ねたる聖書學者を要するに至つた。かゝる學者でなければ眞に神意を解し得ぬ事となつた。かくて學者はモーゼの位に坐し「神意の啓示者、宗教の最上典據としてあがめらるゝに至つた。

パリサイ人

宗教は智慧なりてふ思想は希臘思想の影響と共に夙に猶太人間に現はれた。しかしその智慧は、はじめは希臘風に、自由なる教養、活きたる知識の意に解せられた。敬虔ふかき哲人、――これその新思想の理想であつた。然るに時と共にその智慧は全く「律法」の訓詁解釋となつた。猶太教の發展はかゝる特別の「智慧」を要求したのである。その結果、宗教は教へ、又學び得る、一種の技藝とならむとした。

學者の指導のもとにこの技藝に專ら身を委ねたのが即ち「パリサイ人」(Pharisäer, Pharisees)である。彼等は宗教專門家、模範的宗教家であつた。彼等は特別の團體を組織して一般人民とは分離し、後者の尊敬を傲慢と輕侮とを以て報いた。彼等は義人のみならず賢者を以て自任し、一般人民を「罪人」又は「愚民」(Amhareez)として見下だした。彼等の態度には、かく、無教育無學の徒に對する輕蔑も加はつた。これ、宗教を一種の學藝となす立場よりは必然の結果である。尤も福音書に見ゆるイエスの攻擊より推して彼等を悉くたゞ私利、外觀にのみ汲々たる僞善者、陋劣漢となすはいみじき誤解である。イエスは歴史家ではない、彼等の明暗兩面を客觀的に描寫しやうとしたものではない。彼は彼等の主義の取れる傾向、その陷れる弊害を指摘し攻擊したのである。彼等のうちに眞心より神を畏れ神に仕へ永遠の責任を重じたものは少くなかつたにちがひない。兎に角眞面目でなくば誰か好んで殊更らに律法の重荷をわが肩に掛けやう。パウロの如き人物を出した此團體には吾人はむしろ敬意を表せねばならぬ。然しながら彼等は猶太教の代表者として、長所を打消して餘りあるその幾多の弊害の代表者であつた。彼等の陷つた弊害は猶太教そのものゝ罪であつた。

猶太教は貴族的宗教

「律法」の宗教は、既に述べた通り、イエルサレムの貴族黨の手に在る祭事の宗教に比せばたしかに平民化を意味した。しかるに生れによれる貴族の手を離れた宗教はつひに知識、技能にもとづく新貴族黨の手に落ちた。猶太教はつひに黨派的宗教で了つた。

律法の本質に於ける矛盾

この事たる、凡て人の業を功とする所謂自力的宗教の通弊であるが、猶

太教に於ては特に、その土臺なる律法、そのものゝ本質の矛盾に深く淵源して居るのである。律法は神の意志の啓示である。そを實行せば、生れの貴族たると平民たると又猶太人たると異邦人たるとを問はず、何人も神の前に義を得る事が出來る。この點より見れば律法の宗教はたしかに平民的、個人的、世界的傾向を有した。異邦人傳道の理論的根據も亦こゝに存した。偏狹なる精神の代表者であるパリサイ人等がいかに野ゆき山ゆき傳道に熱中したかはイエスの言(馬太傳二三の一五)によつても明かである。

然しながら他方に於てこの律法は主として人間を眞の猶太人たらしむる條件であつた。パリサイ人等が極力求めた「義」は眞正の猶太人の資格を意味した。傳道の熱心も、既にいうた通り、他國人を猶太人たらしめむといふ黨派心を脱しなかつた。律法の實行によつて眞正の猶太人になりすましたと自信した專問的宗教家の黨派的慢心は猶太人に特有なる偏狹なる國民精神の自然の結果であつた。かくて律法の宗教は到底、

貴族的黨派的の特質を超越し得なかつた。

律法のこの內的矛盾より來る猶太教のその他の特質は既に說いた通りで今更繰返す必要はない。

一神教

猶太教の特色の一が一神教にあるは、一般に認めらるゝ所で、勿論否定すべきでない。猶太人自身もそを己が長處と考へ希臘羅馬の多神教を迷信と批評し、異邦人間の傳道にもそを最も有力なる推薦狀として用ゐた。然ながら翻て考へれば一神教的傾向は既に久しき以前より希臘の哲學者間に存し、アレキサンデルの偉業によつて開かれた新しき、通常ヘレニスチックと稱せらるゝ世界に於て希臘哲學が教化上の大勢力となつてよりは、教育ある人士の間には廣く行渡つた。其等の人々は勿論多神教に對して猶太人の如く正反對の態度を取らずむしろ譬喩的說明法などによつて哲學思想との一致を計つたが、一神教の思想其ものが希臘

猶太人の一神教の特色

活きたる神

希臘哲學者の神觀

羅馬人の間に決してめづらしくはなかつたことは猶太人のうちにも是點に於ける彼等と己等との一致を指摘し、又は希臘哲學の武器を借りて多神教を批評攻擊した者などのあつたによつても明かである。是の如く、一神教の思想其ものが猶太教特有のものでないに拘らず猶太人の一神教が己が特色を保存し希臘羅馬人に於けるが如く多神教との妥協を容易に結ばず、又た彼等特有の長處と考へられたは何故であらうか。猶太人の神は、既に述べた特質以外に、希臘の哲學思想に見るを得ざる重要なる一特質をそなへて居たからである。彼等の神ヤーヴェ(エホバ)は活きた人格的の神であつた。

希臘の哲學者は主知的に最高實在を考へた。彼等はそを現象世界の説明といふ立場を離れて考へ得なかつた。從てそは彼等にとつては主として、多種多樣なる、絶えず生滅變化せる現象の根底にあつて其等を統一する常住的實在であつた。彼等の神觀は靜的であつた。クセノフアネスをはじめプラトン、アリストテレスの如き皆神の不動を特に主張した。

從て彼等の神は人格的と名づけ得べきものでなかつた。アリストテレスの自己を思惟する神も畢竟絶對的の思惟そのものに過ぎなかつた。やゝ動的の傾ある神觀すら根本に於ては主知的靜的の特質を脱し得なかつた。ストアの攝理の神は凡てを形造り凡てを支配する智慧をそなへた活きた力であるに拘らず充分に人格的の特質をあらはさず、理其ものの、不變不動の自然律其ものと同じであつた。其故に希臘の目的觀は眞に實現せらるべき理想に對するよろこばしき確信を缺いた。希臘文明の精華たる美術の眞髓が靜的の美にあり、從て彫刻に其特色を最も明に發揮した如く希臘の哲學者の眼は主として萬物のいつも變らぬ秩序に向つた。彼等は宇宙を美しく調へるコスモス(秩序)と觀じたるも世界及人生に於て一定の理想に向つて進む活きた歴史を見なかつた。彼等にとつては一切はいつも同じ成行を繰返すのであつた。神の攝理と智慧とを熱心に説いて人格的神觀に甚だ接近したストアが萬物及人間の運命を大體に於て進歩なき繰返しと考へたのは著しく希臘思想の特色を

示して居る。かくの如き神觀に於ては活々とした喜びに充ちた熱烈なる信仰と希望とはあり難い。ストアの宗教すら無邪氣なるうれしき希望よりはむしろ靜なるあきらめにをはつた。神の攝理と萬物のうるはしき秩序とに靜かに息らふことはあるも理想や希望にこをどりする趣は希臘哲學者の神觀には見るを得ぬ。かくの如く主知的靜的なる神觀が通俗の多神觀に對して必しも猛烈なる反抗の態度を取らなかつたは自然である。種々の神々を萬物の動きなき秩序の譬喩的象徴的のいひあらはしと考へるはさまで不自然又は困難の事でなかつた。本來非人格的なる唯一神は必しも人格的なる多數の小なる神々と競爭反目しないのである。

しかるに古の大豫言者等の賜物たる猶太人の神觀はこれと全く趣を異にした。そは主意的動的であつた。ヤーヴェは己が自由の意志もて凡てを爲す人格的の神である。彼は民族や個人の運命を掌裡に握りもふが儘に左右する。而して彼はイスラエルを特にわが愛兒と撰び將

來の光榮を約束した。其故彼を信ずる者にとつては民族の盛衰興亡も彼が終極の目的を成遂ぐる準備に過ぎぬ。歴史は同じ事の繰返しではなく實現せらるべき目的に向へる運動である。歴史上の出來事は枉ぐ可らざる法則の發現でも一般の眞理の特殊の例證でもなく人格の創造的の力より出た各特殊の意義と價値とを有する活きた事實である。自然も亦人格的活動の發現に外ならぬ。ヤーヴェは單に萬物を一定の法則に從て整へ動かすものでなく、一切を自ら自由に造り出し自由に支配する世界の創造者である。自然の進行さへ活きた人格の傳記と見るべきである。かくの如きいかにも鮮かなる活々とした神主として人の情意に訴へ心の底までもゆるぐうれしき希望を與へ得る神を信じた人々の宗教に特殊の勢あり力あり生命のあつたのは自然である。またかくの如き人格的の神が他の小なる神々の己が活動の領分を占領するを許さなかつたのも尤もといはねばならぬ。

しかるにこの活きたる神に對する信仰はイエスの時代に於ては實際

神は現在に於て經驗せられず

の力を失ひ理論に了らむとする傾を現はした。吾人は今二つの方面よりこの事を論じやう。

猶太人は天地の造主なる萬能の神が一國民の隆盛光榮を最上の目的とすると信じた。是れ一目瞭然たる不調和である。既に律法の條下にのべた猶太教の偏狹なる國民的傾向の弊害は是點にも現はれて一神教の力を殺いだのである。イスラエルは異邦人の足の下にふみにじられていつまでも起つ事が出來ぬ。イスラエルの神は今は働きをやめて姿をかくした。彼の活動はたゞ赫々たる列祖の事業にのみのこつた。世界の創造者はたゞアブラハムやモーゼやダビデの神となつて仕舞つた。「列祖の神」とはつねに用ゐられた語であつた。尤も猶太人は層一層の熱心を以て神が將來に於て姿をあらはし力を示しイスラエルを世界の覇たらしめむ時を望んだ。然し彼等の信仰はたゞ昔をしのんでの愚痴とあてもなきそらだのみとに墮落せむとした。彼等は現在に於て活きたる神を眞に經驗し得なかつた。引續いての不幸はほがらかなよろこばしき信仰を全く奪ひ去つた。しかもそを再び恢復するは猶太教其もの本質の許さぬ所であつた。

神の觀念次第に抽象的超越的となる

第二は一神教其ものに附隨する傾向の結果である。神が有限性を脱するにつれて次第に世界及人間と遠ざかり次第に非人格的に抽象的になるは自然の勢である。希臘哲學者をして神をまず〳〵抽象的に超越的に考へしめ、ひに認識を全く超越する名づく可らず考ふ可らざるものとまで思はしめたと類似した傾向は猶太教にもあらはれた。神は固有の名稱を次第に失つた。ヤハヴエ、ヤーヴエ、ふ親しき名は次第に稱へられぬに至つた。「神聖なるもの」「最高のもの」「萬能なるもの」「天の主」「天の神」「主」「天」などの遠廻しの抽象的名稱が代りに用ゐられた。ヤーヴエの神聖なる名を忌み憚りてとは猶太人の口實であつたが、其實これらの名稱は彼等がいかに神を敬遠したか、彼等の神の觀念がいかに本來の鮮明と活氣とを失つて空漠となつたかを示すのである。

かくの如き二樣の原因よりして活きたる唯一神の信仰は次第に其の

勢力を弱め、其につれて其信仰が全く歴へ斥けた多神教の傾向は頭を擡げるに至つた。そは次の三の方面に於て見る事が出來る。

第一は通俗の天使の信仰である。天使は其名の如く神の使者で神の命に從て其の意を實行する一種の靈である。神があまりに高く遠くなつた結果は直接に世界に働くを得ずかゝる媒介者、中間的實在を要するに至つたのである。人間と神との交通も多くかゝる使者の媒介を要する事となつた。天使は種々に分類され主なるものは特殊の名稱を得、其の特質や活動の領分など明かに規定せられたるものさへ出で來つた。神は名を失ひ天使は名を得る――こは猶太教の發展の傾向を反映する注目すべき事實である。

第二は二元的傾向である。神と正反對なる惡魔てふ思想は舊約書には未だ現はれなかつたが時と共に勢力を得てイエスの時代には一般に弘まつた通俗の信念であつた。この觀念の出處は何であらうとも、そが猶太人の宗教意識に於て活きたる勢力となつた事實は彼等の神の信仰がいかに活氣を失つたかを證する。己が民族の幸福と光榮とを現在に見るを得ざる彼等は此世を以て惡魔の世となした。神の下に天使の群のある如く惡魔は己が配下に幾多の惡鬼を率ゐるものと彼等は信じた。イエスも亦惡魔及惡鬼の存在を信じた。しかも彼は活きたる神を深く己に經驗し己が活動によつて其等が全く勢力を失ふものと考へた。活きたる神は彼に於て再び現在に働くものとなつた。是點に於て彼はイスラエルの宗教の眞髓を發揮し其の眞の生命を危險なる病毒より救つたのである。

第三は一種の神學的思索である。全く神とは別なる人格的實在でもなく又全く神の働き或は性質として彼の本質に屬するものでもない甚だ曖昧なる奇異なる實在が神と世界との媒介者と考へられた。それらは通俗の信仰に於ける天使に該當する中間的實在であまりに世界と隔り來つた神と世界との聯絡を保たむ爲めに考へ出でられた者である。最も著名なるは神の智慧の觀念であつた。そは世界の創造にたづさは

り萬物を支配し歴史殊にイスラエルの歴史の指導者となり凡て善きことの源となり人間の教育者となる神的實在と考へられた。是の如き中間實在が神と一なるが如く又別なるが如く見ゆるはそれらが神と世界との間に立つて成遂ぐべき職分の性質より來つたのである。其等は一方に於て神と世界とを結合するもの、世界にあらはれた神其ものである。從て神より離れたるものであり得ぬ。しかも他方に於てそれらは神と世界との直接の結合を妨ぐるものである。從て神と全く一つのものではあり得ぬ。かゝる思索はアレキサンドリアに住した猶太人フイロンの「ロゴス」(神の理及神の言葉)の說に於て其頂點に達した。

終末觀

猶太教の第三の特色は其の終末觀(Eschatologie, Eschatology)換言すれば世界及人類の歴史の終末に關する宗教的思想である。

神をおそれ畏むべき王と考へた猶太人は神の國(Malkuth Jahve)を信じた。神の國は一層適切にいへば神の支配である。彼等の國民的自負心は彼等をしてこの神の支配を己が民族の支配と同一視せしめた。暗憺たる國運がいつ隆盛と光榮とに照さるべきかを知りかぬるに至つて彼等は現在に於ける神の支配に失望したゞ將來に於て神が再び地を支配しイスラエルを諸民族の覇たらしめむ時を切に待望んだ。猶太教の國民的黨派的特質はこの點に最も著しく現はれた。かくて猶太教はたゞ希望に於てのみ生くる宗教となつた。イエスの「神の國近づけり」との福音はこの猶太人一般の希望に根據をもつて居たのである。たゞ彼は猶太教特有の偏狹なる黨派根性を全く脱し從て猶太教其ものを超越した。

國民的希望と通常離す可らず結合せるはメシヤ(Messias, Messiah)の觀念である。メシヤ(希臘語の飜譯にてはクリスト)は王の意、膏注がれたる者の意、イスラエルの古俗王の即位式に頭上に膏を注ぐことあるより來つた名稱である。然し後には特別の王の名稱としてのみ用ゐらるゝに至つた。其特別の王とは、世の終に於て猶太人が待焦れた神の國(從てイ

スラエルの支配)を地上に齎す偉大なる王の謂である。彼は古の明君ダビデの裔、イスラエルの敵を足下に蹂躙し異邦人を聖地パレスチナより驅逐し、地上に散れるイスラエルの諸族を集め智慧と正義とを以て地を支配しイスラエル從て神の光榮を恢復し完成し、憂なく惱なく罪惡なく、人は神に親しく近づき交りて、平和と喜悅とに充ちた黄金時代を實現する救主と信ぜられた。甚だ高尚なる精神的要素はあるもメシヤの觀念は猶太人一般の希望に於ては國民的野心を脱し得なかつた。

アポカリプシス

是の如き通俗の終末觀のほかに紀元前第二世紀頃に現はれそめ、はじめは一部の人士の間に限られたが次第に勢力を得イエスの時代には一般人民の信念に多大の影響を及ぼすに至つた別種の終末觀がある。それはアポカリプシス(Apokalypsis 啓示の意)と稱せらるゝ諸書によつて述べられ弘められたものである。其等は世界の終末に關する神意の秘密を啓示し神の國の出現の遲きを訝かれる又は國民の非常の厄難に際し神の支配に疑を抱かむとせる同胞をなだめ慰め勵まさむを目的とした。

其の終末觀の特質

世の終りは目前に迫れり

シリア王アンチオコスの迫害の時(紀元前一六五)に出でた舊約書にあるダニエル書が其の最も早きもので其后陸續と現はれた。其等は古の著名の人々の名を戴いて居るが、其名は實は借りもので、內容に重みを與へむ手段に過ぎぬ。其內容は主として其等の人々がまぼろしに見て知つたと稱する終末時の出來事の豫言で、歷史上の事實、空想的の觀念や譬喩、東洋の神話、神學的思索等の甚だ錯綜せる混合を呈した。新約全書の卷末に在る所謂ヨハネの啓示錄は一基督敎徒がドミチアン帝の迫害(紀元第九十年代)の時この種の書の體裁を用ゐて信徒を慰め勵まさん爲めに書いたものである。

吾人は今アポカリプシスに見ゆる終末觀の特質を數ヶ條に分つて簡單に述べやう。

第一に、アポカリプシスの著者等は世の終が目の前に迫つたと信じた。神が將來に於て己が支配をあまねく世に行はむとは猶太人一般の希望であつた。其希望の實現が近いたと說いて同胞を慰め勵まさむがアポ

カリプシスの目的であつた。其の著者等のもゆるが如き宗教的情熱は彼等をして凡てが希望に背馳せむとするこの世に於てひたすら神にたより神の勝利を目の前に望ましめたのである。

世の終りはいついかにして來るか

第二に、彼等は世の終りの出來事を詳細に告げ得ると信じた。世の終は近づいた。しかもそはいつ、いかにして來るかとは失望の淵に臨まむとせる人々の甚だ氣にかゝる問題である。彼等はそれに明かなる答を與へむとした。彼等はこの世の續く間の年月の數や其の終に際して現はるべき種々の徴などを說いた。彼等は神意を打算し得ると信じたのである。彼等の宗教的情熱は熱病的發作を示し甚だ不健全の傾向を現はした。彼等は漠たる想像や思索にかじりついて失望の淵に沈まざらむともがいた。

普遍的宇宙的傾向

第三に、彼等の終末觀は普遍的宇宙的の傾向を現はした。通俗の希望に於ては主としてイスラエル及他の諸民族の運命のみが問題となつた。しかるにアポカリプシスに於ては問題はこの世界全體及そを支配する諸勢力の運命にまで廣まつた。その終末觀の根底をなせるは一種の二元的傾向ある世界觀であつた。この世と來らむ世とは凡ての點に於て正反對である。この世を支配するはサタン(惡魔)及其の配下の惡鬼である。しかも其等はこの世と共に全く滅亡に委ねらるべきである。この世の終と共に萬事革まり神のみの支配する永遠に亡びぬ善き世が天より現はれ來る。かくて神の國の出現の序幕と一般に信ぜられた神の審判はイスラエルの敵を滅するを意味するは勿論であるが同時に現世界全體の滅亡をも意味する事となつた。偏狹なる國民的精神を超越する端緒は開かれた。

個人的傾向

第四、神の審判が世界の審判となつたと同時にまた個人の審判とならむ傾向も著しく現はれた。アポカリプシスの著者等は大體に於てイスラエルの勝利異邦人の屈服てふ希望を脫し得なかつたが、同時に世の終と共に死人が復活し生けるも死せるも各己が行爲に對して嚴密なる神の裁判を受く可きものと信じた。律法の思想と相俟つてこの終末觀は

メイヤは超自然的實在となる

個人の永遠の責任の念を強むるに與つて甚だ力あつた。

第五、メシヤの觀念も變形を來した。舊約書のダニエルの卷(七の一三)に見ゆる「人の子」はもとはアッシリヤやバビロンやペルシヤや希臘などの諸王國が獸の姿にて表はされたるに對しイスラエルの象徴として用ゐられた(多分は東洋の神話より來つた)姿であるが后にはメシヤとして解せられ、かくて后のアポカリプシスに於てはメシヤは世界創造のはじめより神のもとにありこの世の終と共に天使にかこまれ天の雲に乘つて出現し新しき世を齎し來る超自然的實在と考へらるゝに至つた。

アポカリプシスの世界觀はもとバビロンやペルシヤや殊に後者の宗教觀の影響によつて現はれたるものしかもイエスの時代に於ては猶太人本來の終末觀と結合し多くの點に於て既に一般民衆の肉となり血となつて居た。イエスの福音もこの終末觀の地盤よりしてのみ解し得らるゝのである。

史料

基督教以外のもの

第二章　耶蘇

史料

イエス(Jesus)の人格と事業とに關する史料は決して豊富でない。彼自らは何ものをも書遺さず又他人によつても己が記念を不朽ならしむる手段を講じなかつた。猶太人の歴史家ヨゼーフス(Josephus三七又は八生)は其の著書のうちにバプテマスマのヨハネの運命や「所謂クリスト」の兄弟ヤコブの最后に就いては語つて居るが、イエスについてはたゞこの「所謂クリスト」てふ一語のほかは全く默して居る。イエスがローマの史家の筆に上つたのはやつと第二世紀前半のことである。すなはちタチッス(Tacitus)はチロの基督教徒の迫害を叙するにあたつて、この有害なる迷信の開祖クリスツスはティベリウス帝の御代に總督ポンチウス・ピラーツス(ピラト)によつて處刑せられたと一言彼に説及んだ。第二世紀の後半、はじめて文筆によつて基督教の攻擊を試みた哲學者ッエルズス(Cels

基督教會内のもの

福音書

us)は、イエスは大工の約婚の婦人がローマの兵士と通じて出來た私生兒だと書いたが、それは當時の猶太人が福音書の記事に基いて揑造した說話をそのまゝ採用したものに過ぎぬ。轉じて基督教會内に屬するものを見るに、イエスの事蹟を記述した所謂福音書は新約全書に載つて居るものゝ外になほ種々弘まつて居た。然し其等の斷片が今日まで傳はつて居るものに就いて見るに、奇怪の記事のみ多く史料として用ゐ得べきものは極めて少ない。又アグラファ(Agrapha 書かれざりしものの意)と呼ばれて福音書以外に古代の諸書に散在するイエスの語少許傳はつて居り、中には正確のものもあらうが、一つとして彼の敎や人格に新しき光を放ち得可きものはない。されば吾人は新約全書に入つた福音書に於てのみ史學上價値ある研究材料を求めねばならぬ。

然しながらこれらの福音書を史料として用ゐるには種々の困難あるが故、綿密なる注意が必要である。聖書は一字一句神の吹込んだ言葉と信じた時代には今日吾人の感ずるやうな困難は存在しなかつた。しかるに、萬事を理性の標準によつて判斷し數千年の過去を有する人類の歷史を全く無かつたにも等しく見做し、すべて己自身の見解にたがふものは弊履の如く棄てゝ顧みざる近世の啓蒙思潮(Aufklärung, Enlightenment)の勃興と共に、聖書はもはや昔ながらの尊嚴を保ち得ぬに至つた。人々の最も甚しく躓いたのは所謂奇跡(Wunder, Miracle)である。自然は動かす可らず枉ぐ可らざる法則に支配されて居る、奇跡は自然律の破毀を意味する、といふ前提より發して、ライマールス(Reimarus 一六九四—一七六八)やパウルス(Paulus 一七六一—一八五一)などの學者等は奇跡の所謂合理的說明を試みた。今二三の例を擧げやう。——死人が甦るべき謂れはない。故にイエスは甦つたのでない。然らば福音書の記事はいかに解すべきであるか。イエスの死後彼の弟子等は謀計をめぐらしてひそかに彼の死骸を盜出し彼甦つたと言振らし世の愚人を籠絡した。是福音書の記事の眞意である。——父無くして子の生るべき謂れはない。イエスとても同樣である。然らば誰が彼の父であつたか。天使であつた。何者かゞ天使に扮して

奇跡

ライマールスとパウルス

マリアを欺いたのである。――人間が水面を歩み得る謂れはない。イエスが海の上を歩んだといふは實は海のほとりを歩んだのである。希臘語のepiに兩義あるよりしてかゝる誤解が生じたのである。――さてこれらの人々は傳承に對する盲信を打破する上には大功績があつたが、惜いかな歴史的理解力を全く缺いて居た。彼等は勿論語々神の吹込んだものとの敎をすてたものゝ未だ福音書の奇跡談をその時代の信仰思想より解することが出來なかつた。彼等はなほ福音書は徹頭徹尾歴史的事實を語るものといふ迷信を脱し得なかつた。其爲め彼等は「合理的」と稱する淺薄なる説明法によつて福音書の記事を强ひて己が世界觀と一致せしめむと力めたのである。かゝるところへかのシトラウス(Strauss)の「イエス傳」(一八三五)が現はれた。彼はこの説明法の誤れるを根本的に論明した。福音書は決して彼等主理論者が思うたやうな純粹の歴史書ではない。奇跡談は「合理的」事實を語らむとする者でなく不思議なる不合理なる事實眞の奇跡を語らむとするものである。其等は己が思想を標

準として、牽强附會すべきではなく、其時代の信仰より即ち歴史的に説明すべきである。かくて彼はこの立場より奇跡を信者の宗敎的想像の無意識的に産んだ神話として説明した。バウル(Baur)及チュービンゲン學派(Die Tübinger Schule)と稱せらるゝ彼の弟子等はシトラウスのはたさで遺した事業をとらへ原始基督敎の歴史を研究し、その歴史的發展の諸階段を代表する其の産物として福音書をはじめあらゆる新約全書中の書を説明した。シトラウスやこれらの人々の研究の結果は其後の學術の進歩によつてもはや大部分過去の誤認となり了つた。しかし歴史的批評的研究の端緒をしかも大仕掛に開き幾多の根本問題をはじめて提出した彼等の偉大なる功績に對しては吾人は感謝するを忘れてはならぬ。

さて新約全書に載つた福音書は四ある。そのうち第四の通常ヨハネ福音書と呼ばるゝものは他の三と甚しく内容を異にする。しかもその相異は單に部分的枝葉的のものでなく全體及根本に關するものである。兩者はイエスの説敎の特質彼の外圍に對する態度などについて全く異

つた觀念を與へる。いづれが正しいか。吾人は詳細を第五章に讓つて今は簡單に答へやう。第四福音書の著者が誰かは別問題として、此書には無邪氣に過去の事實を語るといふ態度は全く見るを得ぬ。其の目的は語らむよりはむしろ敎へむとするにあつた。著者は復活して靈に於て生けるクリスト・イエスを深く切に經驗した。彼はこの信仰上のクリストを物語にことよせて說敎せむとしたのである。彼の書に正確なる事實が多少保存されて居る事は疑もない。しかも彼は自ら傳へ承けた所を自由に己が信仰と目的とにあはせて改造した。彼は事實そのものに對する興味を缺いた。彼にとつては事實は永遠の眞理の象徵としてはじめて價値を有したのである。されば彼の記述に於て眞に事實と認むべきものを識別せむは殆ど不可能である。兎に角イエスの說敎及彼と外圍との關係、彼を歷史的に解するに最も大切なるこれらの諸點に於てこの書は特に信ず可らざるものである。從つてイエスの人格及事業の史料としては、吾人は第四福音書を全く棄てねばならぬ。

他の三福音書を誰も讀んで氣附くは內容に於て互に甚しき類似及一致あると同時にまた多少の相異ある事である。かく其等はならべて共に觀得るのみならず、又しかせずしては充分の研究もかなはぬといふより、通常共觀福音書(Synoptische Evangelien, Synoptic gospels)と呼ばれる。さてかの一致と相異とはいかに說明すべきであるか。吾人は今こゝにこの問題を詳細に論じ得ぬ故、たゞ吾人の最も眞に近しと思ふ研究の結果のみを紹介しやう。——三のうち最も古きは第二である。著者なるマルクスはイエルサレムの原始敎會に屬した人、イエスの直弟子ペテロとは始じめより親交あり、後に至つてはパウロにも接近した。彼の材料の出處の一はたしかにペテロの實歷談であつた。著作の時は七〇少し前が最も實らしい。——第一及第三はやゝおくれてともに七〇后に出た。兩者がマルクスと共通に有する材料は彼より得來つたものである。それらを除いた后吾人の目につくは兩者だけに共通で馬加傳には缺け居る材料である。これらの內容は主としてイエスの敎訓說敎である。而して

共觀福音書は歴史書に非ず傳道書なり

其の出處はイエスの直弟子使徒マタイの書の希臘語の翻譯であつた。第一福音書全體が古より一般にこの翻譯そのものと考へられたが、そはマタイ自身の書より出た材料が其の最も主要な部分をなせるより起つた誤解に過ぎぬ。――第三福音書は最も後に出たものである。パウロの弟子、希臘人の醫師ルカの作といふ古來の傳說はテユービンゲン學派以來しば〳〵否認せられたが、近年に至り學者(殊にハルナック)の研究により矢張比較的最も正鵠を得たものであることが明になつた。上に述べた二種類の材料の外に第一及第三の福音書の各に特有なものも少しはある。其等の出處に關してはイエルサレムの原始教會よりといふ外は、吾人は今日未だ明かな解決に達して居ない。

かくの如く共觀福音書の材料はイエルサレムの原始教會乃至は直弟子等より來つたものである。從てイエスに關する史料として其等は少からぬ價値を有するのである。然しながら吾人は是等の福音書とても傳記又は歴史書たる目的を有したものでないことを忘れてはならぬ。

宗教的想像の產物

著者は歴史家としてイエスの事蹟を觀察し、其に關する傳承を批判する態度を取らなかつた。彼等の目的は主として宗教的、彼等の著書は史書よりはむしろ傳道書であつた。彼等はイエスが舊約書によつて既に久しく豫言せられた救主、神の子メシヤなるを證し、彼の人格に對する此信仰を養はむ爲めに筆を取つたのである。從て今日吾人が歴史的事實と稱するものを彼等は重じたのではない。彼等の眼より見てイエスに對する疑を、換ひ信仰を强むるやうな事柄が彼等にとつて最も價値ある材料であつたのである。彼等が奇跡や舊約書の豫言に重を措けるは全く其の故である。奇跡は常人を超えたるメシヤの業として、豫言の的中は神意によつて定められたメシヤの資格として彼等にとつては大切であつた。彼等より材料の史學的取捨排列を期待するは誤である。

從て福音書の記事には歴史的事實ならぬものを語れるも少くない。然しそを著者の故意の製作とするはいみじき誤解である。彼等はそれらを悉く事實と信じたのである。吾人は殆ど平凡淺薄に陷らんまでに

現實を重ずる今日の世界觀を以て、世界が詩的想像のゆかしき衣をまとうて居たかの時代を律してはならぬ。當時の人々にとつては心情の奇跡は同時に外界の奇跡とあらはれた。彼等の信仰は其「最愛の兒」を無邪氣にめではぐくんだ。イエスを世界の王と仰ぎ己が生命の主とあがめた人々には何事も不可能と思へなかつた。かくて奇跡談の或ものは產れ出たのである。「かくもあつた等である、故に然あつた」とはかゝる宗敎的想像の無意識的の論理であつた。其の產物は單に奇跡談にのみ限らず、イエスの敎訓や說敎の一部分にまで及んだ。吾人は今其の實例を一々擧ぐる事はかなはぬ故、最も著しき一例として復活の記事を論じやう。パウロは哥林多前書一五の三以下に於て基督敎徒の復活の保證としてイエスの復活を說き更にその事實の證據としてイエスの弟子等に現はれた場合を列擧した。彼はまたイエルサレムの敎會より傳へ承けたと特記して己が記事の誤なきを保證した。さて彼はそこにイエスの葬られたことは語つて居るが彼の墓の空虛となつたことには一言も說き及ばなかつた。イエスの復活の最も有力なる證據たるべきこの事實を擧げなかつたのは彼がそを傳へ知つて居なかつたを證し、更らにイエルサレムの直弟子等もそを知らなかつたを證する。然るに馬加傳第十六章にはすでにそれに關する記事が出て居る。吾人はこの點に關して甚だ明かに宗敎的想像のはたらきを觀察し得るのである。つまり時のたつにつれてイエスが見えたといふだけでは滿足が出來なくなつた。イエスが甦つたのならば墓は空になつた筈である、しかも誰か死骸を持去つた爲めではない、そは誰も持去る事の出來ぬやうになつて居た筈と人々は推理する。はたせるかな、馬加傳によれば復活の朝に墓に赴いた婦人等は墓の口を蔽うた巨大な石が側に轉がつて居るを發見したのみならず、彼等は前々日には墓處に行つて人がイエスを葬り大石をその入口に置いたを見屆けたのである。しかるにまた時のたつにつれてそれ丈では不充分となつた。人の居ない間に石を轉がして屍を盜出したのではあるまいかといふ懸念も起つて來た。果せるかな、馬太傳第二十八章を

見れば墓にはちやんと番兵がついて居る。又婦人等は石が轉がつてあるのを發見したのでなく、彼等の目の前で地震が起つて石が轉がり出したのである。而してこの話が后に生じたもので馬加傳の方が古いことは馬太傳の記事そのものにあり〳〵と見えて居る。馬加傳によれば既に墓が空虛となつて居て天使が其のほとりに立つてイエスの復活を告げた。しかるに馬太傳によれば婦人等の目の前で墓が開いたに拘らずイエスは直ちに彼等に現はれず、馬加傳にある通り矢張天使が復活の知らせをした。イエスはやつと彼等の歸途に現はれ、しかも天使と同じ事を繰返し彼等に語つた。さて婦人等の目の前でイエスが甦つたのならば、何故に彼は直ちに彼等に現はれて弟子等に對する使命を傳へなかつたか。イエス自身より前に何故天使が同じ使命を傳へねばならなかつたか。要するに馬太傳の記事に於ては天使は全く不用である。しかもそれが出て居るは一層古き傳說に出て居たからである。馬太傳の記事は古きものと新しきものとの拙なる繼ぎ合せに過ぎぬ。——是の如く宗

教的想像は信仰より割出して新事實を無意識的に製作した。其製作には信仰の直接の影響のみならず、上の例で明なる如く信仰を疑や懸念に對して辯護せんとする動機もはたらいた。

かゝる缺點あるに拘らず、共觀福音書はイエスの人格及事業に關する史料として少からぬ價値を有するのである。第四福音書のイエスは宗教的劇詩の主人公とも見る可く、一定の信仰や思想の權化の趣あり、いかにも單調で、活きた個人よりはむしろ類型である。之に反して共觀福音書のイエスは鮮かな個人性をあらはせる活きた人格である。イエスと外圍との關係も第四福音書に於てはいかにも單調であるに反し、共觀福音書に於ては活きた社會の各層各方面の色彩豐かなパノラマを呈して居る。共觀福音書にも勿論后の信仰の與へた修飾はある、しかも眞のイエスの赤裸々の姿は外の衣をとほして見えすいて居る。著者は事實ならぬことをも語つて居るが彼等の態度は全體に於ていかにも無邪氣である。與へられた材料を故意に又自由に己が思想や目的にあはせて改

造する第四福音書の態度は彼等に於て見るを得ぬ。彼等は自ら事實と信ぜるがまゝに語つたのみならず事實として傳へ承けた材料そのものに對しての興味を缺いて居なかつた。馬加傳の如きは措辭の伎倆に於て甚だ幼稚なるに拘らず時としては實歴談を聞くかと思ふほどにあざやかな活々した叙述を示せる場合もある。總じて彼等は自ら與へられた材料を支配するよりはむしろ其等に支配されて居る趣がある。從て己が信仰と矛盾せる材料をさながら無邪氣に載せた場合さへある。この最後の點は共觀福音書の史料として信任すべきを示す最有力なる證據である。今二三の例を擧げやう。馬加八の一一以下(馬太一二の三八以下、路加一一の二九以下)はパリサイの徒がイエスの使命のしるしとして奇跡を要求したをイエスが拒絶したといふ記事を載せて居る。處が著者自身は奇跡をイエスがメシヤたる證據とする立場に在つたのである。馬加六の五によればイエスは故郷に歸つた時人々の不信仰の爲め奇跡をなし得なかつた。史料としては甚だ價値ある記事であるが、マルクス自身の信仰とは正反對である。古代の基督教徒は一般に、メシヤをタビデの後裔とする猶太人の觀念に從て、イエスをタビデの後裔と信じた。然るに三福音書によれば(馬加一二の三五―七、馬太二二の四一―六、路加二〇の四一―四)イエス自身はメシヤのこの資格を否認した。これは勿論、其他イエスの近親のものが狂人と思つて彼を捕へむとしたといふが如き(馬加三の二一)、「善き師よ」と呼びかけられたるにイエスが「汝何故にわれをよしと呼ぶぞ、神の外には誰も善き者なし」と答へたといふが如き(馬加一〇の一七・八)彼をメシヤ乃至は神の右に坐して世界を支配する玉とあがめた宗教的想像の産物とはいかにしても思へぬ。――尤も是等の事實にも拘らず共觀福音書にあらはれたイエスの姿を全く宗教的想像の産物とする人もないではない。然しながらかくばかり活々とした個性をそなへ、かくばかり鮮かな歴史的背景を有する人格の姿が全然宗教的想像の無意識的に織出した綾であらうとは不思議の極といはねばならぬ。ましてやその想像的産物がマルクスが筆を取つたより以前、イ

エスの生存したと稱せらるゝ時より四十年とは隔らざる從て若しかゝる人物が生存しなかつたならばそれとたしかに己が實歴によつて斷言し得る人々のなほ生存して居た時既に、しかもイエスの活動の舞臺に屬したと稱せらるゝイエルサレムに於て出來上つて居たとははたして眞面目に考へ得ることであらうか。かゝる馬鹿らしい考は殆ど齒牙にかくるに足らぬのである。

吾人は進んで共觀福音書に基いてイエスの人格と事業とを簡單に叙述しやう。

事蹟

吾人が福音書によつて歴史的事實として知り得るはたゞイエスの短き公生涯のみである。彼はパレスチナのかたほとりなるガリラヤの小さき町ナザレの大工のむすこであつた。福音書に母と兄弟とのみ現はれ居るより察すれば父は早く世を去つたらしい。彼が古のイスラエルの明君ダビデの後裔といふことは事實よりはむしろメシヤは、ダビデの家より出でむてふ信仰の產物と見るべきである。彼がベトレヘムに生れたといふこともメシヤはダビデの生地ベトレヘムより出でむといふ豫言(ミカ書五の一)より宗教的想像の產み出したもので馬太及路加兩福音書の記事が互に甚しく矛盾せるによつても事實でないは明かである。

イエスの超自然的出生

ナザレをイエスの故郷とする古き傳說と信仰よりうまれたこの新しき傳說とは強ひて調和を得むともがけるが如き趣さへ見えて居る。さてかの有名なるイエスの超自然的出生の記事に至つては、東西の類似の傳說と比較しても、宗教的想像より來つたことは推測り得るのである。然しながら單にそれ丈で又は父なき出生は自然律に背くなどのおほざつぱな議論で直ちに福音書の記事を否定し去るは學問的批評的態度に於てなほ缺くる所がある。吾人はかゝる一般的の議論を俟たず、新約全書の他の部分との比較及兩福音書の記事の內在的批評によつて既に同じ結論を得るのである。基督教に屬する書類のうち最も古きはパウロの

歴史的批評の一例

書翰である。處がそれ等のいづれに於てもパウロは超自然的出生を語つて居ない。彼は單にイエスは肉體によればダビデの子といひ又は女より生るというて居るのみである。この「女より生る」(加拉太四の四)てふ語は父なしの意を含まぬのみならず彼が他の人間と齊しく人間なるを特に取出て言顯はしたもの、超自然出生の考とはむしろ矛盾する。福音書のうち最も古き馬加傳も亦その事には一言も說及んで居ない。希臘人や羅馬人の間にはプラトンやアレクサンデルやアウグスツスなどがアポロンやツオイスの子と信ぜられた事によつても明なる如く、超自然的出生の考が廣く行渡つて居たことを思ひ又、マルクスが主として猶太人以外の讀者の爲めに筆を取つたことを思へば、傳道の甚だ有力の器たり得べきイエスの出生の奇跡に就いて默して居るのは彼がそを知らなかつたを證する。彼の福音書にのみ保存せられたイエスの近親が彼を狂人と考へたといふ事實の如きは超自然出生とは全然矛盾する。若し天使の御告げによつてマリアが己が愛兒の特別の使命を知つて居たならかゝる事はあり得なかつたのである。かくの如く超自然出生は比較的新しく發生した傳說でしかも古き傳說に於て保存せられた正確なる事實と氷炭相容れぬ、その宗敎的想像の產物なるは疑を容るべき餘地がない。それのみでない、兩福音書の記事は自家撞着に陷つて居る。兩者に見ゆるイエスの系圖及路加傳第一章の記事は共にマリヤ(イエスの母)の夫ヨゼフをダビデの後裔としてそれによつてイエスも亦同じ王家の流を汲めるを示さむとして居る。若し超自然的出生の記事が正しく、イエスがヨゼフの子でないならば、後者がダビデの子なるを示して何の益があらう。イエスをヨゼフの眞の子となす古い傳說のあつたことはこの自家撞着で明に證明されるのである。

イエスの發展

イエスが三十才を越えて公の活動をはじむるに至つたまでの經歷については吾人は確かなことを知らぬ。然し彼の后の宗敎的性格にパウロに於て見るが如き極端より極端に動く傾向が全く缺けをるを見又喜び悲しみ怒り歎く動き易き性情を有しながら凡てがいかにもゆつたり

バプテスマのヨハネ

試惑

とのどやかに調和を得たるを見れば彼の發展は平かで激變のなかつた事は推測り得る。「イエス智慧も齡もいやまさり、神と人とに益〻愛せられたり」てふルカの言(二の五二)は蓋し正鵠を得たものであらう。

かくて時まさに熟せんとする時、ヨルダンの野にひとりの豫言者が現はれた。彼は熱烈の言もて神の國の近けるを傳へ悔改をうながした。此人こそバプテスマのヨハネである。罪となやみとにつかれはて心ひそかに神のうれしき御代にあこがれた人々にはこの「野に呼べる人」の聲は惰眠をさまし氣つけであつた。彼等は競うて彼のもとにつどひ神の國を迎へむ覺悟の印としてヨルダンの流に洗禮を受けた。イエスも亦彼のもとに來つた一人である。バプテスマ(洗禮)を受け水よりあがつた時彼は天開き神の靈鴿の姿にて降り來るを見、汝はわが子ぞと呼ぶ天よりの聲を聞いた。すでに心ひそかに熟した天職の自覺は此さぼろしを介して一時に爆發したのである。この新時期を劃した經驗の後彼が惡魔の試惑を受けたといふ記事も、想像的裝飾はありとしても、中心に於ては

カペルナウム

十二使徒

事實を傳へたものと見るべきである。彼は人里遠き野原にて、獨り己にかへりありがたき神の使命について靜思默想し、凡ての懸念凡ての誘惑と戰つてつひに見事勝利を得た。イスラエルの待焦れた救主メシヤはわれぞとの自信はもはや動かず可らざるものとなつた。

故郷に歸つて間もなくイエスは立上つた。彼は己が活動に不便なるナザレを去つて湖水のほとりにさかゆるカペルナウムにおもむいた。一人にては手まはりかぬるより彼はイスラエルの十二族に因んで弟子等のうちより特に十二人を撰んで補助者とした。後に十二使徒と呼ばれたのは即是である。カペルナウムに於ける彼の活動は福音書殊に馬加傳に目に見る如く鮮かに寫されて居る。直弟子の實歴談より出た明かな證據である。然しその記事によつてペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ等の弟子入がイエスの活動の絶對的發端である如く思ふは誤りである。未だ何等の說敎をも聞かず感化をも受けずして彼等が職業までも擲つて殆ど初對面の人に從つたとはあまりに奇怪である。つまりペテロは

記憶をたどつて最も深き印象を留めた弟子入の日よりいつも物語をはじめたのである。馬加傳の記事が奇怪のやうに見ゆるは却てそが直弟子の實歴談を保存せる一の證據である。

耶蘇傳は不可能

然しながらカリラヤに於けるイエスの活動を時の順序を追うて一々記述するは全く不可能の事である。福音書の記述は材料を事柄によつて排列した傾あり多くの點に於て殆ど超時間的である。例へば有名な山上の說敎の如き誰も其の速記錄より得たものとは思ふまい。それに、福音書相互の間に多少の相異がある。其うちより正しき順序を探りあてむことは望むべきでない。其故所謂「耶蘇傳」又は「基督傳」は不可能である。然し大體の經過は幸にして福音書によつて知り得るのである。

棄てられたるものを特に求む

イエスは人を撰ばなかつた。耳を貸すものには誰にでも喜んで神の國のうれしきおとづれを傳へた。殊に專門的宗敎家が席を同うするだに汚れと考へたイスラエルの家の迷へる羊、即ち稅吏や罪人や貧しき者や饑たるものは彼自ら進で尋ね求めた。彼はまた時や處を撰ばなかつた。安息日にても、平日にても、會堂にても、私宅にても、山上にても、湖畔にても、折りだにあらば口を開いた。彼の說敎は深大の印象を與へた。學者や專門宗敎家のと異つていかにも猛烈と聽者は感じた。彼は單に說敎したばかりでない業を以て人を助けた。病に苦しめるもの、殊に惡鬼につかれると稱せられた一種の精神病になやめるものなどを見ては彼は同情を禁じ得なかつた。威嚴と愛情とにみちた彼の一言は彼に身を任せた人々の病をたちどころに癒した。彼の名聲は次第に高まり老たるも若きも男も女も狂せむばかりの熱心もて彼をむかへた。彼は精神の散漫にならむを恐れ時々群集を避け人なき處に獨り神に祈つた。時としては湖をこえはるかに國境以外までも落行つた。彼は奇しき業其ものをわが成功の手段とはせず人より促がされても斷然拒絕した。彼は同情の精神より「奇跡」を行つたのである。

奇跡の精神

專門的宗敎家との障突

イエスは決して新しき宗敎を開かうとはしなかつた。彼はたゞ父祖に約束せられた神意の實現をもたらしイスラエルの宗敎の眞髓を發揮

するをわが天職としたのである。其にも拘らず、否むしろ其爲めに彼は宗教の內的生命を失はむとした當時の專問的宗教家と障突するに至つた。彼の偉大なる成功は彼等の反目を促した。新なる障突ごとに兩者の杆格はます〳〵大きくなり、全く異つた精神が兩者に宿つて居ることはます〳〵明になつた。イエスは苟合妥協をよき事と思ふ人でない。彼は猛烈なる攻擊を試みた。律法の枝葉にのみ拘泥して其の眞髓なる義とあはれみと誠とを顧みざること、盃や皿のみ清くして心のうちはきたなきいやしき考に充ちたること、外に敬虔をてらひて內は名利に汲々たること、人の肩に律法の堪へがたき重荷を負はせながらつかれたるもの重きを負へるものをやすませむ爲め指一つ動かさむとだにせざること――是等宗教專問家の痼疾を彼は忌憚なく暴露した。一方にひとり意氣揚々として神の寵兒を氣取れる彼等を見他方に孤兒の如くすてられてまよへる民衆を見ては彼は憤慨是等の國民指導者の瀆職を彈劾せずには居られなかつた。彼は爲めに惡まれた。彼等はあらゆる手段を

盡して彼の勢力を殺がむと試みた。かてて加へて、たゞ新奇にのみ引かれて馳せ集うた多數の人々の熱心は時と共に冷却した。彼があゝ禍なるかなコラジンよベテサイダよカペルナウムよと叫んだ(馬太一一の二一以下)によつても彼がいかにがき經驗をなめたかは思ひやられる。然し彼は希望を失はなかつた。彼はつひに敵の本陣に攻寄せて決戰を試みむといで立つた。

イエスは死なむ爲め十字架にかけられむ爲めにイエルサレムに上つたのではない。吾人は信仰に對して彼の死が何を意味するかてふ問題と、彼自身が死に對していかなる態度を取つたか、そを己が活動の目的としたかてふ問題とを混同してはならぬ。吾人が今こゝに論ずるは第二の歷史的問題である。彼がイエルサレムに上らむとした際の彼の心事を洩らした、注意すべき語が傳つて居る。「火を地に投げむ爲めにわれ來れり、我願ふいかばかりぞ、その火の既に燃えたらむを。われ受くべきバプテマスあり、わが氣遣はしさいかばかりぞ、その成遂げられむまでは」と

（路加一二の四九・五〇）。彼は己が天職のやすらかに成遂げらるべきにあらず猛烈なる戰鬪の來らむを豫期した。彼は忠實なる弟子等の一小群を率ゐて勇はしくこの決戰の途に上つたのである。彼は苦戰を期し又、或は戰死の免る可らざらむを感じた。福音書に見ゆる苦難及死の豫言は其言葉通りには後の信仰の產物であらうが事實の根據を缺けるものとは思はれぬ。有力家の手强き反對、民衆の去就定まらぬ態度を見ながらなほ太平を謳歌するほどに彼は愚ではなかつた。然しまた彼が死以外の運命の不可能を知り死そのものを目的としたとはあまりに不自然である。彼は戰場に出立つ勇士の如くに死を覺悟したのである。その覺悟は生還の希望を含んだ覺悟であつた。彼は、上に擧げた言葉で明なる如く、戰場に向ふ人の感ずる一種の氣遣はしさと待遠しさとを感じたのである。然ながら彼は己が身はいかにならうとも神より受けた使命は必ず成遂げらるゝを確信した。彼は戰死は必しも敗北に非ざるを知り、弟子等が決戰を思止らしめむと引止むるをも聽かず、勝利を期して勇ましく出立つた。

イエルサレムに於ける出來事

イエスが國都に乘込んだのはパシャの祭の前であつた。祭の爲め都に上つて來たガリラヤ人の群集は忽ち彼を認めて狂せむばかりに歡呼の聲をあげ、來らむダビテの國の王即メシヤとして彼を迎へた。彼は神殿におもむきそこより商人を追出し彼等の器具を破壞した。これ敵に對する宣戰の布告であつた。祭司長をはじめサドカイと稱する貴族黨も今や彼の敵となつた。貴族黨も平民黨もサドカイもパリサイも古き敵も新しき敵も本來の反目を打忘れ、聯合してこの危險なる侵入者を無きものにせむと計つた。事が擴がつて人民の暴動の起らむを恐れ彼等は一刻の猶豫もなく彼を捕へいそぎ彼を訊問しローマの總督に渡した。彼はつひに磔刑に處せられた。弟子等は事の全く破れたを見て取り失望やる瀬なく倉皇ガリラヤに遁歸つた。

死に於ける勝利の確信

イエスは法庭の訊問に答へてメシヤたる自信を吐露し、ダニエル書七の一三）の豫言に見ゆる如く天の雲に乘つて再び來り神の使命を全うせ

臨終の祈

むを約した。彼は祭司長の前に於てもローマの總督の前に於ても憐みを乞はず、主張を枉げず、嚴かに答へ、自若として刑の宣告をきいた。彼は自暴自棄この擧に出たのでない、たとひ死は動かす可らざる運命とはいへ、其死は却て生に變じ、失敗に了りたる如く見ゆる己が事業は必ず勝利に歸し、世革まつて惱みも罪もなき神のうれしき御代の現はれむを信じたのである。彼は全く己が天職の爲めにたふれた。彼若しかりそめにも讓歩し又はいやしき振舞に出でたなら、そは必ず彼を心から惡んだ熱心なるパリサィのサウル(パウロ)の耳に這入つたであらう。若し然らば十字架は決して新しき宗教がローマの世界を征服する譽れの旗標とはならなかつたであらう。イエスは勝利を信じて十字架にかけられたのである。

しかるにイエスが十字架の上にて發した言葉として傳つて居るものは其の反對を示すやうに見える。「わが神々々何故われを棄て給ふか」と。然しこは失望の聲ではなかつた。吾人はこの語の出處を忘れては

イエスの罪名

ならぬ。こは詩篇第二十二のはじめのことばである。堪へ難きなやみを神に訴へ其の助を呼びつゝ、この篇の詩人はつひに希望と信頼との告白に了つた。平常詩篇のあたゝかき敬虔のうちに呼吸したイエスが臨終の堪へ難き苦痛に際してなやめる詩人の祈を思出しそを己が祈として慰めを求めたのは別に不思議でない。

最後に起る問題はイエスはいかなる罪名のもとに處刑せられたかである。ローマの總督ピラトは十字架の上に「猶太人の王」と書かしめた。彼はメシヤを政治的に解し、イエスを人民を煽動し暴動を起して猶太人の獨立をはかる危險なる反逆人と考へたのである。イエルサレムの高等法院がかくの如き罪人として彼をピラトに渡したのであらう。さて其高等法院其ものには彼はいかなる罪を以て問はれたか。福音書の記事によれば、裁判官が汝は神の子メシヤなりやと問うたのに「然り汝等は人の子が大權の右に坐し天の雲の中に現はれ來るを見む」と答へた爲め、イエスは瀆神罪に問はれたのである。メシヤを以て自任するは猶

太人の法律よりいへば罪を構成せぬとはいへ、兼ねては神聖なる律法の蹂躙者とめざゝれ、今は友より棄てられ敵の手に捕へられいかなる屈辱にも委ねられ得べき身となつた一村夫子がなほもこりずに己が非を自白せぬのみか、神の子ぞメシャぞと名のるを見た裁判官の眼にはイエスは神の榮譽を損ね其の神聖を瀆す大膽不敵の惡逆人と映じたであらう。然しメシヤの告白はたゞ判決の最后の動機をなしたのみで唯一又は最大の原因ではなかつた。イエスを訊問した裁判官等は裁判に先つて既に彼を除かむとのかたき決心をもつて居たのである。彼等は一刻の猶豫もゆゝしき大事を惹起さむを恐れ祭日なるにも拘らず(イエスが捕はれたのはパシヤ祭の第一日、猶太人の暦によればニザンの月の十五日であつた)裁判を開き有罪を判決し、危險なる叛逆者として彼をピラトに渡した。吾人は彼等が單に私のいやしき動機より、祭日の規定に抵觸するをも顧みざるまでにイエスの滅亡を急いだと解してはならぬ。彼の鋭利なる攻擊、彼の勇敢なる態度、人間の權威を物ともせざる彼の敬虔が「モ

イエスは父祖の宗教の敵として殺されたるなり

ーゼの位を占領し國民の師表を以て自ら任じた學者やパリサイ人などに決して甘露の味を與へなかつたはいふまでもない。然し高等法院を左右した此等の專問的宗教家がたゞ私の怨みや嫉みのみに動かされたと思ふはいみじき誤解である。ソクラテスをして毒盃を傾けしめたアテン人と同じく彼等は公益の爲めにイエスを十字架にかけたのである。彼等はイエスを除くを父祖の宗教の擁護者たる己等の義務と信じたのである。彼等は彼を人民を敎唆して神の律法に背かしめ、自らメシヤと稱して神の神聖なる約束をふみにじる叛逆者と信じた。彼等は己の責任否神の命と信じた所を決行したに過ぎぬ。而して他方に於てイエス自身は迷へる人民を父祖の宗教に導き、彼等に神の約束の實現の近いたうれしきおとづれを傳へ彼等を慰め勵まし救ふを己が天職と信じとの自覺よりして反對者を攻擊した。兩者は動機に於て殆ど一致した。彼等は其爲めに狼狽危險を除かむとし、彼は其爲めに捕へられて泰然自若勝利を信じて死に就いた。彼等は勝利を得て凱歌を奏した。しかも將

來は却て敗者のものとなつた。「世界の歴史は、この場合にも、誤なき「世界の審判」であつた。

福音

神の國は近づけり

イエスは「神の國は近けり」てふ簡單なる宣言を以て彼の活動をはじめた。神の國とは何であるか。

彼に先だつてバプテスマのヨハネはすでに同じおとづれを傳へて人を動かした。イエスの神の國の觀念が猶太人一般の信仰に土臺をもつて居たことはそれによつても明かである。若し自己獨得の觀念をひろめむとし又は宗教の改革者たらむとする意が彼にあつたなら彼は必ず己の説く「神の國」の意義を特に説明したであらう。しかるに彼はいつづこにもかゝる説明を試みなかつた。パリサイ人との激烈なる戰鬪に於ても彼は彼等が神の國の觀念を誤つたとは攻擊しなかつた。神の國としいはば聽者が直ちに彼の意を解するものと彼は豫想したのである。

神の國は地上的有形的

彼は猶太人にのみ説教した。彼等が待ちあこがれた神の國が今近づいたといふのが彼の傳へたうれしきおとづれ(福音)であつた。

一般の猶太人に於けるが如く、彼に於ても「神の國」は地上のもの有形的のものであつた。彼は柔和なるものに地を嗣ぐべしとの希望を與へ(馬太五の五)弟子等に來らむ神の國にても食卓を共にせむと約した(馬加一四の二五、路加二二の三〇)。神の支配のあまねく行渡る新しき世に於ても人間は矢張人間、形骸なき純粹の精神となつて仕舞ふのではない。これを單に形容譬喩とのみ解するはガリラヤの大工の息子をアテネ邊の哲學者などと混同するに等しい。空とぶ鳥をも豊かに養ひ請ふにまかせて日々の糧を人に與ふる天の父は新しき榮の世に於ていかでパンや葡萄酒を惜まうとは田舍者イエスの無邪氣な考であつた。かのヤコブとヨハネとの兄弟が神の國に於てイエスの左右の名譽の席を得むと請うた時彼は彼等の功名心を抑へたものゝかく有形的に考ふるの誤りには一言も説及ばなかつた(馬加一〇の三五以下)。彼の視線がいかに己が

イエスの觀念は國民的精神を超越せり

國民を離れなかつたかは彼が世革まりたる時は弟子等は十二の位に座してイスラエルの十二の族をさばき(馬太一九の二八、路加二二の二九)アブラハム、イザク、ヤコブの列祖も亦神の國に坐するであらうと(馬太八の一一)考へたによつても明かである。

然しながら猶太人の神の國の觀念はイエスの精神を通過する際に醇化せられた。彼は神の國の出現が異邦人の滅亡を意味するてふ一般の希望にたづさはらなかつた。メシヤはダビデの王家より出づてふ信仰さへ彼は否定した(馬加一二の三五以下)。彼は政治と宗教とを明に區別し、カイゼル(皇帝)のものはカイゼルに與へ神のものは神に與へよとをしへた。彼が決戰せむ爲めイエルサレムに上つた態度を見ればローマ人が彼の眼中になかつたは明かである。彼の數多き教訓は猶太人たる資格に關するよりはむしろ人間としての責任に關するものであつた。彼は政治よりも宗教を猶太人よりも人間を、イスラエルよりも神を重じた。

イエスの異邦人に對する態度も亦彼の新しき精神を證明する。彼は決して己が同胞の歎きに耳をも貸さで徒らに門戸を開放して得々たるものではなかつた。イスラエルの爲めに同胞の爲めに神に送られたを彼は明に自覺した。其故に彼はイスラエルの家の迷へる羊に遣はされたものというて異邦人の助けを乞ふ者を拒まむとさへした(馬太一五の二四)。弟子等を傳道に派遣する時にも彼は特に「異邦の途に往くなかれ、サマリヤ人の村に入るなかれ、たゞイスラエルの家の迷へる羊にゆけ」とをしへた(馬太一〇の六・七)。彼はパリサイの徒があまねく海山を歴巡りて一人だに己が宗旨に引入れむと力めながら同胞のたへかねてうめける重荷には指一だに觸れむとせざるを責め禍なるかなと呼んだ(馬太二三の四・一五)。然るにこの保守家のイエスは異邦人と雖も信仰篤きを見ていはこふがまいに助けをかしした(馬加七の二五以下馬太八の五以下)。それのみでない。イスラエルが頑迷固陋彼の福音を斥くるを經驗しては

イエスの心眼は遙かに「多の人々東より西より來りてアブラハム、イザク、ヤコブと偕に天國に坐し、國の子どもは外の暗に逐出だされむ」時を望み

見た(馬太八の一一・二)。彼の精神は猶太人固有の偏狹なる國民的精神を全く超絶した。

神の國の眞髓は精神的

イエスが神の國を地上的有形的に考へたは既に述べた通りであるが、吾人はそれが彼の福音の中心點をなしたのでないを忘れてはならぬ。神の國は神の支配である、神の本質神の生命の普ねく凡てに行渡る新しき世である。人間にとつては、それは神に反對するもの、神を隔つるもの、悉く失せて惱も涙も罪も死もなくなつた永遠の生命、妙へにうれしき神との親しき交りである。神の慰め神のあはれみを得る神を見る神の子と稱せらるゝ――是即ち神の國である。有形的の觀念は勿論單の譬喩ではない、しかしまた眞髓ではない。「神の國は飲食ひに非ず、義と聖靈に於ける平和及び歡びとなり」(羅馬一四の一七)といふたパウロは師の眞意をよく解し得たものである。

神の國は將來のもの

猶太人には神の國は全く將來のものであつた。イスラエルが異邦人の軛の下に苦める間はサタンの世である。是に於てか猶太人は首さしのべて神の支配の行はれむ時を切に望んだ。

此點に於てもイエスは忠實なるイスラエルの子であつた。彼は神の國を將來に待望んだのである。彼の傳へたうれしきおとづれは「神の國近づけり」といふので「神の國來れり」といふのではなかつた。彼は弟子等にもその近づいた神の國の福音を傳へよと命じた(馬太一〇の七、路加一〇の九・一一)。彼等は師のをしへに從つて「御國を來らせ給へ」と祈つた(馬太六の九)。所謂山上の說敎の「福なるかな」(馬太五の三以下、路加六の二〇以下)は希望のことば、約束のことばであつた。今哀める者は慰めを得るであらう。今泣ける者は笑ふに至るであらう。「神の御代とならば」といづれにも離れぬ條件である。「神の國に入る」又は「天國に入る」とはイエスがたえず用ゐた言葉であつた(馬加九の四七、一〇の一五・二三以下、馬太五の二〇、七の二一)。かの榮の世に於て譽れの席を請うたヤコブとヨハネとに對してもイエスはその榮の世は既に現はれて居るとは答へなかつた。この世の名殘の最后の晩餐に於ても彼は神の國に於て再び食卓

を共にせむと弟子等に約束した(馬加一四の二五、路加二二の三〇)。イエスにとつて神の國が希望の對象であつたことはもはや疑ない。

其他彼が當時の猶太人と同じく死人の復活と神の審判とを神の國出現の序と考へたによつても彼がそを將來に望んだは明かである。尤も彼は其大活劇が目の前に迫れるを見た。彼は「こゝに立てる者の內に神の國が權威をもて來るを見るまでは死なぬ者があらう」(馬加九の一)又は「イスラエルの町々に福音の行渡らぬ前に神の國は現はれるだらう」(馬太一〇の二三)とまでそれの接近せるを信じた。しかもそれがまだ現はれて居ないといふ意はこれらの言葉の裏に含まれて居る。

然しながらイエスの福音はこれと反對の要素をも含んだ。神の國の現在てふ觀念に於て彼は全く猶太教を超越した。

「われ神の靈によつて鬼を逐出さば神の國は既に汝等に來れるなり」(馬太一二の二八)。イエスは惡鬼の驅逐を以て神の國のはじまりとしたのである。弟子等傳道より歸つて惡鬼の服したを語つた時彼はよろこんで「われ電の如くサタンの天より落つるを見たり」と叫んだ(路加一〇の一八)。彼の活動とともにサタンの世はもはや終を告げたのである。

神の國はいつ來るかとのパリサイ人の問にイエスは「そは汝等のうちにあり」と答へた(路加一七の二一)。この語は神の國は人間の精神のうちにのみ存するといふ意に解され易いが、相手がパリサイ人であつたを思へばイエスにかゝる意のなかつたは明かである。眞意は次の如くである。神の國はしか〳〵の徵ある故に來ると豫め其の來る日を定め又は計算し得べきものでない。見よそは既に汝等の目の前に現はれて居るではないか、汝等はそれに氣附かぬか。かくイエスはパリサイ人等が彼の活動の眞の意義を悟らず神の御代をたゞ將來にのみ待望めるを責めたのである。

イエスは神の國を芥子種に譬へた(馬太一三の三一以下)。そは萬の種子より小さいが人これを取つて播けば他の草よりも大きく空の鳥が來つて宿るほどの樹となると。彼は又ぱんだねの譬喩をも用ゐた。それ

を少しばかり三斗の粉の中に入れればその粉は膨れ出すと。――これらの譬は日常の經驗の上の事實を借りて神の國の始はいかに小なりとも終は驚くばかりなるを説明したもので、意外不思議てふことが其の主眼であるが、神の[illegible]が若し全然將來にのみ屬し現在には何等の形跡をも示さず神の審判の日を以て突如として現はれるものであるならばこれらの譬喩は全く當嵌らぬ。たとひ外觀はいかに見すぼらしく光りかゞやけるものなしとはいへ、たとひ又其爲めに世の賢き人々、學者やパリサイ人等はそれと認め得ぬとはいへ、新しき世のはじまりは既にイエス自身の活動に於て現在して居ると彼は信じたのである。

かくの如くイエスは己の人格と活動とによつて神の國が既に始まつたと信じた。一方に於ては將來のものとして待望み他方に於ては既に現在のものと考へる――イエスは自家撞着に陷つたやうに思はれる。果してそうであらうか。吾人はこの一見矛盾的なる彼の信念を解するに先つて一大難問を發せねばならぬ。彼は己が天職をいかに考へたか。

メシヤの自覺の問題

神の國と己が人格との關係をいかに考へたか。彼はメシヤであるといふ自覺を有したか。

原始教會のこれに對する答は、福音書の示す如く、甚だ明白である。イエスは舊約書によつて豫言せられた救主メシヤ(クリスト)であり彼自身もしか考へたとは初代の信者の動かぬ根本的中心的の確信であつた。問題は彼等の確信がはたして同時にイエス自身の確信であつたかに存する。今日はメルクス(Merx)の如き全然否定的の答を與ふる者をはじめとしウエルハウゼン(Wellhausen)ウレーデ(Wrede)など甚だ懷疑的の態度を取れる學者が少くない。此等の人々は必しもたゞ破壞をのみ喜ぶものではない。彼等は傾聽すべき論據を有つて居る。吾人今試みに山上の説教に映じたイエスを取つて見やう。殆ど希臘の哲人かとおもはれるのである。月[illegible]がいかにものどかにしづけく、うらゝかな春の日に野邊をそゞろありきするやうな趣がある。野の百合のよそほひも空とぶ鳥のたはむれも皆天なる父の慈愛を示して居る。其慈愛のかひなに

イエスに於ける希臘的要素

メシヤは純猶太人的觀念

メシヤの自覺は事實

抱かれ日々の糧には事定り犯せる罪は赦されて憂なく惱なく、心はいひも知らぬよろこびに充ち、私なく邪なくたゞ父の旨にかなはむと力めいそしむ。生存競爭のかしましき響は全く聞えぬ。かくの如き希臘的ともいふべきうるはしき理想を與へたやうに思はれるイエスがはたして自らメシヤだと信じたであらうか。メシヤは純猶太人的思想の產物である。外國人の壓迫に對する偏狹なる國民的精神の反抗の聲である。其の情調はいかにも凄味を帶び、空かきくもり今にも大嵐とならむ風情が見える。かく考へ來れば吾人はメシヤの觀念を可成イエス自身より遠ざけむとする人々にも一理あるを認めざるを得ぬ。然し吾人は彼等の懷疑的又は否定的傾向に從ひ得ぬのである。奇異ではあらうがイエスは自らメシヤと確信した。この自信この自覺こそ彼の宗教的活動の原動力であつた。吾人は進んでこの自覺をやゝ精細に考察しやう。

吾人は先づイエスのメシヤの自覺が事實であつたことを證明せねばならぬ。猶太人の觀念によれば、メシヤは新しき黃金時代の王、異邦人を全く屈服せしめイスラエルを世界の職たらしむる勇士、イスラエル否世界の歷史の至り極まる頂點である。豫言者は既に常人を超えて神と特別の關係を結べる者であるが、メシヤは更らに豫言者をも超えた聖靈を受けた神の子である。豫言者はメシヤの先驅として來らむ新しき世を豫め告ぐるもの、メシヤはそを自ら齎すものである。前者は己より高きものを指さし後者は神以上には何者をも戴かざる最高のもの、いはゞ超人である。

超人的意識

而してイエスは超人的意識を有した。彼はもと田舍の大工の息子、宗教でふ專門の技術に於ては全くの素人であつた。しかるに彼は國民の指導者なる專門家、學者やパリサイの徒を排して、凡て勞れたる者重きを負へる者に、われに來つて息みを得よと呼んだ。律法を神意と敬重しながら、凡ての權威、モーゼにさへ反對し「されどわれ汝等に告げむ」とて己自身を新しき權威とたてた。專門宗教家が彼の說教に耳を貸さゝるをせめて彼は「こゝにはヨーナ（古の豫言者）よりもソロモン（古の名王）よりも大なるものあ

るに非ずや」(馬太一二の四一・二)といつた。「天地はうせむ、されどわが言はうせじ」(馬加一三の三一)、「われに從へ、われに從はむとおもふ者は己をすて十字架を負うて來れ」(馬加八の三四)、「父母、妻子、兄弟、姉妹、否おのが生命をも憎む者に非ずはわが弟子となるを得ず」(路加一四の二六)、――是等は弟子等に對して發せられた彼の言であつた。專門宗教家より瀆神罪の譏を受くるをも顧みず彼は惱める者に「汝の罪赦されたり」との宣告を與へたる(馬加の二の五)。彼はあらゆる人間のうち自らたゞ獨り神と特別の關係あるを斷言した。「凡てのものはわが父よりわれに賜はりたり、誰も父のほかに子を能く知る者なく、また誰も子と、子が示さむと欲する者との外に、父を能く知る者なし」と(馬太一一の二七)。彼は己ひとり神の本質の秘密を知り、又神のみ己が心中の秘密を知ると信じ、凡て他の人間に對し神の啓示者として特別の權威を主張した。近親のものには狂人とみられたる彼、宗教家に非ず神學者に非ずただ田舍の質朴なる大工に過ぎざる彼が立つてあらゆる國民の師表を排し、否あらゆる人間の上に己を置い

直接の証據

バプテスマのヨハネの問

て、われこそ神の代表者というたのである。あらゆる人間の權威を斥けて、自ら神の權威を以て人に對したのである。

吾人は進んで一層直接なる證據を求めやう。

バプテスマのヨハネは獄中に在つてイエスの活動を聞きもしや彼がメシヤではないかとの考を起し、弟子等を遣つて「汝はかの來るべきものなるか或はほかの者をわれらなほ待居るべきか」と問はしめた(馬太一一の一以下)。汝はメシヤなるかの意である。「行きて汝等ヨハネに告げよ、汝等が聞くところ見るところの事を。盲人は見、跛者は歩み、癩病者は潔められ、つんぼは聞き、死にし者は甦り、貧しき者には福音傳へられたり。福なり、我に躓かざる者は」とはイエスの答であつた。さてめしひは見云々はイザヤ書(三五の五、六一の一)が來らむ神の御代のよろこばしさを語つた言葉である。されば、イエスの答の意味は次の如くであつた。「わが業を見よ、それによつても神が豫言者によつて約束したよろこばしき世が來つたのはわかつて居るではないか。神の榮えは未だ全くあらはれ

イエスの罪名

ず、われまたかく見すぼらしい樣にあるも、その爲めに躓き疑はぬ者は福である」と。彼はあらはにそれとはいはなかつたが、彼の答は「われはメシヤなり」といつたのと少しのかはりもない。彼メシヤならばヨハネはそれではない。それ故婦の生んだ者のうちヨハネより大なる者はなく、彼は豫言者の最大なるものであるが、しかも過去の世の人たるに過ぎぬ。神の國の最小なるものも彼よりは大である　かくイエスはヨハネを以て準備者己自身を以て完成者としたのである。

既にいつた如く、イエスの十字架には「猶太人の王」といふ札が掲げられた。猶太人の有司が彼を自稱メシヤとしてピラトに渡し後者は彼を謀叛者として處刑したは明かである。猶太人の法庭に於ても彼はメシヤの自信を吐露した。イエスの弟子等が誰もその場に臨まなかつたといふ理由を以ては裁判の記事は否認出來ぬのである。イエスを葬つたアリマチアのヨゼフは高等法院の一員であつた。彼の口から其場の光景が弟子等の間に洩れなかつたとは保證が出來ぬ。他の議員等も父祖の

メシヤとして國都に入る

ペテロの告白

宗教の大敵たる僞メシヤを除いた手柄話をしたに相違ない。國都を騷がした事件の成行が人々の好奇心を挑發しなかつたとは考へられぬ。列席者ははたして其好奇心に全然反抗の態度を取つたであらうか。吾人は、イエスは自信を告白し、爲めに僞メシヤとして瀆神罪に問はれたといふ福音書の記事を疑ふべき有力の理由をもたぬ。彼はメシヤとして十字架にかけられたのである。――イエスがメシヤとして國都に乘込んだことも否定すべからざる事實である。今假りに彼が驢馬に乘つたといふ記事を(その必要はないと思ふが)ザカリヤ書(九の九)の豫言より來つた後の信者間の想像とするも、彼が民衆よりメシヤとして歡迎を受けたは事實である。然るに彼は彼等の歡呼の聲を抑へやうともせざりしのみか、人が危險を慮つて故障を申込んだ時、彼はこれらのもの默せば石さけばむと答へた。彼は民衆の熱誠の發露をよろこんで受けたのである。

イエルサレムへ上る前カイザレア・フィリピに於て起つて出來事(馬加

八の二七以下)は特別の注意を要する。イエスは弟子等に向つて汝等はわれを誰となすかと問うた。ペテロは直ちにメシヤ(クリスト)と答へた。處がイエスは弟子等を叱して誰にも彼について語るなというた。――さてこゝに起る問題は何故にイエスがこの奇異な態度を取つたかである。彼は自らメシヤてふ確信なく從つて彼をまか信じた弟子等を叱し彼について公に語るを禁じたのであらうか。然し若然りとしたなら何故彼は弟子等を代表したペテロの答が誤つて居るとあらはにをしへなかつたか。彼が先づ人々はわれを誰れとなすと問ひメシヤ以外の答を得て後更らに弟子等に汝等自身はと問うた勢を察すれば彼はあやぶみながらも彼等より正しき答を期待したのではなからうか。兎に角彼がたゞ徒らに好奇心よりかゝる問を發したとは思へぬ。彼が決戰の途に上る門出は近きに迫つた。彼の心は神のありがたき使命にみちゝて居たに相違ない。彼ははたして弟子等の覺悟をたゞし置く必要がなかつたであらうか。かゝる際に若し弟子等が彼の天職を誤解して居たならばゆゝしき大事、彼がメシヤの自覺を有せざりしなら必ずあからさまに弟子等の誤を正したであらう。しかるに彼がしかせずして單に人に語るなかれとのみをしへたのは何かほかに意味がなければならぬ。彼等が未だ通俗のメシヤの觀念を去り得ず、世間的の勝利と光榮とをイエスに於て期待したならば彼がペテロの答を否認はせずしてしかも彼等を叱して人に語るなかれというた奇異な態度も解し得られる。彼は一つには弟子等が民衆を誤つた希望に誘はむを恐れたのである。イエスは神の國の觀念從てメシヤの觀念より政治的要素を全く除き去つた。それのみでない、彼は己の將來の暗憺たるべきをさへ感じた。彼は政治的のみならず凡ての世間的の光榮をも擲たむとした。彼は猶太人にとつては氷炭相容れぬ二の觀念、一方に於てはメシヤ、他方に於ては死及苦難を己が天職の自覺に於て結合せむとした。然るに彼はペテロ及弟子等の態度によつて、彼等がわが胸中の秘密を解しかぬるを見て取つた。彼等がこの時のみならず最后までつひに迷夢より覺醒するに至らず、師

イエスはメシヤがビテの子てふ思想を駁す

の捕はれたるを見て失望落膽ガラリヤに遁歸つたを思へば彼を信じ又愛する彼等に圍繞せられつゝも彼がいかに精神的に孤獨の位置にあつたは推測られる。かのペテロの答に對するイエスの奇異なる態度も畢竟一つにはこの孤獨の感の發露である。他の人々はどうあらうと弟子等だけはもしもやと思つた彼は半ば失望した。彼はやゝむつとして彼等に他言を禁じた。福音書によればイエスがこの出來事のあつた后弟子等に苦難及死の避く可らざらむを說き聞かせたといふによつても又そを聞いたペテロが彼を引留めてイエルサレム行を思止まらしめむとしたといふによつても、吾人の解釋の最も正鵠を得たものであるは明かである。

吾人はなほ一二の證據を擧げやう。イエスがメシヤをダビデの子(後裔)となす學者の說を駁擊したこと(馬加一二の三五以下)は既にいうた如く最も確實なる事實に屬する。さてイエスは何の爲めにこの駁擊をなしたか。彼が徒らに學究的討論に興味を覺えたとは言らしくない。彼

イエス死後の弟子等の信仰

自身に直接關したことせば一層自然である。彼が自らダビデの裔ならぬことを知つて居たかは別問題として、兎に角己の天職と信ずる所と國民一般の信ずる政治的メシヤの觀念との不一致を感じ彼は自信を辯護する爲め學者及一般人民の信ずる所を駁したものらしい。――最后にイエスの死后彼の復活の信仰が生じた時弟子等が彼をメシヤとあがめたことは疑ふ可らざる事實である。彼の生前弟子等に彼こそメシヤてふ信念がなかつたならば、又た彼自身かゝる信念を妨げる方針を取つたならば彼の死后この信念が現はれ弟子等に生命をも所有をも擲つて顧みざる勇氣と熱誠とを與へた事實は不思議の極である。後に論ずる如く、復活の信仰の起源すらすでに解し難き事實である。それにメシヤの信仰の新しき發生を加へむとするは徒らに不思議を喜ぶものといはねばならぬ。イエスの死は猶太人にとつては彼がメシヤならぬ最も有力なる反證であつた。たとひ復活の信仰のすでに存した后とするも、メシヤの信仰がしかもイエスの本意に反して新たに起り得たとははたし

て考へ得るであらうか。イエスの死后に起つた事實は明かに、弟子等が彼の生前メシヤと彼を信じたこと又彼が少くも其信仰を妨げなかつたことを證するのである。

かくの如くイエスはメシヤと自ら信じたのである。彼はナザレの田舍者しかもあらゆる學者宗教家豫言者を排し、神の代表者、神によつて特に送られた新しき世の王を以て自任した。偉大なる宗教的人格にあらずは殆ど狂人である。歴史は彼が前者であつたを證明した。彼は胸中棄て難き神の使命を感じよろこんで之に服したのである。

この彼の使命の意識を解するには、吾人は彼の自覺の他方面をも見ねばならぬ。超人的自覺より殆どなほ不思議に思はれるは彼の神に對する謙遜である。自ら萬人を排してたゞ獨り神を識り神に識らるゝと信じた彼は人物崇拜には全く反對であつた。彼は徒らに「主よ主よ」と追從するものを斥けた(馬太七の二一)。善き師よと呼ぶ者に對し彼は「何故にわれを善しと呼ぶか、善きものはたゞ神あるのみ」と答へた(馬加一〇の一八)。自ら神の國を齎す者と信じ世の革新の目の前に迫れるを天地はすともわが言はうせじと確めて斷言した彼はいづれの日いづれの時と知るものはたゞ神あるのみといつた(馬加一三の三二)。アポカリプシス風に神意を數もて計算せむなどは彼の敬虔の忍びざる所であつた。ゼベダイの二人の子等が新しき世に於ける榮譽の席を求めた時にも彼はそを與ふるは彼の權内になきを答へた。死を目の前に控へた彼はゲッセマネに於てわが胸中をさらけ出して赤子の如く無邪氣に神に祈つた(馬加一四の三二以下 路加二二の四〇以下)。この杯を取去り給へ、しかもわが意ふがまゝにあらず御心のまゝにと。かくばかり謙遜と信頼との念にみちた祈はまれである。彼は彼自身の爲めには神の特別の愛顧をだに強ひて請はなかつた。彼は神はすべて、己は無なるを感じ、一切をその父の手に委ねたのである。イエスの人格に於て最も不思議に覺ゆるは、この超人的自覺と神に對する深き謙遜との結合である。この謙遜あるが故にかの自覺は深きいつはりなき意味を得來るのである。彼はも

メシヤの觀念の改造

だし難き神の召を受け、謙遜と信賴とを以て神意の實現をわが天職と信じた。其故自身に對しては崇拜を斥けながら神意の貫徹と信ずる場合には獨り特別なる資格を主張し、神の權威を以て人に臨んだ。

然しながら彼の天職は猶太人一般のメシヤの觀念とは必しも凡ての點に於て一致しなかつた。通俗のメシヤは羅馬人を足下にふみにじる世間的の王であつた。しかるにイエスは、既に述べた如く、凡ての政治的觀念を斥けた。それのみでない、彼は猶太人にとつてはメシヤの正反對なる苦難及死をさへ己が天職の要素と考へるに至つた。彼とてはじめより死の外の運命の不可能を期したのではない。否彼が最后まで死を見ずして使命を完うし得むと心ひそかに願つたはかのゲッセマネの祈りでも明かである。しかし苦と死との避く可らざらむを感じた時にも、それらが事實として目の前に迫り來つた時にも、彼は己が天職に疑を抱かなかつた。この彼の天職の自覺によつて猶太人のメシヤの思想は根底より改造されたのである。彼の心事がいかに訓へ諭しても弟子等にすらつひに彼の死后まで了解出來なかつたは當然である。しかも彼の偉大はそれによつて一層明になる。彼のたゞ神の使命に從ふ深き敬虔の念は不知不識の間に猶太人が何よりも忌嫌うた苦と死とを無上の光榮と結合し得しめた。彼は逆境の深き意義を身を以て敎へた。屈辱は却て勝利を、死は却て生を意味するてふ眞理を彼は己が身に實現した。かくて猶太敎の夢にも知らなかつた新な世界は彼の人格に於て開かれた。逆境の意義を知るに苦みて煩悶し神にすがりついてやつと精神的暗黑をのがれた詩篇やヨブ記の詩人と、われはなやみをほまれとす(羅馬五の三)といつたパウロとを比較せば全く別世界の趣がある。而して此等兩世界の境界線を引いたものはイエスである。

人の子の稱號

メシヤ問題と關聯して問題となるは「人の子」てふ稱號である。イエスははたして福音書の記事にある如く、この稱號を自ら用ゐたか。今日は之を否定する學者が少くない。今こゝにこの錯綜せる問題を詳論するは到底不可能故、吾人はたゞ大體の議論で滿足せねばならぬ。兎に角吾

人はかの稱號を以て全く后の敎會の信仰の產物とする說には從ひ得ぬのである。

さて福音書の「人の子」はイエスの母語たるアラマイ語に於てはたゞ人を意味する。されば原語にて單に人の意であつたのが希臘語に飜譯せらるゝ時「人の子」の意に誤解せられたとも考へられないではない。今馬加傳を取つてかのカイザレア・フイリピに於けるメシヤの告白を境とし前后を見るにかの語が出で居る場合は前の方には甚だ少く、後の方には甚だ多い。處で前の方に出た少數の「人の子」(馬加二〇・二八)は單に人間の意に解せられぬでもないが、後の方に出た多數のものはしか解し得られず、之に反して特別の資格或は位置を言顯した語と解せば意が徹底するのである。「人の子」或は「人間」は其自身には一般の意味をのみ有する語であるが、特別の場合又は人格に適用せられた成語となつた以上は特別の意味をもち得る。然るに其語はかのダニエルの豫言(七の一三)に神の國の象徵として用ゐられて以來猶太人の宗敎的希望と親密なる關係

イエスは如何にしてメシヤの子の人を以て自任するに至りしか

を結び、後にはメシヤの別名とせらるゝに至つた。福音書に見ゆる「人の子」もかの天の雲にのりて現はるゝ超自然的メシヤを意味するのである。イエスははたしてかゝるメシヤを以て自ら任じたであらうか。これ問題である。而して吾人は彼の天職の自覺より考へて否定的の答を與へねばならぬ理由を發見しないのである。

イエスは、既にいうた如く、ダビデの後裔たる政治的のメシヤを斥けた。それと同時に彼はメシヤたる自信を終りまで保存した。さて當時の猶太人の終末觀によれば政治的のメシヤたらずしてしかもメシヤたらむにはアポカリプシスの天の雲に現はれ來る天上のメシヤたるほかはなかつた。イエスの獨得のメシヤの自覺のうちには既に「人の子」を以て自任するに至るべき道は開かれて居たのである。然し吾人は彼が「われはダビデの子に非ず故に人の子なり」と論理學の不容間位律によつて推論したと考へてはならぬ。彼は書齋にてメシヤの觀念を解剖分析する學究先生ではなかつた。故に彼がはじめから「人の子」のメシヤを以て自任

した、とは甚だ實らしくない。彼の類まれなる謙遜と無邪氣なる敬虔とはさる考をだに思浮ばしめなかつたであらう。神の國をもたらす爲めに特に送られたるを自覺し同時に其神の國は干戈や其他の世間的の方法を以て實現せらる可きにあらぬをはじめ(試惑の時)より意識して居たとて、彼が直ちに天の雲に乘り地に降り來る實在と自ら信じたとはいかにも實らしくない。彼が既に晴々裡に開かれたる道を進んでかゝる實在と己自身とを同一視するに至つたには何か深き原因がなければならぬ。處で最も信任するに足る馬加傳の記事によれば彼がはじめて明かにメシヤの意味にて人の子てふ語を用ゐたのはカイザレア・フイリピに於けるペテロの告白に次げる苦難及死の豫言に於てである。彼の運命は暗憺たらむとし成功の望はあだにならむとする時に「人の子」の語は最もしば〳〵彼の口より出た。吾人はこの點に問題解決の鍵を發見し得ると思ふ。苦難及死の近づけるを感じながら彼は己が受けた使命に疑を抱かなかつた。たとひいかなる辱めを受くともいかなる不運にあふ

とも、たとひ又人の手にかゝつて死すとも、己が使命は果されねばならぬ、神の國は必ずしかも己自身によりて實現せられねばならぬと彼は信じた。しかしいかにしてこの事は可能であるか。この問に對して彼に答を與へかれの自信を强め、暗憺たる將來に光明を認めしめ、彼を慰め勵ましたものは(メシヤの意に解せられた)かのダニエルの豫言(七の一三)であつた。彼は天の雲に現はる〻「人の子」の姿に己の運命の反映を見た。たとひわれ死すとも神は必ずわれを甦らしめ天の雲に乘せて地に降し、なし果てゞをはつた使命を完からしむるであらうと彼はひそかに信じた。彼の謙遜の念深き己自身の光榮よりは神意の貫徹を重じた故に彼はわれこそかの人の子のメシヤとは名のらなかつた。彼はたゞあたかも他の人のことでも語れるかの如く「人の子」は死なねばならぬであらう然し再び來つて神の國を實現するであらうといつて、弟子等に己が運命はいかゞあらうとダニエルによつて示された神の意志は必ず貫徹されるであらうとの意を洩した。其のみならず、いかにして己れが天の雲に乘つ

て來るやうな光榮ある身となり得るかを知るに由なく凡て父の御心に委ねたる彼はあらはにわれこそとはいひ得なかつたのである。彼の心の秘密は人の前にさらけ出すにはあまりに微妙であつた。まして政治的世間的の觀念の繫縛を脫し得なかつた弟子等には彼は遠廻しに訓へ諭す外に方法を知らなかつたのである。福音書によればイエスが「われ」といふべかりし處をいかにもよそ〳〵しく人の子といつて居る奇異なる現象も是等の諸點よりして說明すべきである。しかし福音書にある如く弟子等がつひに彼を解し得なかつたは甚だ尤といはねばならぬ。いかなる意味に於ても猶太人にとつてはメシヤは本來苦難及死と全く矛盾する觀念であつた。

尤も福音書(殊に馬太傳)に於てはイエスが單に「われ」といひたるを後の傳說が「人の子」を代りに置いた處もある」に相違ない。最も著しき例は馬太傳のカイザレア・フイリピに於けるイエスの問の言葉である(馬太一六の一三、參看馬加八の二七)。然し吾人はこの語をイエスの口より全く除き去らむとする一部の學者には贊成出來ぬ。福音書の地の文には無くたゞイエスの言葉にのみ現はれ居るによつても實際彼の口より出た事は疑ふべくもない。

今まで述べ來つた事によつてイエスがメシヤと自信し外觀の矛盾にも拘らずこの自信を棄てなかつたは明となつた。かの神の國の說敎に見ゆる自家撞着もこの自信、この自覺より說明し得るのである。メシヤの職分は未だ完くなし果されぬ、否後に至つてはメシヤは捕へられ殺されねばならぬに至つた。故にイエスは到底生前メシヤたる實を擧げ得ぬのである。これと同樣にメシヤのもたらすべき神の國も未だ實現されて居ない。惱や罪や凡て神の敵は未だ全くは滅びぬ。故に神の國はなほ將來に屬する、近づいては居るが未だ來つて居ない、即ちなほ超越的である。然しながらイエスは自らメシヤたる確信を棄てなかつた。彼はこの天職の自覺より活動した。未だ神の國を實現し得ざる彼はしかも實現者たる自信をあらゆる外觀の反證にも拘らず、飽くまでも保存し

イエス自身が神の國

た。何故であらうか。彼は己が心深く新しき世を實現すべき神の力を經驗した。惱みにも罪にも惡魔にも死にも打勝ち得べき新しき生命が己に現はれたを彼は知つた。其力其生命は未だ廣く行渡らぬしかも既に現在して居る。播かれた芥子種、粉に交へられたぱんだねにも譬ふべきである。始めはいかに見すぼらしいとも忽ちにして凡てを支配するに至るであらう。己自身に於て將來のものは現在に、超越的のものは內在的になつたのである。されば神の國はこゝに視よかしこに視よと外面の徵などによつて徒らに待つて居るべきものでない。見よ、神の國は汝等の眞中に現はれて居るではないか。われこそ神の國である。かくイエスは己自身に神の支配(國)、新しき世を起すべき神の力及生命を經驗し、そを實現し啓示すべき使命を感じメシヤたる自覺を得たのである。

イエスの福音に於て新しきは彼の人格

この經驗こそ彼の活動の原動力であつた。

是の如くイエスは猶太人の宗教的希望の實現者を以て自ら任じた。しかもメシヤの觀念といひ神の國の觀念といひ全く新なる趣を得た。神の國は世間的のものでなくなり、メシヤは神の國の實現者といふ以外には却て猶太人の觀念と矛盾するものとなつた。然しながら吾人は彼が猶太人一般の觀念にこいかしこに修正を加へたものとのみ考へてはならぬ。彼に於て新しきはさる修正ではなく、彼自身の人格であつた。この人格によつて新しき酒が古き瓶に盛られ、死したる觀念が新しき生命を得來つたのである。猶太人にはつひにメシヤは現はれなかつた、神の國は來らなかつた。しかるにイエスに從うた者どもの口よりは「クリスト(メシヤ)はわが生命なり」(パウロ)、「神の國いかでわれらを去らむ」(ルーテル)との凱歌が鳴渡いた。觀念や思想の修正がこの差別を來したか。否、イエスの人格であつた。彼は己れに從ふ者に己自身に現はれた神的生命を分ち與へたのである。かくしてイスラエルの忠實の子として古き神を顯はし古き希望を實現せむとした彼は、不知不識の間に新しき神を顯はし新しき世を開き新しき希望を與へた。

イエスの神の觀念

歴史に於ける人格の力

吾人は進んでイエスが示し顯はした神を考察しやう。吾人は先づ豫め人の陷りやすき誤解に備へねばならぬ。イエスの神の觀念は其の要素に分析する時は一も嶄新なるものが見當らぬ。そこよりして彼の福音には何等新しき點なく、そは單に既に猶太教に存せる思想を取捨綜合したものに過ぎぬなどの議論も起り易い。然しこはいみじき誤解である。人類の精神的歴史は決して思想や觀念の機械的の集散離合のみより生ずるものでない。其の一大原動力は人格の創造的の力である。既に存した要素も活きたる人格によつて結合せられて、新しき全體となりおのづから中心と周圍、根本と枝葉との別を得來り支離滅裂とならず一定の根本義一定の生命によつて統一せられる。かくて同じ思想の要素も人格の力によつて全く異つた新な意義を得るのである。廣く思想の歴史に就いて見るに新しき時代を開き萬代に人類の光明と仰がるゝ大思想家の思想も冷刻なる解剖の刀を加ふれば悉く陳腐となる。誰かプラトンやカントの哲學を全く新しき要素より成ると斷言し得やう。し

かも其等の古き要素は彼等に於て新しき生命を得新しき旨趣を發揮した。ましてや人格の底の底までも動かす宗教に於ては人格の創造力は特に重視せねばならぬ。尤も其人格をこゝに呼出すは全く不可能である。直ちにそれに接せむとならば吾人は福音書自身に向ふ外はない。吾人の考察は勢ひ分析的となり、從てイエスの福音の生命たるかれの人格をさながらに現はすことは出來なくなる。こは學術的論述の避く可らざる缺點である。されば敢て學術を標榜して自然科學的概念を直ちに歴史に適用し、人格の創造力を無視する論者には吾人は反對せねばならぬ。彼等の議論は、哲學者アルベルト・ランゲの語を借れば、コエールンの大伽藍を石塊の堆積に過ぎぬとなすと何の撰ぶ所もない。

イエスの神は活きたる神、歴史及個人の運命を自由に支配する人格的の神であつた。是點に於て彼はイスラエルの宗教の眞髓をとらへたのである。然し猶太教に於ては活きたる神は理論に止り、實際ではなかつた。猶太人にとつては神の支配は即ちイスラエルの支配であつた。然

るに民運は日々に非となつた。神は働きをやめ姿をかくした。是に於てか彼等はひたすら思ひを將來にはせて神の國の來らむ時をのみ待望んだ。其希望ははたして實現せらるゝであらうか。自稱メシヤは時々躍り出で干戈に訴へて神の御代を來らしめむとし、アポカリプシスの著者は神の來らむ日を徴により數により打算せむとした。然れども是の如き半ば狂氣じみた熱病の發作にも類した擧動は却て人心が希望と失望との間を動搖して眞の平和を得なかつた證據である。處で學者やパリサイ人等には神は煩瑣なる律法の死んだ文字に化石して仕舞つた。活きたる神はいづこにも眞に經驗せられなかつた。そを經驗したのはイエスである。彼に於ては神はもはや將來のもの超越的のものではなくなり活きた現實となつた。從つて宗教的希望は實現の保證を既に有するよろこばしき希望となつた。猶太人は活きたる神を現在に有せず從て彼等の希望は空望に過ぎなかつた。彼等には神の國はつひに來らなかつた。

次にイエスの神は精神的の實在であつた。「神は靈なり、彼を拜するものは靈と眞とに於て拜すべきなり」てふ第四福音書の語(四の二四)はイエス自身より出でたかは別問題として、彼の精神を適切に言顯はしたものである。彼は凡て外形的儀式的のものに重きを措かなかつた。從てかのイエルサレムの神殿の祭事を中心とした宗教は彼の深き敬虔と一致し得なかつた。「われあはれみを欲す、贄を欲せず」てふホゼアの語を引いて彼は己が精神を言顯はした(馬太九の一三)。祭壇の供物を等閑にしても同胞と和らげと彼は弟子等にをしへた(馬太五の二三・四)。神殿の壯大なるに見とれた弟子等に彼は其の土崩瓦解を豫言した(馬加一三の一・二)。尤もこの精神的傾向は全く新しいのでない。先づ古の豫言者に現はれ后にはパリサイの徒の宗教にも現はれた。是點に於てイエスは當時の猶太教に存した傾向に從つたのである。しかも當時の模範的宗教家と彼との精神的逕庭を誰か否定し得やう。彼等は祭事に代ふるに律法を以てした。精神的なる神の意志は煩瑣なる風俗習慣のうちに窒息した。

敬虔は外面的行爲となり、數もて計算し得るものとなつた。イエスとても律法を神意として尊重した。しかも彼に於いて動いた新生命は決して舊套に滿足し得なかつた。新しき酒は古き瓶を破つて迸り出た。彼とパリサイの徒との爭鬪はこゝより來つた。彼は古の豫言者の自由なる精神を以て彼等の墮落せる後繼者にあたつたのである。彼は安息日の規定を破つても惱める者を助けた。彼は心に喜びあるにかなしき顏する要なしとて斷食を奬勵せず爲めに人の非難を受けた(馬加二の一八以下)。彼の弟子等が律法に背いて食前に手を洗はぬを人の詰つた時、彼は外より入るものは人を汚さず內より出るもの却て人を汚すと答へた(馬加七の一以下)。彼は學者やパリサイの徒が十分の一の納稅の規定は嚴守しながら義と仁と信とを顧みざるを責めて、僞善者と呼んだ(馬太二三の二三)。かくの如くして彼は弟子等をして律法の死んだ偶像をすて、外面的機械的の行爲を去つて活きた精神的の神の精神的の奉仕に向はしめ、神に仕ふるは煩瑣なる規定の一字一句に拘泥するの謂にあらず、天の父の如く完全なる人格を養ふの謂(馬太五の四八)なるを、をしへた。

萬能の神

この活きたる精神的なる神が天地の造主、萬能の神であつたことは詩篇や豫言者の敬虔のうちに呼吸したイエスにとつては特に言ふを俟たなかつた。彼が特に神の尊嚴をたゝへ其の前には人間が塵芥にも等しきを說かなかつたは猶太人にとつてはそは自明の眞理であつたからである。吾人は彼の福音彼の敬虔を考察する時に其の土臺其の背景をなせる萬能の神を畏れかしむさいふ態度を忘れてはならぬ。彼の天職の自覺はこの態度をはなれては解し得べきでない。凡ての人間に對しては自らを神の側に置いて特別の權威を主張した彼は並びなき謙遜を以て神の前にひれふした。彼は神の使命を畏れかしこみ其の成就をわが天職となしいかなる不運逆境をも厭はず、死に至るまで忠實に神命に服從した。

義の神

この萬能の神は同時に罪惡とは全く相容れざる本質を有し、己が善なる完全なる意志を飽くまでも貫徹する神、聖なる義の神であつた。イエ

スは神の國の近づいた福音を傳へたと同時に「悔改めよ」と呼んで人々の覺醒を促した。最后の審判は彼の說敎の離す可らざる要素であつた。是點に於て彼はバプテスマのヨハネの事業を繼續したのである。

神の審判

神の審判てふ考は猶太人の間に普通のものであつた。彼等は神が己等を虐ぐる異邦人を滅ぼしイスラエルを昔の榮えにかへさむ日を切に待望んだ。アポカリプシスの著者に至つては、更らに審判を此世を支配する惡魔及惡鬼にまで及ぼし、此世が滅びて天にそなはれる新しき世のあらはれむを信じた。審判を受くるものは國民に非して個人であるといふ考も著しくあらはれむとした。イエスはこの傾向に從つたのである。彼はサタンの國が滅び死人は復活し凡ての人間の運命が神の國と地獄とに分かるべきを信じた。

個人の永遠の責任

然しながら彼の說敎は地獄を遁れむ爲めの手段をしへたものでない。彼が弟子等に與へた敎訓は方便的の性質を全く脫した。彼は單に彼等を活きたる罪惡と相容れざる永遠の實在の面前に導き谷人をして己が永遠の責任を明かに自覺せしめむとしたのである。さてかゝる自覺に達したる者には世の終りがいつかにして來るかは價値なき問題である。其故彼は此世の終りの成行や來らむ世の有樣については詳說しなかつた。此點に於て彼とアポカリプシスの著者等とが精神的にいかに相隔れるかは明かである。彼の審判の思想は猶太人の終末觀に據つたものであるが彼は其うち最も肝要の點のみを捕へた。(かの馬加傳第十三章の有名な豫言は反證と見るべきやうであるがそはイエス自身より出たものでなく大部分は猶太人の間に流布した一アポカリプシスがさながら採用せられたもので后の社會の產物に過ぎぬ)。彼は世界の終末の徵候などに留意しなかつた。いづれの日いづれの時と知るはたゞわが父のみと彼はいうた(馬加一三の三二)。いついかにしてとあせりもがくは眞に永遠の責任を自覺したものゝ態度でないを彼は信じたのである。たゞ彼は世の終りの近づけるを說いて一層責任の念を強め又突如として來るべきを說いていつ來つても差支なき覺悟を促した。其

の來るはぬすびとの如く(馬太二四の四三)いなづまの如く(路加一七の二四)家をおし流す洪水又はノアの遁れた洪水の如く(馬太八の二五、路加一七の二四)ロートの時ソドムを燒滅ぼした火と硫黄との如く(路加一七の二八)突然である。故に人々はいつ歸り來るかも知れぬ主人を腰に帶し燈火をともして待つ家僕の如く(路加一二の三五)つねにめさめて用意怠りなく居ねばならぬ(路加一二の四〇)。かくイエスは或は直接に或は譬喩によつて吾人の永遠の運命のかゝる所を明にした。

其故に彼の教訓は方便的の性質を脫せる如く、一時的の性質をも全く脫しか。世の終りが今日來らうが數千年の后に來らうが各人の永遠の責任には少しのかはりもない。尤も世の終が目の前に迫つたといふ考は勢ひ要求を極度に高め、時としては社會の具體的關係を顧みる遑なからしめた。しかもそは各人の永遠の實在に對する關係を一層露骨にあらはさしめ畢竟イエスの教訓の價値に關しては損害とならなかつた。

かくの如く全力を個人の永遠の責任に集注したイエスは、其の必然の

歸結として審判の觀念より全く國民の政治的希望を遠ざけた。アポカリプシスに於ても既にこの傾向は存したしかし猶太人の偏狹なる精神を全く脫し得ず、從つて全體は相背反する思想の奇異なる混合を示した。イエスに於てそは純粹に現はれたのである。彼とても猶太人以外には說教しなかつた。しかも彼は猶太人に於て人間個人を見た。猶太人であるなしは人間の永遠の責任及運命と何等の關係もない、神の前には連帶責任連帶賞罰は存せぬ、個人は各凡ての責任をおのが肩に擔はねばならぬ。其故イエスは猶太人の固有なる黨派根性を全然排斥した。神の國に入らむ爲めには、主よ主よと追從したとて何のかひもない、天に在る父の御意を行はねばならぬ(馬太七の二一)。同じ床にねた二人のうち一人は取られ一人は遺こされ、其に臼ひき居るものゝうち一人は取られ一人は遺される(路加一七の三四・五)。個人の運命は他に代り得べきものがない。人たとひ全世界を得とも生命を失はゞ何のかひがあらう(馬加八の三六)。其故に何人も己が責任を自覺して悔改めて神にかへらねばな

個人の價値

らぬ。悔改めた一人の罪人を神は九十九人の義人にもまして喜ぶのである(路加一五の七)。かくばかり個人の責任、從て價値の重せられたためしは他にない。是の如くイエスは猶太人の終末觀に從ひつゝしかも其を簡單にし本末の區別を明にし、既に存した觀念に全く異なつた意義、全く新な力と生命とを與へた。

宗教と道德との親密なる關係

さて神の前に於て眞に價値を有するは神の意を行ふこと、神の完全なるが如く完全なることである。從てイエスにとつては道德をはなれて宗教はなく又宗教をはなれて道德はなかつた。神の審判の思想と道德の教訓とは彼に於ては全く離す可らざるものであつた。いかにせば神の國に入り得べきかとは單に宗教上のみならず倫理上の問題であつた。其故賞罰の觀念をイエスの倫理說より除去らむは全く不可能である。彼はカントの所謂自律的道德は唱道しなかつた。本來倫理學者でも哲學者でもなくたゞ敬虔の念深き田舍者に過ぎなかつた彼には所謂無宗教的道德の可能不可能は問題をなさなかつた。宗教は彼にとつては凡

てゞあつた。

然しながら彼の賞罰の觀念は決して淺薄なる功利說ではなかつた。彼はマホメットの如く利己心を天國に於て一層完全に充さん爲めこの世に於てはそを棄てよとはをしへなかつた。苦難及死も彼にとつては神の罰ではなかつた。彼の賞罰は全く感官以上のもの、純精神的のものであつた。彼の說いた賞は神と親しむこと神の子と認められゝこと、彼の說いた罰は之に反して神より遠ざかる事に過ぎなかつた。汝等は天父の如く完全に天父の意をわが意とせよ換言すれば眞に神の子たるを力めよ然らば汝等は神の子と認められいつまでも天父のもとにあらむとはイエスの福音であつた。其故彼が說いた賞は外的機械的の報酬でない。神をわが父として愛し敬しよろこんで子たる實を擧げむとするものは根底に於ては既に眞の神の子である。賞はかくの如く既に根底に於てそなはれるもの、完成に外ならぬ。賞罰の觀念を用ゐたもの、イエスの道德觀は實は全くそを超越した。即ちそれに附隨する利己的

臭味は彼に於ては全く除かれたのである。主人より依托された金錢を拋擲した僕は主家より追はれ忠實に保管し有益に使用した者は更らに多くを依托され「汝僅のものに忠實なりき、われ汝に多くのものを司らせむ、汝主の喜びに入れ」との讃辭を受けた(馬太二五の一四以下)。神の國に於ける賞も亦かくの如きものに外ならぬ。是點に於て吾人はイエスとパリサイの徒との相異を甚だ明かに見るのである。彼等にとつては律法即神意の實行は神より報酬を要求する權利ある勞役、宗教は一種の商賣であつた。イエスはかゝる主義に全く反對した。神意を行うたとて本分を盡したまでのことである。凡て命ぜられた事をなした僕も主人より禮を要求する權利はない、われらは無益の僕、なすべきことをなしたるのみ」といふべきである(路加一七の一〇)。其故に若し主人が忠實なる僕をわが傍に招いて喜びの宴に列らしめたならばそは受くる權利のなきめぐみである。

かくの如くイエスの教訓は單に善の爲めに善をなせと冷かに命令するものでもなく徒らに重き勞役を課して報酬を約束するものでもない。人間の本分の何かををしへ同時に其の完成の希望を與ふるものである。其本分は神の如く完全なる人格となること、神意をわが意としてよろこんで行ふこと、神の子たることである。其の完成は神の國である。しかもこの神の國は全く新なるものとして來るのでも又たゞ報酬として機械的に附加へらるゝのでもない、神的生命の動ける處には既に存するのである。イエスはこの生命を分ち與へ神の國を實現するをわが天職と信じた。彼の教訓の目的は人間を改造して彼の如く父の意をわが意とする神の子たらしめむとするにあつた。彼はたゞ道德律や義務を敎へたのでない、たゞしかせよしかすべからずと命じたのでない。彼は神に遠ざかれる人を神に導き近寄せ神に於て其の人格を完成し本分を成就し、從て終極の滿足と完全の幸福とを得しめむとしたのである。換言すれば彼は敎師よりはむしろ救主たらむとしたのである。メシヤの自覺は此點に於て其の眞の意義を發揮したのである。

イエスの教訓の内容

吾人は進んでイエスの倫理的教訓の内容を考察しやう。其内容は一言を以てすれば神の意を行ふに存した。この點に於ては彼とパリサイの徒との間に少しの相異もない。

律法に對する彼の態度

猶太人は一般に神意はモーゼの律法に於て與へられ居ると考へた。是點に於てもイエスは忠實なるイスラエルの子であつた。神の國に入る道を尋ねた學者に彼は「律法にしるされたるは何ぞ」と問ひかへした(路加一〇の二五・六)。彼は天地の廢たるは律法の一點一畫の廢るよりも易しといひ又己が使命を律法と豫言者との廢棄にあらずむしろ成就にありとなした(馬太五の一七・八、路加一六の一七)。彼は律法に於て神意なる神意を見たのである。彼は學者やパリサイの徒を攻擊する際にも彼等が律法の眞意を誤りて種々の不必要なる新規定を附加へたを以てした。

然れども彼のうちには律法の舊套には滿足し得ざる新しき生命が動いた。律法其者の本質に屬する、幾多のたゞ神によつて與へられたが故にのみ貴き箇條に神意を分裂し機械的にそを實行するといふ傾向には彼は全く反對した。律法を尊重した彼は實は其の精神を超越したのである。其故時としては彼は律法の根本的規定にまで批評を敢てした。「目にて目齒にて齒を報いよ」といふ舊約書の訓に反對して彼は凡ての復讐を排斥した(馬太五の三八以下)。彼はまた離婚をも排斥し、モーゼの權威に代ふるに神の權威を以てした(馬加一〇の二以下)。彼が安息日は人間の爲めに存すといつてそを守らなかつたが如き、又は外より入來るものは人を汚さずといつて「きよめ」の規定を無視したが如き、共に風俗習慣を直ちに神意となす律法の精神を根本より否定したのである。

優れる義

其故イエスは當時の專門的模範的宗教家の律法の一字一句に拘泥する「義」を排して一層優つた義を主張した。

愛

其優つた義は愛であつた。「人になされむと欲する事は凡て汝等も人になせ」とイエスはをしへた(馬大七の一二)。彼は全き心をさゝげて神を愛し己自身の如く隣人を愛するを神の誡の眞髓とした(馬加一二の二八以下)。さて隣人とは誰れぞ。かの美しきサマリヤ人の譬(路加一〇の二

五以下)のをしふる如く、凡ての人間である。汝等の敵を愛せ(馬太五の四四)とは有名なる彼の教訓であつた。かくの如く彼は愛を以て神意の根本とし其他を凡て枝葉としたのである。さてかゝる思想其ものは決して全く新しくはなかつた。かのヒルレルに於て明なる如く既に猶太教にも存したのである。彼に於て新しきは其同じ傾向が彼によつて得たる新なる力新なる生命である。猶太教に於てはこの思想はつひに思想に止つて凡て他を支配する活きたる勢力とはならなかつた。ヒルレルをはじめ模範的宗教家はつひにこの愛以外無數の煩瑣なる條項を一樣に神意と重ずる精神を脱し得なかつた。彼等は玉石混淆、本末轉倒の弊に陷つて得意であつた。イエスはかゝる義を排斥して全力を中心點なる愛に集注した。此愛の精神は彼をして身方と敵との區別を超越して凡ての人間に於て神の前には等しく價値ある個人を認めしめた。律法の精神を脱した彼は同時に其に附隨する猶太教に固有なる黨派的根性を全く脱した。

かく本を取つて末を捨てたイエスは勢ひ外面の一々の行爲よりも心根如何を重じた。パリサイの徒にとつては敬虔は神より寵遇を買ふ爲めの貨幣の如きものであつた。宗教を打算的に考へた彼等が數量によつて高下し得る外面的行爲を重じ計算の全くかなはぬ內側の心根の如き不便のものを比較的無視したは自然である。故に彼等の立場よりは神とマンモン(利己心)との二君に仕ふるは不可能ではなかつた。イエスはかゝるなまぬるき上すべりの僞善的宗教に全然反對した。施しも祈りも斷食も衷心の至情より出ねば何の價値もない(馬太六の一以下)。殺人や姦通の行爲のみが惡るいのでない、復讐の意、姦淫の念其ものが既に罪惡である(馬太五の二一以下二七以下)。樹を善くせずして善き果を得むとするは全く徒勞である(馬太一二の三三)。人を汚すは外より入來るものでなく心のうちより出る惡念である(馬加七の一四以下)。

かく衷心の至情を重じたイエスは勢ひパリサイの徒が代表せる猶太教の法律的消極的精神を斥けた。彼は「しかするな、しかせば……」と立止

りあたり見まはして思案し、律法の煩瑣なる條項に抵觸せらざらむことにのみ小心翼々たる彼等の態度を學び得なかつた。彼にはあまりにのびゝと活々した精神が動いて居たのである。彼は憂ひず顧慮せず思案せず、衷心の熱誠よりをいしくまつしぐらに善に向つて進む無邪氣な態度を重じた。其故彼は全く無條件にしかなせとをしへた。彼の教訓は時としてあまりに峻嚴に、極端に走る傾があつた。彼は明日の事を思ひ勞らふなとをしへた(馬太六の三四)。彼は蓄財を斥け富める者の神の國に入るは駱駝が針のめどを通るより困難と斷言した(馬加一〇の二五、馬太六の一九以下)。「惡に敵するなかれ、人己の右の頰を打たばほかの頰をも向けよ、下衣を取らむとする者には上衣をも與へよ」といつて彼は人より受けた不正に對し抵抗するを嚴禁した(馬太五の三八以下)。

かゝる教訓が現實の社會に文字通りに實行の出來ぬはいふまでもなく、實行が若し出來たとしたなら文明の廢棄を意味するも明かである。さればとてそれらを何等の價値もなき空想の譫語となすはあまりに淺薄といはねばならぬ。其日暮らしは文明の敵であることも蓄財を全く斥けては今日の社會に於て或場合には人格の獨立すら保ち難きことも誰か否定しやう。しかもたゞくよ〳〵と明日の事を思ひ勞ふ者ははたして文明の恩人であらうか富がはたして眞の文明であらうか。利己心の滿足が眞の精神的生活であらうか。無抵抗主義が社會の破滅を意味するを誰か否定しやう。しかも惡事に對して備へねばならぬ社會ははたして完全のものであらうか。人より受けた不正に報いざるを以て人格の尊嚴を損ふものと考ふる人の人格の觀念はいかにも立派といふことが出來やうか。イエスは勿論一定の關係一定の位置に於ける人間の一々の義務を教へなかつた。彼は倫理學者ではなかつた。彼はたゞ神と個人とのみを眼中に置いて其他を顧みなかつた。彼の教は極端であらう、さながら現社會に實行の出來ぬものであらう。しかも社會や文明に眞の生命を與ふる人間の永遠の理想は却て爲めに明にされたのではなからうか。社會倫理學のといへる體系を缺いた故を以て彼を責む

イエスの教訓の眞意は利己心に打勝つにあり

るは彼が電信電話を發明しなかつたを咎むると何の撰ぶ所があらう。尤もかくの如く彼をして峻嚴に極端にならしめたには彼の生存した社會の狀態や彼の抱いた確信、即ち社會的個人的の原因が與つて力あつたはいふまでもない。古代人として彼は富を高尚なる目的の手段と考ふるに至らなかつた。パレスチナの風土はまた人をして多く思を勞せずして生活を得しめた。世の終りを目の前に見た彼は社會の具體的關係を顧みるに遑なかつた。しかも彼の教訓の眞髓なる、利己心を全く斥け小事にくよ〳〵と思ひ勞はずたゞ善と理想とを眼中に置いてまつしぐらにをゝしく進む精神の價値は其の爲めに少しも左右されないのである。

イエスはかく極度まで利己心を斥けたものゝ決して遁世主義又は禁欲主義に陷らなかつた。彼は世の無邪氣なる喜びを輕蔑しなかつた。彼は禁欲主義の人に比しては時人の眼に「食を貪り酒を嗜む人」と映じた(馬太一一、一九)。彼は招かるれば喜んで人の食卓に列した。高價なるあぶらを彼の頭にそゝがむとした婦人を彼は斥けず喜んで其の好意を受けた(馬加一四の三以下)。彼は殆んど希臘人と思はるゝばかり快活なる眼をもて自然を見た。彼がいかに自然と親んだかは詩的趣味に富んだ彼の美しき譬喩が證明する。沈鬱なる厭世的情調は彼の說教のいづこにも見るを得ぬ。彼の嚴格は無邪氣や快活と矛盾しなかつた。彼は自ら「頭を置く處なき」までに世の安樂を擲ち又弟子等にも人により場合により凡てを擲てと命じたるも、世を棄つるを以て宗教上のおきて又は特別の功績とは考へなかつた。職業を棄てゝ彼に從つたのは傳道の補助者のみであつた。彼の死後彼の名のもとに集つたのは世棄人の團隊ではなく神の爲め救主の爲めには生命をも擲て顧みぬをゝしき信者であつた。彼等はいかなる犧牲をもいとはなかつた、しかし妻を去り世を遁れはせなかつた。パウロの言によれば(コリント前書九の五)ペテロをはじめ他の傳道者等は傳道の旅行にさへ妻を携へた。――イ・エスを遁世主義又は禁欲主義の唱道者とするは畢竟彼の言を其の連絡より離し、其

の精神を顧みず、文字通りに融通なく解するより起るのである。彼が全力をそいでいで弟子等にをしへたは利己心に打勝つことであつた。思勞らふなマンモンを棄てよ、人の惡に報ゆるな――是れ利己心を棄てよの謂である。手や目が汝を躓かさば切棄てよ(馬加九の四三・四七)とは(オリゲネスの實行したる如く)片輪になれと、いふのでない、神に對する己が本分を妨ぐるものに打勝てといふのである。「父母をも妻子をも兄弟をも憎まぬものはわが弟子となる能はず」(路加一四の二六)とは家族を棄つるをよき事と奬勵するのでない。こはイエスが敢て決戰せむ爲めイエルサレムに上つた門出の誡、禁欲主義に解するの愚なるは戰場に向ふ勇士を世棄人と解するの愚なると同じである。彼の要求した禁欲は天職の爲め神に對する責任を盡さむ爲めの禁欲で主義としての禁欲ではなかつた。彼自身も神の使命を完うせむ爲めには家族をも世の安樂をも生命をも擲つた。

最後にイエスの神は愛の神であつた。彼はいつも神を父と呼び弟子等にもしか呼ぶををしへた。父の慈愛はあまねく萬物に及ぶ。ましてや吾人には日々の糧や身を裝ふものをはじめとして高尚なる精神的の賜物に至るまで請ふがまゝに與へ給はぬことがあらう。否、父は吾人が求めぬさきに既に吾人の要する所を知り給ふのである(馬太六の八)。されば求めよ、必らず與へ給はむ、尋ねよ、必らずあひ給はむ、叩けよ、必ず開き給はむ(馬太七の七・八)。吾人何をくよ〳〵と日々の事を思ひ勞らはう。父の慈愛に凡てを委ね任せなば惡魔も世の惱みも恐るゝに足らないのである。

愛は神の幾多の性質のうちの一といふやうなものではなく、神其もの、の本質である。この事はイエスが神意從て己が倫理的敎訓の眞髓を愛となしたによつても明かである。しかし今一歩を進めて神が己れに背けるもの即ち己が敵に對する態度を見ばイエスの宗敎的意識に於て神の愛がいかに中心的位置を占めたかは一層明かとなる。

イエスの神は罪人即ち敵を愛する神であつた。若し罪惡と全く相容

れぬ己が本質を貫徹する義のみであつたならば神は己れに背けるものを悉く排斥し滅盡したであらう。然るに神は愛である。彼は吾人の罪を赦すのである。イエスの弟子等は師のをしへに從つて日々「父よ罪を赦し給へ」と祈つた(馬太六の一二)。其のみでない神はまよへる罪人を自ら尋ね求むるのである。イエスは己の敵なる罪人をも包含する無限なる神の愛を彼の最もうるはしき譬喩に言顯はした。父に背き父を見棄てゝ放蕩逸樂に耽つた息子が一度び悔改めて歸來るや父はあふるゝ喜びにわれを忘れて彼を迎へる(路加一五の一一以下)。一匹の迷へる羊を野ゆき山ゆき尋ね求むる牧羊者は其を得たるを他の九十九匹の迷はぬ羊にもまして喜ぶ(路加一五の四以下、馬太一八の一二・一三)。天なる父もかくの如く己に背けるものを愛ひいつくしむのである。

神は慈愛ふかき父といふ思想は決してイエスの專賣品ではなかつた。既に述べた如く猶太教には既に存したのである。ストアの哲學者も亦神の攝理を說いた。殊にセネカに至つては「不義なる者にも日は照り、海賊にも海は開き、風は善き者にのみ順なるに非ず、雨は惡しき者の田畠にも降る」とて殆んどイエスの語と見まがふばかりの言葉もて神の愛をたゝへた。イエスに於て新しきは思想其ものではなく、其の强さ深さ、力及生命である。猶太教に於ては神の愛はつひに理論に了つた。ストアに於てもそは全人格を根底より活かし動かす中心の生命とはならなかつた。罪人を自ら尋ね求むるといふ高調にはいづれも達し得なかつた。ストアの賢者は神の愛に於て慰籍を得たであらう、其愛に勵まされて人に對しても溫厚に親切であつたであらう。しかも自ら進んで人を求め自ら進んで人の爲めに己を献ぐる熱誠、此能動的なるをゝしき愛は彼等に於ても求め得べきでない。

イエスは神の愛を己が生命、そを顯はし示すを己が天職とした。自ら神の孝行息子を氣取つてしかも神意を誤れる專門的宗教家等には彼は猛烈なる攻擊を加へて彼等の覺醒を促し、彼等には棄てられ神の繼子視せられて迷へる民衆や、半異邦人として禽獸視せられた稅吏や、賣春婦や

姦通罪を犯したる婦人や其他凡て迷へる者失はれたる者どもは彼殊更に自ら進んで尋ね求め、彼等を慰め勵ました。而して彼はつひにわが天職にたふれた。

是點に於てイエスのメシヤの自覺は其の最も深き意義を發揮したのである。愛の生命を分ち與へ愛の支配を世に實現する、是れメシヤたる彼の天職であつた。彼が自らもたらさむとした神の國はこの新しき世界であつた。人間を愛の神の如く完全なる神の子と改造し其愛の神に於て彼等の人格を完成せしむる、是イエスの活動の目的であつた。彼の峻嚴なる教訓も畢竟この愛の精神より發したのである。人につかへられむ爲めに非ず人につかへ多くの者の爲めに生命を献ぐるを彼はメシヤの天職と信じた(馬加一〇の四五)。愛に於て彼の暗憺たる運命も其の眞の意義從て眞の光榮を發揮したのである。メシヤの觀念はかくして全く猶太人的特質を失ひ新なる意義と生命とを得た。イエスの天職は愛の福音を傳へて人を救ふにあつた。彼自身は此意味に於て救主であつた。

第三章　イエルサレムの原始教會　ペテロ

師を失つた弟子等は彼等が滿腔の希望を囑したメシヤが全く失敗に了つたを知つた。イエスの捕縛、處刑は彼等には不意打であつた。彼等は爲めに散り〳〵となり、最も優れた弟子のペテロさへ師を否んだ。十字架の傍にはたゞ二三の忠實なる婦人が立つてイエスの最后を見屆けたのみであつた。しかるにやゝしばらくの后にはこれらの弟子は再びイエルサレムに集り熱心なる勇敢なる傳道者となつた。かゝる激變を來したのは何であるか。彼等のうなだれた首をもたげ、彼等の失望落膽を何物をも恐れず凡てを献ぐるよろこばしき確信と双少き勇氣とに變じたものは何であるか、――イエスの復活の信仰である。人に殺されたイエスは死に打勝ち甦つて一層高き生活に入り今もなほ生きて居るといふ確信である。イエルサレムの有司の目算は全くはづれた。彼等の勝利は最も拙なる最も愚なる失敗と化した。死せるイエスは生ける

イエスよりも一層有力であつた。十字架にかけられ死して甦つた彼に對する信仰はつひに猶太教とは全く分離した新宗教を生じ其の世界的の傳播と勝利とをうながした。

以上は歴史上動かす可らざる事實であるが、さて其信仰發生の場處、成行、原因等の問題に關しては吾人は甚しき困難に陷るのである。この問題解決の材料と見る可き記錄は福音書とパウロの書翰とであるが、兩者の間のみならず福音書相互の間にも除き去り難き矛盾が存する。先づ福音書に就いて見るに、復活せるイエスが弟子等に現はれた場處は馬加傳（一六の九以下は後人の書加へたるもの故論に入らず）及馬太傳によればガリラヤである。然るにルカによれば正反對に、そはイエルサレム及その附近であるのみか、甦つたイエスは弟子等にイエルサレムを去るなと命じた。第四福音書（ヨハネ傳）の記事は最も複雜である。それによれば、弟子等は路加に於けるが如くイエルサレムに留つて師の出現を經驗するかと思へば后には馬太に於ける如くガリラヤにて甦つた師を見た。

しかるにパウロ（コリント前書一五の三以下）の記事は福音書のとは甚だ趣を異にする。彼が明細に列擧したイエスの出現の場合は一も福音書にあるものと一致し得べきでない。しかし最も重要なる相異は次の二點に存するのである。第一凡ての福音書によればイエスの死後二日即ち日曜の日に二三の婦人が墓處に行つたのにそは全く空虛であつた。パウロはこのことについて一言も語らぬ。第二、路加及ヨハネによれば甦つたイエスは忽ちに消え失せ又は戸の閉ぢた室に入り得るに拘らず、弟子等に己が手足を觸れしめ又常人と同じく食物を取る肉體的の姿に現はれた。後に述ぶる如くパウロの信仰はかくの如き肉體的復活とは全く相容れぬ。

かく問題の困難を指摘した後吾人は簡單に其の解決を試みやう。

第一、イエスの出現の場處については前に述べた通り福音書のうちに二樣の說がある。一はガリラヤといひ他はイエルサレムといふ。いづれが正しいか。吾人は馬加及馬太に從つてガリラヤ說を採るのである。

――馬加一四の二七・八(馬太二六の三一・二)によればイエスは捕はれる前橄欖山へ向ふ途上弟子等にかくいうた。「今夜汝等皆我に躓くべし。それは既に錄されたればなり(ザカリヤ一三の七)我牧者を打たむ、群の羊は必ず散らされむと。されど我甦りて後、汝等に先立ちてガリラヤに行くべし」と。空となつた墓の傍に立てる天使が婦人等に與へた使命「行きて弟子等とペテロとに告げよ、彼(イエス)汝等に先ちて既にガリラヤに行けり、汝等かしこにて彼を見む、彼汝等にいひし如くにと」(馬加一六の七、馬太二八の七)は明にかのイエスの豫言を暗示して居る。さて墓が空虛になつたとは後の宗教的想像の產物故其墓のほとりの天使の使命も亦然あるは明かであるが兩福音書の著者がそを事實と信じて語つて居るによつてもかのイエスの豫言を少くも弟子等のガリラヤ行の部分丈は實現されたものとして擧げ居るは疑もない。馬加傳の結尾は不幸にして失はれたが(一六の九以下は後人の筆に成つたのである)馬太傳がガリラヤの山上に於けるイエスの出現を語れるを見ても、同樣の事柄を語つて居たのであるとは甚だ實らしく推測し得る。然しこゝに一の懸念が起る。今かのイエスの豫言を事實としたならば、弟子等のガリラヤ行は全く其豫言は實現せられた筈といふ宗教的想像の產物で事實ではなく、却て路加系統の傳說が正しいのかも知れぬ。しからば弟子等がイエルサレムに踏留つてそこでイエスの出現に接したことになる。果してそうであらうか。さてイエスの豫言は單にガリラヤ行を語るのみでなくガリラヤへ遁走を語るのである。弟子等のガリラヤ行が全く事實でないのに宗教的想像がこの豫言と一致せむ爲め不名譽なる遁走丈は省いてガリラヤ行を產出したとはあり得ない事ではないが實らしくない。想像はかくばかり緻密な念の入つた仕事をなすよりはむしろ其より先に弟子等が實際ガリラヤに行かなかつたといふ事實に基いてイエスの言葉を改造し或は除き去つたに相違ない。されば比較的最も古き傳說がガリラヤ行は否定せず墓のほとりの天使の言葉によつてそは遁走にあらず天使の指導によれるものと忌はしき不名譽の點丈を除かうとして居る

のは却てガリラヤ行のみならず遁走さへ事實であつたことを證明する。殊に遁走が事實であつたことは馬加一六の八に婦人等がかの使命を弟子等に傳へなかつたとあるによつても明かである。かくの如く最も古き從て最も幼稚なる宗教的想像の發展を示したに相違なき傳説に於てガリラヤ行が事實の根底を缺くといふは甚だ考へ難い事であるが、之に反して後の路加傳系統の傳説に於てイエス出現の舞臺がイエルサレムに移されたのは甚だ容易に理解が出來るのである。何故といふに、イエルサレムは後に弟子等の活動の中心となつた。イエスの死後弟子等がそこに踏留り活動の機會を待つたとはそれ自身に於ていかにも自然の事でまた、宗教的想像がこの自然と思はるゝ成行を事實と信じ忌はしき連想を禁じ得ざるガリラヤ行の事實を忘れて仕舞つたのもいかにも自然といはねばならぬ。ましてや實際の出來事より遠ざかれば遠かるほどたゞ僅かの間の事にすぎなかつたガリラヤ滯在は忘られ易いのである。最も古き傳説が最も自然なるべきイエルサレムに於けるイエス出現を語らず(馬太傳によつてもイエスは弟子等にはイエルサレムに於ては現はれなかつた)却て時と共に忘られ易きガリラヤ行を語つて居るは否定す可らざる事實があつたからである。

以上はイエスの豫言を事實として論を立てたのであるが、若それが後の教會の產物であつたらばどうであらうか。弟子等のガリラヤ遁走は一層確實となるのである。かの豫言は甚だ不名譽なる事實の豫言である。宗教的想像は何故かゝる豫言を產出したのであらうか。弟子等の遁走が事實でないとしたならばこは全く解すべからざる事になるのである。之に反してかの不名譽の事實が眞にあつたならかの豫言はそをイエスの既に豫知したところ殊に舊約書のザカリヤの卷に於て神が豫め定めた所として辯護せむとする動機より產れ出たものと解し得るのである。其故、イエスの豫言が事實であるなしに拘らず、其通りの出來事、即ち弟子等はイエスの捕へられた後失望落膽のあまり牧者を失うた羊の如く散亂しガリラヤに遁げ歸りそこにてイエス復活の信仰を得たこ

パウロは福音書よりは一層信ずべき史料なり

空虛なる墓

と、は、事、實、と、認、め、ね、ば、な、ら、ぬ。

吾人は進んで福音書とパウロとの矛盾を論じやう。根本問題は兩者が一致せざる場合にはいづれを取るべきかである。答は明白である。吾人はパウロを取つて福音書を捨てねばならぬ。パウロの第一コリント書は福音書の最も古きもの馬加傳よりすら十數年前に出たもの、年代の上より見て最も信ずべきものであるはいふまでもない。それにパウロが眞理を愛する人なるは彼の書翰の各頁の示すところ、そのパウロがイエルサレムの教會より傳へ承けたと斷言して居る以上は吾人は彼を信じ彼を標準として十數年乃至數十年后に出た福音書を批判して差支ないのである。吾人はこの原則によつて既に第二章に於て福音書にある空虛なる墓の記事が宗教的想像の產物であるを證明した。吾人は今たゞ二三言を附加へやう。墓の傍らに立つた天使の婦人等に與へた使命が、既に此章に述べた如く、弟子等の不名譽なる逃走を蔽はむ辯護的動機より出た事は明であるが宗教的想像が何故空虛なる墓に婦人のみを

肉體的の復活

假死說は非なり

配したかも甚だ容易に說明が出來る。この傳說の出た時の人々はなほ弟子等がイエルサレムに踏留らず直にガリラヤに赴いたといふ記憶を保存して居たからである。又馬加傳一六の八に婦人等が弟子等に天使よりの使命を傳へなかつたとあるは明に著者が墓のほとりの出來事をペテロの口よりは聞かなかつたを證する。それとパウロが全く默して居る事とを合せ考ふれば馬加の記事が後の想像的產物であるは一層確かとなる。さて第二の相異點はイエスがいかに弟子等に現はれたかである。福音書の記事を信じてそれより出發する人々は墓の中にあつたイエスの死骸が再び生命を得て自ら墓を出で肉體的にしてしかも半ば幽靈然たる姿にて弟子等に現はれたと考へる。ところがこの考のあまりに怪談的なるを好まずしかも福音書の記事を棄つる能はざる人々はイエスは實は死んだのでなく一時氣絕したのみだと論ずる。是所謂假死說である。この說は全然排斥す可きである。かのシトラウスは既に甚だ痛快に其の弱點を曝露した。死きれずして墓からはひ出でしかも

弟子等の手當もつひに其効を奏せず再び墓に這込んだ氣息奄々たる半死人がはたして弟子等にこの人こそ死や墓に打勝ちて新なる永遠の生命を與ふる救主といふ信仰を吹込み得たであらうかと。げに弟子等の后の態度活動を見、彼等がいかに喜び勇んで復活して今もなほ生ける主に凡てを献げたかを思へばかゝる所謂「合理的説明よりは福音書の記事を丸呑みに信ずる方が遙かに合理的といはねばならぬ。さればとて純粹の奇蹟を信ずる所謂超自然論者も亦誤つて居る。しかしながら、肉體的でしかも幽靈然たる身體は事實よりは幼稚なる想像の産物に近いは別として、吾人は全く死したる身體が再び生命を得て墓をぬけ出し得るや否やなどの空論にて滿足してはならぬ。何故といふに、全く他に類のない事として起り得ぬ理はなく、科學は絶對的にそを否定する權利を有たぬ。故に若し福音書の記事が史料として疑ひを容れる餘地がないならば、科學は却てこゝに他の凡ての經驗とは矛盾する一新事實を得從て新しき問題を得て寧ろ己が幸福を喜ぶべきである。されば問題は福音書の記事がかくまで信ずるに足るかに存する。しかるにこの問題は否と答へられねばならぬのである。空虛なる墓が想像の産物であるは既に證明せられた。しからば幽靈的ながらしかも肉體的なるイエスの出現の記事はどうであるか。この記事は路加傳及ヨハネ傳に現はれ居るもので、イエスがイエルサレムに於て弟子等に現はれた事を豫想する。ところでこは既に歴史的批評によつて事實ならずと認められた。然しパウロとの矛盾は一層有力なる反證である。吾人はこの點に於てもパウロを標準として福音書の記事の史料としての價値を批判せねばならぬのである。さて彼はダマスコへの途上の轉心の經驗(くはしくは後に論ずる)を言顯はすに或はクリスト我に現はれたり(見られたり、コリント前一五の八)、或はわれ主イエスを見たり(コリント前九の一)、或は神その子をわれに於て啓示したり(加拉太一の一六)などの語を用ゐて居る。是等のうちはじめの二は彼がいかにクリストを見たかを語らず、從て福音書の記事と必しも矛盾しないが、第三のは明かに彼の經驗が内的精神的のも

パウロのクリストは靈的實在

のであつたを示す。そのことは彼がいかに復活后のクリストを考へたかを見れば一層明となる。彼にとつては復活したクリストは靈である。靈は肉即地上の物質の正反對を意味する。されば復活以來肉體的のクリストはもはや存在しないのである(後コリント五の一六)。かくの如き靈的天上的實在が福音書の記事に見ゆるが如く人にわが手足を觸れしめたり炙つた魚を食つたりする感官的の實在であり得ないは言を俟たぬ。若しパウロの前にかゝるクリストが現はれなあらば彼はそんな者は知らぬと斥けたであらう、クリストの僞物として咀つたであらう。パウロの基督觀より來る必然の歸結は彼が復活したクリストを見た時にはそを靈に於て精神に於て見たことである。尤も後に論ずる如く其際彼は一種のまぼろしに接し何等かの光を見何等かの聲を聞いたかも知れぬ。しかしかゝるまぼろしが彼の經驗の眞髓であつたのではない。其眞髓は彼が今まで否まむと力め咀はむともがいたクリストに彼は抵抗し得ず其の威と愛とに屈服し全く無きものにせむとしたクリストが

弟子等の經驗は內的精神的

己が精神的生命の原動力となりクリストに反抗せる生活が今や一轉して彼を中心とせる生活に變じたことである。今までは十字架上に死んだ罪人に過ぎなかつたイエスが今や彼の救主彼の生命其ものとより彼自ら生くるに非ずクリスト彼に於て生くるに至つたことである。是の如くにクリストを見たパウロが前コリント一五の三以下に於て己が經驗をペテロ以下の經驗と同列に擧げ且つ等しくイエス復活の證據として居る所より見れば他の人々の經驗も彼のと同種類のものであつたことは疑ひもない。若し他の人々がイエスの復活を肉體的感官的に經驗したならば彼は決して彼等の經驗を己のと同列にしかも靈的なるクリストの存在の證據として擧げなかつたであらう。かく論じ來ればペテロ其他の人々も彼と同じく內的精神的にイエスを見たのであることは否定すべくもない。彼等は心眼を以てイエスを見たのである心情に於てイエスの人格の活きかへつたを經驗したのである。肉體的復活は事實でない。己が手足を觸れしめ炙つた魚を食つたイエスは空虛となつ

復活の信仰の起源

幻像説

た墓と同じくイエスの復活に對する疑念を抑へむ辯護的動機より出た想像の產物である。之に反して直弟子等は墓を取調べ身體にさはつて見ねば信せぬといふやうな信仰薄き人々ではなかたのである。

しかし彼等はいかにして復活の信仰に達じたか。この信仰の起源は心理的にいかに說明すべきであるか。

近時流行せるは所謂幻像說である。弟子等はイエスのまぼろしに接して彼甦つたと信ずるに至つたといふ。この說は宗敎史上の幾多の類例殊にパウロの經驗を引來つて直弟子等の經驗を心理的に說明せむとするのである。彼等の信仰の突然あらはれた事はパウロの轉心の突然であつたことに類し、彼等が多人數一處にイエスを見た事は宗敎史上にいくらも類例があると論者はいふ。

吾人はかゝる心理的說明の價値を論ずるに先つて、イエスの復活を最初に信ずるに至つた人と他の人々とを區別せねばならぬ。一旦復活の熱心なる信仰が發生した以上はそがまぼろしを介して猛烈なる勢を以て傳播したとはいかにも容易に考へ得る事で、パウロ及其後のクリストを見た人々の類例も適切に當篏まる。故にパウロが前コリント書に擧げた種々の場合の內最初のを除いては說明も困難ではない。然し最初の人に於ては事情が餘程異つて居る。彼以前には復活の熱心な信仰がなかつた。否弟子等は失望遺瀨なかつたのである。處が彼はいかにしてかこの信仰を得弟子等の間に一大革命を惹起したのである。この革命の發頭人に於ていかにして其信仰が發生したか。これこそ問題である。吾人ははたしてペテロの心事を心理的に說明し得るであらうか。

吾人は否と答へねばならぬ。論者がいふが如く彼がパウロの如く何等かのまぼろしに接したことは、パウロが己の經驗と彼のとを同列に論じ居る所より見ても實らしい。しかしまぼろしだけでは何の說明にもならぬ。まぼろしを見れば必ず死んだ人が生きて居ると信ずるといふ謂れはないのである。されればまぼろしは副因で他に主因を求めねばならぬ。そは彼の新しき信仰を得る前の心的狀態に求むべきである。し

かるにこは彼の遁走の事實より推せば失望落膽であつたといふのが最も眞に近い。失望落膽はイエスの復活の信仰を俟てこそ喜ばしきを〻しき新生活とかはれ、其自身、か〻る新しき信仰の生活を生じ得やうとはおもはれぬ。失望の淵に沈んだ人がまばろしに接し勇氣を恢復することはあつてもそはまさに消えなむとする燈火がたゞ一時盛に燃え上る如くに、あとは却ていよ〳〵深き絶望と變じたであらう、ペテロに於けるが如く永久の結果を惹起したとは甚だ實らしくない。然らば彼の心的狀態は既に失望の域を脱して或は脱せむとして居たのであらうか。彼が他に優れて師を愛した事はいふまでもない。しかし其愛は彼の失望をます〳〵深めたではなからうか。彼はイエスがメシヤは死ぬかも知れぬといふたを耳にした。然し彼自身にとつては死は凡ての猶太人にとつての如くイエスがメシヤならぬ最も有力なる反證であつた。彼はまた師がメシヤは天の雲に現はれるといふたを聞いた。しかし彼はそを師がイエルサレムの決戰に於て勝利を得光榮に充ちた天上の實在と

變じ神の國を直ちに實現するものと解したであらう。彼の失望は彼の希望がイエスのと異つて死といふ觀念を全く斥けたことを明かに示すのである。處で其死が事實となり彼はイエスのメシヤたるに失望した后彼は其死をメシヤの天職と矛盾せぬものと考ふるに至り得たであらうか。尤もやゝ氣も落附いた後には師の言など追想して彼はもしもやの感に打たれたかも知れぬ。わが愛する師はひよつとしたらメシヤとして再び來るのではなからうかと考へたかも知れぬ。若しかゝる事があつたならばまぼろしが誘因となつて彼の心事に一轉機が來つたとは必しも考へ得られぬことではない。然しはたしてさる事があつたであらうか。吾人はかれの心事を知り得る何等の記錄を有せぬ。パウロの書翰は全く默して居る。福音書は互に矛盾せるのみかペテロが最初の經驗者なることすら語らぬ。處で吾人が福音書より間接に知り得るは寧ろ今述べた推測には不利益なる事實のみである。されば敢て他に類例を求めて類推する事も不可能である。パウロや後の信者の例は最も

歴史上確かなる事實は復活の信仰の發生のみ

肝要の點に於てペテロの場合と異つて居る。問題となるは前者に於ては復活の信仰が存した上の事、後者に於てはそが存せざる以前の事、前者に於て説明の論據たり得可きものが後者に於ては却て説明の對象即問題をなすのである。

かくの如く他に類例なき事實、説明の典據たり得べき記錄を缺き記錄より推理し得る事柄はむしろ其の不可能を證明するやうな事實――かゝる事實に關しては吾人は説明を擲たねばならぬ。愼重なる批評的態度をとらむとする歴史家は知らぬ事は知らぬと斷言すべきである。吾人の歴史的に確かめ得るは、たゞ復活の信仰の發生の事實のみである。而して其事實は實に驚く可きものである。イエスの捕縛及處刑と共に失望遺瀨なくあはてゝ故郷に遁げ落ちた彼の直弟子、彼とともに食ひ共に飲み、彼の有限なる肉體的生活にたゞず接して居た直弟子がいかにしてか知らず、彼復活せりとの信仰を得、あらゆる事實の反證に拘らず彼をメシヤ、しかも天上神の右に坐して歴史を支配する王とあがめ、恢復した

弟子等はイエルサレムに上る

る希望に凱歌を奏し、死もなやみも彼の爲めには喜んで受け、單に其のみならずこの、國民には排斥せられ罪人として忌むべき刑に處せられた人を罪と死とに打勝つわが內的生命の原動力、わが生命の主(使徒行傳三の一五)とまで經驗した。歴史上これと比較し匹敵し得る事實が他にあらうか。吾人はなしといはねばならぬのである。

復活の信仰は忽ちにしてペテロより他の弟子等に傳はつた。彼等がガリラヤを去つてイエルサレムに上つたのは特に説明を要せぬ。イエスは死なむ爲めではなく、人民を覺醒し神の國の住民を集め最後の決戰を敵と試みむ爲めに、國民の活動の中心點なる國都に上つたのである。彼は今は地を去つて天にあり近きうちに神の國を實現せむ爲めに再び現はれ來るは必定である。其時迄弟子等のなすべきは何であらうか。師の地上の活動の終つた其場處でそを繼續するほかはないのである。かくて復活の信仰は弟子等をして使徒たらしめた、即ち來らむメシヤと神の國とのうれしきおとづれを傳ふる傳道者たらしめた。この天職を

實行せむ爲め彼等はイエルサレムへ上つた。

而してこの新運動の首領はいふまでもなくペテロであつた。彼の心情に於て始めて死したイエスは活きた救主となり數千年の歴史を支配するに至つたのである。この一人物がなかつたなら、イエルサレムに於ける傳道も教會もパウロの轉心も從て世界的新宗教なる基督教も其の將來の歴史もあるを得なかつたのである。イエスは生前既にこの人物を特に重じた。パウロが信者となつた後イエルサレムの教會との聯絡を保たむ爲め國都に上つた時、彼はひとりペテロを尋ね求めた。彼は後此時を想起してペテロを知らむ爲めにイエルサレムに上つたといふた。ペテロは彼にとつては彼以前の基督教其ものであつたのである。イエルサレムの教會は次第にペテロよりもイエスの兄弟ヤコブを首領と戴くに至つた。これ血緣を重んずる猶太人の感情よりは甚だ自然である。しかもそはこの中心の教會が既に救ふ可らざる病痾に犯かされた徴候であつた。基督教の中心はパウロの活動と共に希臘羅馬の世界に移つ

た。而してこの地盤より發生した後の加特力教會はペテロを教會其ものゝ基礎と信じた。是事たる種々の附隨せる謬見を除き去れば、全く眞理である。復活の第一の經驗者として彼は基督教會全體の土臺の磐であつた(馬太一六の一八)。

弟子等は復活の信仰を得ると同時にメシヤ(クリスト)の信仰を恢復した。しかも其信仰は昔日のものとはやゝ趣を異にした。彼等が今や經驗したクリストはもはや地上のもの肉體をそなへたものではなかつた。彼等がイエスを天上に在つて神の右に坐し既にダニエルの豫言した如く雲に乘つて來り神の國を實現すべき神的實在と考へるに至つたのは驚くべき事ではあるが全く解し得ぬことではない。彼等は今や主としてアポカリプシスのメシヤの姿をイエスに適用するに至つたのである。然し彼等はイエスの口より出た「人の子」てふ名稱は用ゐず「神の子」てふ名稱を用ゐた。いかにもしてイエスをあがめむとする彼等の熱心には後

神の國の福音は變じてクリストの福音となる

の名がむしろふさはしく思へたのであらう。彼等はこの神の子が地上に生るゝ前にはいかゞありしかなどの問ひには未だ想到らなかつた。彼等は未だクリストの先在(地上に生るゝ前の存在)を說かなかつた。復活とともにイエスが眞のメシヤ即神の子となつたといふ考や洗禮と共になつたといふ考や(後にあれらはれたものではあるが)父なくして神の靈によつて生れたといふ考や此等の考がイエルサレムの敎會內に主として行はれたものであつた。然しながらイエスを今天上にある神的實在となすと地上に生るゝ前にもかゝる實在であつたとなすとは僅か一歩の相異である。パウロのクリスト先在說はかく既に直弟子等の信仰のうちに胚胎した。而してこの信仰は、イエス自身が「人の子」のメシヤたる自覺を有したとすれば、全く新な者として外より侵入したのではなく、イエスよりパウロに至るまで思想の聯絡はたしかに存した。

メシヤの信仰はかく復活し、超自然的の方面に於て發展したのみならず今や弟子等の說敎の中心點をなすに至つた。イエスはメシヤの自覺より活動したが彼の本旨は全く人物崇拜に反對であつた故、弟子等をして不知不識の間に己をメシヤと認めしむるやうに力めたものゝ、われこそそれとは名のり出た事なく、双びなき謙遜と信賴とを以て神意を貫徹せむを最上の目的とし從つて神の國を說敎の中心に置いた。しかるに今や事情は一變した。イエスは既に地上を去つた。しかも最大の屈辱を意味する磔刑に處せられて死んだ。この最後は猶太人にとつては最大の躓き、彼がメシヤならぬ最も明白なる反證であつた。弟子等はそれにも拘らず彼をメシヤと信じあがめた。彼等の神の國の希望はこのメシヤの信仰に基いた。しかるにこの基礎は眞の生命と幸福とをイエスの人格に於て發見した彼等の宗敎的經驗に於ては凡てにまして確實なものであつたが一般の猶太人には凡てにまして不確實のものであつた。それに加ふるに、彼等は自ら神の國をもたらさむとするものでなく、イエスより凡てのよきものをたふときものを受けたるを又受くべきを自覺せるものであつた。彼等がイエスと異つて神の國の福音を主とせずして

クリストの信仰の辯護

イエスはメシヤてふ一點に力を集注するに至つたは甚だ自然である。神の國の福音はかくしてクリスト・イエスの福音と變じた。イエスの活動の比較的かくれた原動力であつたものは今やあらはに弟子等の信仰の中心をなすに至つた。

舊約書をイエスの運命の豫言として用ゐる

十字架にかけられたメシヤは猶太人にはあまりに狂氣じみた考であつた。故に弟子等は其信仰を辯護せねばならなかつた。彼等はイエスの生前の不思議な業や殊に彼の復活を證據として提出した。しかしそれ丈では不充分であつた。かゝる際に彼等に役に立つたは舊約書である。そは一字一句誤りなき神の言葉としてひろく猶太人に信せられた。弟子等も勿論この信仰を分てるもの彼等は舊約書を借來つてイエスの運命を神意の定めた所として己等の爲めに又一般の猶太人の爲めに辯護せむと力めた。彼等は己が新しき信仰の眼もて舊き文字を讀み、己より發する信仰の光が反射して彼等の眼底に映ずるを見て其の深き眞意義を解し得たと信じた。彼等は義人が死の難を免かるゝを歌うた舊約書の句(詩篇一六の一〇、八六の一三、使徒二の二七、一三の三五)をメシヤの復活の意に解しイエスに適用した。彼等はまた義人の惱みを述べた處を直ちにメシヤのなやみに解しそを神意の豫め定めた所として辯護した。最もよき例はイザヤ書五三である。こゝにかのバビロン虜囚時代に出た無名の大豫言者は人の病を身に負ひ人の悲を自ら擔ひ人の罪の爲めに傷けられ自ら罰を受けて人に平安を與へ己が疵によつて人を癒す、神の僕なる義しき人を歌うた。原意はこの義人を以て罪なくしてなやみを受け他の罪を贖ふ理想的のイスラエルの譬喩としたのである。こを個人の意に解した人々も誰もメシヤには適用しなかつた。基督教徒ははじめてなやめるメシヤの意にそを解したのである。而してそを譬喩と解せぬ以上はこの解釋は甚だ自然といはねばならぬ。吾人はかゝる舊約書よりの證明がかのエチオピア女王の大臣(使徒八の二六以下)に對してのみならず幾多の猶太人に深き印象を與へたを想見し得るのである。

イエスの死の目的

さて信徒は一歩を進めてイエスの死にあらはれた神意の目的

までを解せむとした。メシヤの死が神の定めたのであるは既に明かである。しからば神は何故にそを定めたか。イザヤ書五三はこの問題にも明瞭なる答を與へ得るのである。イエスは他の人々の受くべき罰を自ら受けて彼等を救つたのであると。若然らばメシヤの死は神の罪人を救ふ深き愛の啓示となる。イエルサレムの教會より傳へ承けたものとして、パウロがクリストが聖書に從つて吾人の罪の爲めに死んだといふことを擧げ居るより見ればイエスの直弟子等が既にイザヤ五三などによつて彼の死を贖罪の死と解した事は甚だ實らしい。こゝよりしてもイエスこそメシヤ(クリスト)といふ信仰が彼等の傳へた福音の中心をなしたことは解し得るのである。

信徒の宗教的生活の特徴

信徒と他の猶太人とを區別する主なる特徴はかくの如くクリスト●イエス又はイエス●クリストの(イエスはメシヤ、救主なりといふ)信仰であつた。しかしこの信仰は死んだものではなかつた。それによつて彼等の內的生活は一變した。彼等はおのがうちに新しき生命の泉の湧き出づるを覺えた。彼等は神の愛とその奇しき業とに於てたえず活きた神の人格に接し、神の國と永遠の生命とを來らぬ先に日々經驗した。彼等の宗教的生活の特徴は傲慢にしてしかも小心翼々たるパリサイの徒、又希望と落膽との間をさまよへる一般民衆などに見るを得ざる無邪氣なる熱誠の發露であつた。苟もイエスを信じ彼に於て神を經驗し遠慮なく熱誠を表はしたものは「兄弟」として喜び迎へられた。かゝる名稱に於てまで彼等の新しき精神はあらはれた。彼等の熱誠は種々の方面に發露した。第一は「舌にて語る」(glosseis lalein 和譯新約全書に方言をいふとあるは適譯ならず)といふ現象である。こはうれしさのあまり自ら己に非るかの如く感じ明なる意識を失ひ恍惚として明なる言語を借るの遑なくたどうは言めいた聲によつて熱情をもらす狀態である。しかし彼等の宗教的熱誠はかゝる感情的現象に於てのみならず特に行爲として現はれた。信徒の多數は故郷と共に職業を去つてイエルサレムに上つた爲め忽ち貧困に陷

兄弟の名

舌にて語る

貧民救助

殉教

神の靈の働

つた。彼等は人の助をまたずしては生活だに出來なかつた。是に於てかやゝ富める者どもは己が家財を賣却してまでもこれらの貧民を養つた。貧民救助の爲め特に七人の役員の撰ばれたことがあつたによつてもそが團體的事業として盛に營まれた事は明かである。信徒の熱誠は勇敢なる殉教に於て其の頂點に達した。イエスの捕へられた時はペテロすら氣おくれして師を否んだのに、今や哲人にも非ず賢者にも非ず英雄豪傑にも非ずたゞ田舍の質朴なる漁夫や勞働者に過ぎざる弟子等は凡ての所有、生命までも擲つてをゝしくよろこばしく師に從ひあらゆる辱めも譏りもしもとも劍も物ともせず福音を宣傳した。彼等は凡てかくの如き非凡なる宗教的熱情の迸發を神の靈の働きと名けた。彼等は己自身にてに非ず神の力によつて生き又動くを感じたのである。尤もこの神の靈の働きてふ思想は當時の惡鬼につかれるてふ思想と同じく知的方面に於ては吾人外にある不思議なる靈と稱する實在が吾人に入り來つて吾人の人格を占領し不思議を働くてふ幼稚な世界觀に基くも

眞に活きた宗教

信徒は外面には猶に於て太人の生活を繼續す

のであるがさればとて吾人は其の宗教的意義を忘れてはならぬ。イエルサレムに集つた信徒の小團體は皆眞に神と救主とを經驗した人々であつた。彼等の舉動は、かの「舌語り」に於けるが如く、時としては常規を外づれてやゝ狂氣じみた事もあつたであらう。現に傍觀者には彼等は時に甘き酒に醉うた者と思へたのである。然しながら彼等には宗教は教義の丸呑でもなければ人眞似でもなければ習慣でもなければ儀式でもなければみえや體裁でもなく、活きた經驗僞りなき熱誠眞心よりの實行、全世界にもましていたふとき彼等自身の生命であつた。

かく新しき信仰と宗教的生活とは動いたものゝ彼等には猶太教と全く分離して新なる教會を設立せむなどの考はなかつた。彼等は神のイスラエルに與へた希望がイエスに於て實現されたを信じ自ら眞のイスラエル國民の眞髓を以て任じたのみであつた。既に論じた如くイエス自身すら決して新宗教を開かうとはせなかつた。彼の新しき精神は時として律法の舊套を破つて露出したが、彼は律法を神意として尊重し殊

更らにそを破つたり又は全然否認したりはせなかつた。父祖の遺習を何より大切に守りだにせば能事了れりとなすパリサイの徒の主義には反對したるも國民の風俗習慣其ものは彼は敬重した。イエルサレムの信徒が依然猶太人としての生活を無邪氣に繼續したは甚だ自然といはねばならぬ。律法の宗教的價値ふ根本問題は未だ彼等の意識にあらはに提出せられなかつた。彼等は忠實に律法を守り神殿に詣づる事をも怠らなかつた。

其故時々迫害を蒙つたにも拘らず彼等はしばしの間は比較的寛大の處置を受け比較的平和の日を送つた。この平和を永久に失はしめ、あまつさへ基督教會内の分裂を惹起した誘因は異邦人間の傳道であつた。

異邦人傳道の起源は全く明瞭とはいひ得ぬ。しかしパウロが始めたのでないことは確かである。彼自身も數ある書翰のいづれに於ても其の開始者を以て自任し居らぬ。ロヽマの教會すら彼よりは獨立に起つたのである。異邦人傳道は、猶太教に於て既に久しく行はれ來つた事を

思へば、基督教會に於ても信者の數が增すに從つて誰れが特にそを主張したり鼓吹したりするといふことなしに、自然の勢を以て行はれるに至つたのであらう。使徒行傳(一一の一九以下)によれば迫害の爲ィエルサレムを追はれた信徒のうちに、いくらかのキプロス及キレーヲ出の猶太人があつて、それらがアンチオキアにて希臘人にもクリストの福音を傳へたといふことである。多分是が異邦人傳道の嚆矢と見るべきであらう。後パルナバスとパウロとはこゝに來つて彼等の事業を繼續した。兎に角アンチオキアに於て、過半は猶太人の律法を守らざる信徒より成り、自ら率先して異邦人傳道の從事する基督教會がはじめて起つたのである。基督教徒(Christianoi)てふ名の起つたのもこゝであつた。こは信徒自身の撰んだ名稱ではなく、反對者の與へたものであるが、この事實はそこなる新教會がいかに猶太教會と異つて第三者の眼に映じたかを示すのである。しかしこの新教會はつひに生れたばかりの基督教の死活に關する大問題を釀すに至つた。律法の宗教的價値如何、基督教は猶太教

の一小分派に止るべきか又は獨立なる新宗教として一大飛躍を試むべか――これ其問題であつた。この問題の解決の任にあつたのはパウロである。

事蹟

史料

使徒行傳

書翰

第四章　パウロ

事蹟

基督教の原始時代に於て最も明瞭にあらはれ居る姿はパウロ(Paulus, Paul)である。彼の弟子ルカ(Lukas, Luke)の筆に成つた使徒行傳は其の後半に於て彼の事蹟を信ず可き史料によつて語つて居る。殊に其うちわれらてふ語を用ゐたる處(一六の一〇―七、二〇の五―一五、二一の一―八、二七の一―二八の一六)は著者が同伴者として見聞した所を書き記るしたもので、些細の點に至るまで描寫甚だ忠實である。第廿七章の如きはこの時代の航海術を知る最も重要なる記錄に數へられ居るほどである。

――加ふるに、彼については最も價値ある史料が保存せられた。彼自身の書翰に於て吾人は今日もなほさながら彼の聲を聞き彼の面影を見得るのである。尤も彼の名を戴ける書翰のうち後人の手より出たものもある。テユービンゲン學派はローマ人、コリント人及ガラテア人に宛て

た四個を除いては皆後人の作と考へたが、今日はかゝる過激の說は一般に棄てらるゝに至つた。しかしテモテとテトスとを宛名とせる三個、通常牧者書翰(Pastoral brief)と稱せらるゝものは、今日に於ても大多數の學者によつて、一部分は別として全體としては、眞正ならずと認められて居る。エフエソ書及第二テッサロニケ書については議論區々である。コロサイ書も疑はれ居るが、眞正となす說の方が有力である。されば今疑はしきものを除けば眞正のパウロの書翰と認むべきものは八つある。出た時の順序に列ぶれば次の通りである。(一)第一テッサロニケ書、(二)ガラテア書、(三)第一コリント書、(四)第二コリント書、(五)ローマ書、(六)コロサイ書、(七)フイレモン書、(八)フイリピ書。なほ其他にもパウロの書翰のあつたことは確かであるが、失はれた。さて牧者書翰を除けば彼の書翰のうち一つ二つ正しからぬものがあるまいが、多からぬが少からぬが、さほど重要な問題ではない。パウロの人格や事業や信仰が其爲めに異つた光を放つに至るやうなことは決して無い。上の八個のうちフイレモン書は個人

に宛てたものであるが其他は皆處々の敎會に宛てたもので、內容も調子もくさ〳〵である。吾人は爲めにパウロの思想や信仰を種々の方面より觀察し得るので、其丈史料としての彼の書翰の價値は多いのである。しかし彼の如くいづれの書翰に於ても滿腔の熱誠をそゝぎ己が全人格を打込む人に於ては上の八個以外のものが失はれたのはさほど歎くに足らぬのである。

パウロはキリキア洲の都タルソに生れた。彼が自らヘブライ人(第二コリント一一の二二、フイリピ三の五)と呼べるを見れば純粹なる猶太人の血統を受けた家族に生れたのみならず、彼の兩親及彼自身の母語はアラマイ語であつたらしい。タルソは主として希臘人よりなれる大都會で、商業が榮えたのみならずストア哲學の有名の學校もあつて、希臘文明の一中心であつた。パウロの受けた敎育は純猶太人的であつたが希臘文明の大氣のうちに成長したことは決して無意味ではなかつた。そは彼をして後に、猶太人に對しては猶太人たる如く、希臘人に對しては希臘

人たるを得しめ(第一コリント九の二〇以下)彼に異邦人の大使徒たる資格を與へた。彼は夙に希臘語を學び、修辭上幾多の缺點あるに拘らず、それを自由に操つた。彼はこの時代に於て眞に生命ある希臘語を書いた少數の文章家の一人であつた。言語は決して單に外的形式的のものでなく不知不識のうちに思想を媒介する。これ丈でもパウロが希臘思想の影響を受けずには居られなかつたは明かである。彼が希臘の詩人や哲學者を自ら讀んだかは疑問であるが彼の書翰は彼がストア哲學の思想や希臘詩人の句をさへ知つて居たことを示して居る。彼はパリサイ流の模範的教育を完成し將來は學者にならむ爲め、遠くイエルサレムに上り有名なる學者ガマリエル(Gamaliel)に就いて學んだ。彼は渾身の力を父祖の宗教にさゝげ熱心に於て遙に儕輩を拔出でた。基督教徒を知るに及でこの熱心なるパリサイ人の心は忿怒にもえた。磔殺せられた犯罪人をメシヤとて神の撰民に押賣せむとは何たる破廉恥ぞ。彼は直ちに此等の惡逆人の迫害に加はつた。狂せむばかりに熱した彼は彼等を

イエルサレムより逐ふ丈では滿足せず、彼等を塵にせむ勢にて有司の委任狀を携へダマスコへ向つた。しかるに至りつかざる前この狂熱なる迫害者の運命は盡きた。彼は復活したイエスを見其の敵し難き威力に屈した。迫害者は信者となつてダマスコに達した。

この彼の轉心(Bekehrung, Conversion)の成行については吾人確かな事を知り得ぬが、ペテロの場合と異つて、實らしき説明はなし得るのである。パウロの場合に於ては既に、復活したイエスの熱心なる信仰は存在した。熱心なる信仰が迫害者にも感染すること、既に内心に熟し來つた新しき信仰が突如として意識にあらはれ轉心を惹起すことは、歴史上に類似が少くない。それに吾人は使徒行傳及パウロの書翰に於て不充分ながら説明の方針を與ふる史料を有つて居る。

使徒行傳は三ヶ處(第九、二二、二六章)に轉心の記事を載せて居る。それらが一々文字通りに信ずるに足らぬは相互の矛盾でも明であるが、根本に於ては互に一致して居る。すなはち、パウロはダマスコへの途上、天よ

轉心に先てる心的狀態

りの光を見又聲を聞きイエスの復活して今もなほ生けるを知りクリスト(メシヤ)として彼を信ずるに至つた、換言すれば、彼はイエスの幻像に接して迫害者より信者に激變したのである。さてかくの如きまぼろしは準備なくして來るものでもなく、又既にいへる如く、其丈で凡てを說明し得るものでもない。是に於てか吾人はこの經驗に先てるパウロの心的狀態を究めねばならぬ。

然しながらこの問題に關しては使徒行傳は勿論のこと、パウロ自身の書翰すら直接の解答は與へぬ。パウロが過去を追懷するや決して心理的研究の眼を以てせなかつた。彼の後の宗教的意識にとつては轉心は前後全く相反對せる二の時期の分れ目であつた。其以前はクリストの愛を離れ、否それに反對した迫害者の生活、其以后はクリストの愛に動かされかつては何よりも貴かつた律法も血統も猶太人の特權も全く糞土に等しく擲ち、其愛の福音に凡てを献ぐる信者、使徒の生活、而してこの轉化を來したものは勿論神のめぐみであつた。今日學者の提出するやう

パリサイ的生活の矛盾

な問題は當時の人々には存在しなかつたのである。吾人の解答は其故實らしい推測で滿足せねばならぬ。

轉心の缺く可らざる條件はおのが主義や信仰に對する疑念である。こは必しも自我の中心的感情を占領せずともよい、必しもそれと明瞭に自覺せられぬものでもよい、從て轉心の后に於て其を境として前后がいかに異れるかといふ點にのみ注意するに至つては忘られて仕舞つたものでもよい、パウロに於て若しひよつとしたら眞理は己れよりも基督教徒の方にありはせずやといふ感が起らなかつたら彼の轉心は解すべからざる事實とならねばならぬ。然し吾人は幸にしてかゝる感情の存在を實らしと思ふ理由を有するのである。基督教徒の美はしき献身的の擧動は自ら迫害にたづさはつたパウロのやさしき感じ易き心情には深き印象を留めたであらう。かゝる擧動を產出す信仰は果して全く神を無視した虛僞であり得やうか。彼がイエスの事蹟や說教について耳にした事はましてや全く狂氣の沙汰とも思へなかつたに違ひない。牽强

附會してまでも舊約書の文字にあらゆる眞理の源を求めむとする學者的敎育を受けたパリサイのパウロは基督敎徒がかのイザヤ書五三をイエスの運命に適用してメシヤの死を辯護せるを全く閑流しには出來なかつたであらう。若し彼等の言が正しいならばイエスの死は深い意義を得來る。犯罪者の死ではなく、むしろ神の罪人を救はむ無上のめぐみとなる。げに神はイスラエルに救を約束した。しかも眞に「義」をそなへたものでなくば神の國に入る事は出來ぬ。イスラエルははたして其資格を有せるであらうか。否しかいふ自分はどうであらうか。かく考へ來つたパウロはひそかに戰慄を禁じ得なかつたであらう。

神の前に於ける「義」は、既に第一章に述べた如く、パリサイ人の努力の最高の目的であつた。しかるに此義は「律法」の實行によつてのみ達せらるゝのである。律法ははたして嚴密に實行し得らるゝであらうか。たゞ否應なしに服從を要求する命令は喜び進で善をなす素直な心根を養ひ得るであらうか。律法は慾心を禁ずる。しかも慾心は却て禁ぜられた爲めに刺戟せられ增長し律法の命令を利用して威を逞うすることはなからうか。たゞしてはならぬといふ冷かな命令は却て慾火に油をそゝぎはせぬであらうか。我は律法の神聖なるをいかで否まう。しかも悲しいかな、わが罪惡はわれを束縛して善をなす自由を與へぬ。わが願ふ所は行ひ得ず、わがにくむ所はわれ却つて之を行ふ。――かのローマ書七の七以下の感深き記述は勿論基督を信ずる新しき立場より信ぜぬ者の悲境を描出したものであるか、單に一片の理論ではなくパウロ自身の深き經驗に基いて居るのである。自ら經驗した者でなくばかくまでも痛切に罪惡に苦しめる者の悲境を描き得ぬ。――パウロはたゞせねばならぬといふ冷かな義務の觀念が人心を根底より改造し進んで善をなす熱誠を與ふる力なく、己が一つ〳〵の業や功によつて神に近かむとするものは却て遠かり棄てられねばならぬを自ら深く切に經驗したのである。彼はおのが心の底に矛盾を感じ不調和を覺えた。しかも他に救濟の方法を知らなかつた。基督敎徒の說敎は耳障りのよいところもある、しか

し、十字架にかけられたメシヤ――あゝわれは惡魔の誘惑に屈してはならぬ。是に於てか彼は層一層の熱心を以て今までたゞ一の救の道と知來つた律法にかじり附いた。しかも彼は身をもがいてゐる〳〵深淵に沈むる溺死者の如く狂熱をますごとにます〳〵矛盾に深入した。處が他方に於ては神の愛クリストの恩みを讃美するうれしげな聲は谷むるが如く宥むるが如く迫害者なる彼の耳に響いた。よろこばしげに死に就く勇敢なる殉教者の口よりは彼は期待した咀の語を聞かず却て敵を祝福する意外の音を聞いた。彼は是等の印象を打消し得たであらうか。

彼の轉心はこの矛盾の解決に外ならぬ。穩ならぬ雲行に既に蓄へられた電光が一聲の霹靂と共に天地に閃めく如くに、不安なる狂熱のうちに既に熟した信仰の光はまぼろしを介して彼の心を照したのである。彼が無きものにせむとすればするほど彼を屈服せしめた復活して天上にあるクリストの姿は天よりの光としてあらはれ、抑へむとして抑へきれなかつた良心の聲は、サウロ（パウロの基督教徒とならぬ前の名）汝何故に我をせむるぞ」といふ天よりの聲として聞えた。彼が本來激し易き神經を有せること、又幻覺の傾向を有せること（第二コリント一二の[illegible]）、目的地に近くに從て心の不安の益々度を加へたこと、さなきだに人をして恍惚たらしむる砂漠の熱氣――是等を合せ考ふれば、彼の精神的革命が幻像を介して突如と現はれたことは心理的に解し難いことではない。然しながらかく幻像を伴うたといふ故を以て彼の宗教的經驗を虛僞又は迷妄と貶さむはあまりに淺薄である。吾人は自然的因果の世界の上に價値の世界、自由なる精神の世界のあるを忘れてはならぬ。パウロの宗教的經驗は、其の眞髓に於ては、たゞ恐ろしき裁判官のもとに送つた恐怖不安の生活より慈愛ぶかき父のもとに送る、無上の平和、幸福の生活に移り、自ら進んで善をなし得ずたゞ否應なしに盲從ししかも盲從の報酬を要求する奴隷の狀態を去つてよろこび勇んで自ら善をなし得る自由なる神の子の境に入つたを意味する。吾人はこを進歩と認め得ぬであらうか。この進歩は病的の神經作用であるといふ以外に何等の眞理を

も價値をも含まぬものであらうか。

轉心と共にパウロは全く新に造られた者なるを感じた。クリスト・イエスは彼の生活の原動力となり、彼はクリストとともに死し共に甦り、自ら生くるに非ずクリスト彼に於て生くるを覺えた。彼はイエスの直弟子等と同じく、復活して今もなほ生けるクリストを經驗したのである。然しながらこの經驗は彼に於ては彼等に於てよりも一層深大なる結果を來した。彼等の經驗は或意味に於ては、一旦失つた信仰の恢復であつた。其信仰は勿論深められ新な趣を發揮したが、しかも彼等の生活を全然改めしむるものではなかつた。彼等はイスラエルの眞髓を以て自任し又猶太人としての生涯を繼續した。然るにパウロは彼等と異つても其信仰の敵であつた。彼は純猶太人的感情よりして十字架上のメシヤの矛盾を切に感じ父祖の宗教の爲め神の名譽の爲めにかいる愚劣なる惡逆なる新信仰を全力をそいで迫害した。しかるに今や其信仰は却て正しきものとなつた。十字架上に死したものは甦り天上にあり彼

基督教は世界的の新宗教

異邦人傳道は必然の要求

自らに現らはれてメシヤであり神の子であるを示した。彼はこのメシヤを信ずるに至つて律法によつて得られなかつた心の平安とよろこび進んで善をなす力とをはじめて得た。十字架とメシヤとの全く相容れぬ兩端は今や相結び附いて猶太人的感情の誤れると律法の宗教上に全く價値なきことを證明した。其故に猶太人たるはもはや宗教上必要の條件でない。クリストの前には猶太人もなければ希臘人もなく男もなければ女もない、凡ての人間は悉く神の前には同等である。かくしてパウロは始めて基督教を猶太教を超越した人間的世界的なる新しき宗教として經驗した。この新經驗をなした彼には異邦人傳道は自然の成行の結果でもなければ又單に許容して差支なき事でもない、新宗教其もの本質より來る必然の要求であつた。クリストを信ずるに至つた異邦人は客分として迎らるゝのでもなく又猶太人の資格を得た后にはじめて信者として認めらるゝのでもない。律法を守らむとするは彼等にとつてはクリストの新しき福音を無視するにあたり、むしろ害になるのみで

異邦人の使徒

轉心后の十七ケ年

ある。猶太教の偏狹なる黨派根性を超越したイエスの精神はパウロに於てはじめてそれと名のり出たのである。かくて熱心なる迫害者は熱心なる「異邦人の使徒」(Heidenapostel, Apostle of the Gentiles)と變じた。彼は後に至つて(ガラテア書一の一六)ダマスコ途上の經驗を己が新しき天職の基礎となし、信者的生活の發端を異邦人の傳道者としての生活の發端として居るが、こは必しも彼が轉心と同時に新傳道を開始したといふ意味ではない。彼は轉心と共に猶太教に於ては見なかつた新しき宗教的生命を經驗し、この經驗は彼をしてこの新しき福音を異邦人間に傳ふる責任を自覺せしめたのである。

ダマスコ途上の出來事の后十七年間はパウロにとつては平穩であつたやうに見える。彼はダマスコにて洗禮を受け、後しばらくアラビアに滯在し更にダマスコに歸り、かくて三ケ年を經過した后はじめてイエルサレムに上つた。そこに留ること十數日、主としてペテロと交り又イエスの兄弟ヤコブと知合になつた後、彼はイエルサレムを去つて、こたびはシリア及キリキアの地方に赴き十四ケ年間をそこにすごした。――さてはじめの三ケ年間の彼の活動については殆ど知るによしないが、後の十四ケ年間のは使徒行傳によつて大體を知る事が出來る。彼は先づ故郷タルソに歸りそこよりベルナバスに招かれてアンチオキアに行つた。かくてそこなる注目すべき新教會は彼の活動の主なる地盤となつた。彼はそこを中心としてあたりの地方にも傳道し彼の新しき福音によつて多くの信者を得た。彼の成功はほのかにイエルサレムにも聞こえ、人々昔の迫害者が受けた神のめぐみを感謝した。

パウロの反對者

しかしながら平和はながく續かなかつた。アンチオキア教會が隆盛に向ひ異邦人の傳道が成功を示すにつれてイエルサレムの信者の間に律法を顧みぬこの新傳道法を聞き傳へて心安かに傍觀し得ぬものが生じた。異邦人傳道は行ひつゝもそを主として猶太人の勢力の擴張の意味にのみ解し來つた純猶太人的感情にかゝる自由の傳道が少くも突飛なる改革と感ぜられたは無理もないことである。其等の人々の或もの

は自らアンチオキアに降り實地を觀察して自由運動の抑壓を試みむとした。これらの「ひそかに入込んだ僞りの兄弟等」(ガラテア二の四)は律法の根本的規定の一、猶太人の外的特徴の最も著しきものなる、割禮を受けた者でなくば救はるる能はずと說教した。この主張は猶太人たらずは基督の救にあづかる能はざるを意味し從てパウロの自由主義を全然否認するものである。彼等はイエスの實行を模範としイエルサレムの世教會の風習を先例とし從て最大の證權を標榜して新運動を威壓することも出來たに違ひない。しかも其の結果は何であつたであらうか。若し彼等の主張が貫徹し而してイエルサレムの有力者が彼等の運動に左袒したなら、パウロの事業にはこれにます危險はなかつたであらう。若彼が屈服したならば、新しき宗教としての基督教は生れたばかりに死んで仕舞ひ、猶太教の一分派としてはそはかすかな殘りの息を保ち得たらむも、後の猶太人的基督教の陷つた運命の示す如く、ほどもなくつひに歷史より消滅したであらう。されればとて彼が若しあくまでも反抗したな

らば、彼の教會はイエスの直弟子等より全く分離し、從て歷史的聯絡を全く斷つて孤立の位置に陷りつひになす事もなく滅亡に了つたであらう。其故彼の事業、否基督教其ものの死活は今や全くパウロの双肩にかゝつた。彼若しイエルサレムの有力者より新しき自由主義の承認を得、あらゆる障礙に打勝つてそを貫徹し得ばよし、さもなくば基督教は全く希望多き將來を失はねばならぬのであつた。

この危機に際しパウロは彼の特別の使命を感じて――彼は後に當時を追懷して(ガラテア二の二)神の啓示に接してといふた――イエルサレムの教會及其の有力者と直接談判をなして事を決せむ爲めバルナバスと共にイエルサレムに上つた。クリストの靈のあるところには必ず勝利あるべきを信じ彼はこの最も直接の、しかも最も大膽なる方法を取つたのである。彼はまた異邦人の受けた神の恩みのいかに深きかを示さむ實例として割禮を受けぬ信者、希臘人テイトスを伴うた。至りついて、異邦人に傳へた福音及其の成功を開陳し「彼徒らに走るや又走れるやの

判決を求むるや、アンチオキア教會を騒がしたかの保守主義の反對黨は凡て信者となつた異邦人はあらためて割禮を受くべきこと、先づ手始めとしてテイトスにそを施すべきことを、飽くまでも主張した。かくて今やはじめて「律法」の宗教的價値從て教會内に於ける異邦人の權利てふ問題は直弟子等及イエルサレムの信者等の前にあらはに提出せられたのである。これ等の人々ははじめよりこの大問題を明に意識したのでも研究したのでもなく、たゞほのかにパウロの成功を耳にして神の奇しき力をたゝへ居たのみであつた。しかるに今やまのあたりこの重大なる問題の提出せられたを見ては彼等は迷はざるを得なかつた。猶太人として彼等は律法を神聖視し來つたのみでない、彼等はイエスがいかにそを重じ又それに從つたかを知つて居た。このイエスが神の國を建てむ爲天より來る時、はたして律法を少しも守らぬ異邦人をも己等と同樣に神の民と承認するであらうか。こは無下に然りとも答へ得ぬ問題である。しかしながら他方に於てパウロ及バルナバスの開陳した異邦人間

にあらはれた神の奇しき働を聞いてはそをまたむげに否認も出來ぬ。多數はいづれをそれとも決し兼ねた。獨り惑はなかつたのは首領株である。ヤコブ、ペテロ及ヨハネの三人はパウロの成功に於て明かに神の恩みを認め、パウロとバルナバスとの差出した手を握り、ペテロ及他の使徒等は猶太人に、パウロは異邦人にと傳道の區域を明に分ちて妥協を調へむを主張した。たゞイエルサレムの貧民の爲めの集金を委托した外は彼等は何等の條件をも附加へなかつた。パウロの熱心と誠意とはつひにかく有力者を動かし保守主義者の頑强なる反對に對して勝利を得たのである。しかし等しく賞讃を値ひするはかれにこの勝利を得しめた有力者の態度である。イエスに親炙し彼がいかに律法を重じたかを現に目擊した直弟子等が、師を見たことすらなく、それのみならず、かつては恐るべき迫害者であつたもとのパリサイ人パウロの改革、――純猶太人的感情には神聖なる神意を無視するとの外は思へぬ突飛な改革を排斥せず、否それに於て神の靈クリストの靈の奇しき働を認め、兄弟として

彼の差出した手を握つたを見れば、彼等がいかにイエスの新しき精神の感化を受け「律法」以上の新生命を身に經驗したかは明かである。

イエルサレムに於ける所謂「使徒會議」の結果は根本的の解決ではなかつた。有力者は律法、殊に割禮を宗教上全く價値なきものとは認めなかつた。彼等は自身及猶太人には律法を必要とし從つて猶太人間にのみ傳道せむと決したのである。しかしながらこの妥協によつてパウロは律法を希臘人にまで強ひむとする反對派に打勝ち傳道の自由を得たのみならず、彼の主義其もの勝利を得た。何故といふに若し律法の根本的規定例へば割禮の如きだに守らぬ異邦人が來らむメシヤの國に入るを得るならば律法は宗教上の價値を全く失つて猶太人さへ特にそを守るを要せぬことゝなる。パウロの自由傳道の權利を承認するは律法の價値を否認するに等しい。律法が猶太人には必要と信じたイエルサレムの有力者の立場は其故全く矛盾である。其矛盾はいつかは曝露すべきである。

ペテロはかの妥協の成立した後、アンチオキアの教會を訪うた。其の盛況を實地に觀察せむ爲であつたであらう。元來猶太人は律法を嚴密に守る時は異邦人と食卓を共にし得ざる筈なるに、この教會内の猶太人の信者はさる事には頓着せず希臘人と甚だ親密に交つた。この自由なる宗教的熱誠の發露に動かされてペテロは兼ねての覺悟をも擲つて希臘人と食卓を共にした。しかるにヤコブより送られた者どもイエルサレムより來つて彼に警戒を與ふるや、彼は突然希臘人との自由なる交りを絶ち食卓を共にするを避けた。この有力者の取つた態度は他の猶太人の信者にも影響し彼等は相率ゐて「律法」に立戻り、パウロの忠實なる友であつたバルナバスさへ大勢に呑まれて今までパウロと共に熱心に主張し來つた主義を擲つた。パウロの慘憺たる苦心も今や再び水の泡に歸せむとした。傳道旅行より歸り來つてこの危機一髪の間に迫れる樣を見たパウロは決然立つて會衆の前にてペテロの矛盾せる態度を攻擊した。「君は凡ての異邦人を罪人と見、律法を守りて神の義を得むとする

猶太人の一人であつたに違ひはあるまい。然らば何故に基督を信じその信仰を必要とするに至つたのであるか。律法のみにては「義」を得べからず、基督を信ずるによつてはじめて救はるべきを認めた故であらう。若然らば君は實は律法を全く擲つたのである。異邦人と食卓と共にした君は現に行ひによつてこの新しき眞理を示したのである。しかるに今や再びその自由をすてゝ律法に戻つたを見れば君が再び律法によらぬ生活を罪惡と認むるに至つたは明かである。君をして律法を擲てしめたは誰ぞ。基督である。然らば君の擧動はクリストを罪惡の助長者と見做すものではなからうか。畢竟かくの如き不都合な歸結を來らしめたるは君自身の矛盾、クリストを信じながら律法を全然棄つる能はざる矛盾である。一旦律法を擲て異邦人的生活をよしと認めた君は今に至つて異邦人に猶太人的生活を强ひむ權利があらうか。われは君の如く基督を罪惡の助長者たらしむるやうな矛盾の態度は取らぬ。我は律法を行ふによつては誰も救はるべからざるを知る。我は全く律法より死んだ。我はもはや自ら生くるに非ず、クリストわれに於て生くるのである。我いかで神の恩みを無視しやう。律法によらでは救はれぬならばクリストの死は犬死であつた」と。是パウロの演說であつた(ガラテア二の一四以下)。

ペテロ後に異邦人の傳道者となりローマに赴く

吾人はこの演說がペテロにいかなる印象を與へたかを知らぬ。然し彼が直ちにはパウロの主義に從はなかつたことは確かである。若しかゝる結果があつたなら、パウロが後に至つて反對者に對しおのが主義と信仰とを辯護し、イエルサレムの有力者がいかにおのが事業の權利を認めたかを述べたガラテヤ書に於てそを全く默し居るは解す可らざる事となる。然しながら一旦アンチオキアにて律法より自由なる生活に足を踏入れたペテロがいつまでもはじめの矛盾の立場に留つたとはまた考へ難い。

古き傳說によれば彼は後にローマに赴きそこにて殉教の死を遂げたといふことである。この說は第一世紀の終に、しかもローマ教會より出

た、クレメンスのコリント人に與ふる書の第五章に既に現はれ居るもので吾人はそを疑ふべき理由を有たぬ。彼は何の爲めにローマへ行つたのであらうか。パウロ一派の自由傳道を妨げぬ限りに於て猶太人に律法を必要とする福音を傳へむ爲めにとは不可能の事ではないが實らしい事ではない。それに、後は無論のこと既に第一世紀の末に、希臘羅馬人よりなれるローマ教會が彼をおのが教會に屬する殉教者として異邦人の大使徒パウロと並んであがめ居るを見れば彼も亦異邦人間の傳道に從事するに至つたは甚だ實らしい。彼を以てアラマイ語以外には解せず語らず從て猶太人以外の傳道には通譯を要したとなす在來普通の見解は近時學者(ツアーン)の研究によつて誤謬なることが明になつた。彼は當時の世界語たる希臘語にて説教もなし得たので從つて此方面に於ける異邦人傳道の障礙は全く無かつたのである。たゞ彼がいつ頃よりかゝる新しき道に踏出でたかは明かでない。いづれにしても彼が後に至つてはじめの矛盾の立場を去りパウロに倣つて異邦人間に福音を宣

傳し、つひに世界の都ローマに至り、不幸にもネロ帝の狂暴の犠牲となつた(六四)は甚だ實らしいのである。イエスの直弟子の隨一なる此人をまで動かしたパウロの人格の偉大はさる事ながら、親炙した尊き師の命令によりたるに非ざる又其師の實行には反せる新生活、新主義を眞理の爲め福音の爲めには甘んじて取つたこの直弟子をも吾人は賞讃するを忘れてはならぬ。他の直弟子等のうちにも彼に倣つて同じ方向に進んだ者は多少あつたであらう。

此等の人々と異つてパウロの反對者はイエルサレムの「使徒會議」以后も其の反對運動を繼續した。彼等は小亞細亞より歐羅巴にまでパウロを追跡し彼の設立した新教會に入込み時としては隱險なる手段に訴へてまでも彼の勢力を殺ぎ彼の事業を破壞せむとした。パウロも全力をそゝいで彼等と奮鬪した。かの猛烈なる、熱誠の迸れる、從て人間としての長處をも短處をも最も明瞭に示せるガラテヤ及コリントへの書翰はこのめざましき奮鬪の產物である。

かくの如くパウロの事業及成功は保守主義者の反對運動をますます激烈ならしめたと同時に、又猶太人の反動をも挑發した。「律法」の宗教的價値を否認し猶太教に對して新しき一層高き宗教なるを自覺するに至つた基督教に對しては猶太教の偏狹なる黨派根性はもはや寛容の態度を取るを得なかつた。使徒行傳(十二章以下)をはじめパウロの書翰や福音書は既に猶太人の敵意のいかに激しかつたかを示して居る。彼等はパレスチナの基督教會を迫害し(第一テッサロニケ書二の一四)其の傳道者を捕へて或は裁判處にわたし或は會堂に於て鞭打つた(マタイ一〇の一七)。彼等はそれにも飽足らず人を諸方に派遣し、互に氣脈を通じて、パウロの事業の妨碍を試みた。彼が第二コリント書を書いた時には(一一の二四)彼は既に五回猶太人の手より笞を受けた。彼等は正面より基督教を攻擊した(第五章を見よ)のみならず、隱險なる手段を用ゐて到る處、官民を煽動し信徒を讒謗した。基督教徒は其の集會に於て人肉を食ひ、亂雜なる肉交に耽けるなどの風説を弘めたのも猶太人であつた。ネロ帝の時のをはじめとして後の迫害には彼等はつねに表面より裏面よりたづさはつた。――しかしながら猶太人の敵意は一面に於ては基督教にとつてはたしかに利益であつた。そは基督教徒に彼等の宗教が猶太教の一分派に非ざるををしへ新しき宗教の自覺と責任の念とを强めた。パウロの事業を妨げむとあせつた猶太人は間接に却てそを助け、かくて主として異邦人より成れる基督教會はローマ帝國の到る處に起り、あらゆる障碍を排して日に月に隆盛に赴いた。

之に反して「律法」を必要とする保守的の基督教徒の運は日に月に傾いた。彼等のうちには既に述べたパウロの反對者即ち異邦人にまで律法を强ひむとする者の外に、イエルサレムの妥協に基いてパウロの事業を承認しつゝも己等は律法を必要とする者もあつたが、共に次第に勢力を失ひ僅かにパレスチナ地方に殘喘を保つのみとなつた。第二世紀の後半に至つてこれらの「猶太人的基督教徒」(Judenchristen)は却て異端者として排斥せらるゝに至つた。かのイエルサレムの會議以後の基督教の歴